

6530

15-4-1



浜林生之助先生

追憶特集号

緑丘

全国版

(通巻)No. 35号
(38年度5号)

(編集責任者)

大阪市東区道修町三の一
塩野義製薬株式会社内
藤目英三

(緑丘大阪支部)

大阪市北区梅田八番地
新阪急ビル8階
日本麦酒(株)内

浜林生之助君の面影

苦米地 英 俊

浜林生之助先生追憶特集号を「緑丘」が企画されたことは、心温まる嬉しい限りで亡友に代って感謝したい。

緑丘学園には有為の人材で、長寿を保たせたいと惜しみても余りある人が少なからずいた。その一人に浜林教授があげられる。良識に富み、国を愛し、人と親しみ、心を許して交わる友であり、師であった。木部君、大野君などはトランプで夜も明した親しい仲であった。

専門では all round な人材で、その点では、当時は勿論現代でも稀に見る英学者であった。文学に強いが語学に弱い人、その反対な人、文学にも語学にも通じているが、邦語への表現が物足りない人の群がる中で、文学を解し、語学に通じ、邦文をよくしたこの人は是非大学の教壇に立たせた人であった。科目は違わが御息正夫君が大学の教壇に立たれていることはせめてもの慰めと云えよう。

浜林君は単なる学者でなく理財の道にもたけ、友人を援助したこともある。年一回は家庭サーヴィスで温泉滞留も怠らなかつた。自分も家族のためめに五年に一度でも心に期しながら唯の一度も実行せざり来たことをいまさらの如く恥じている。

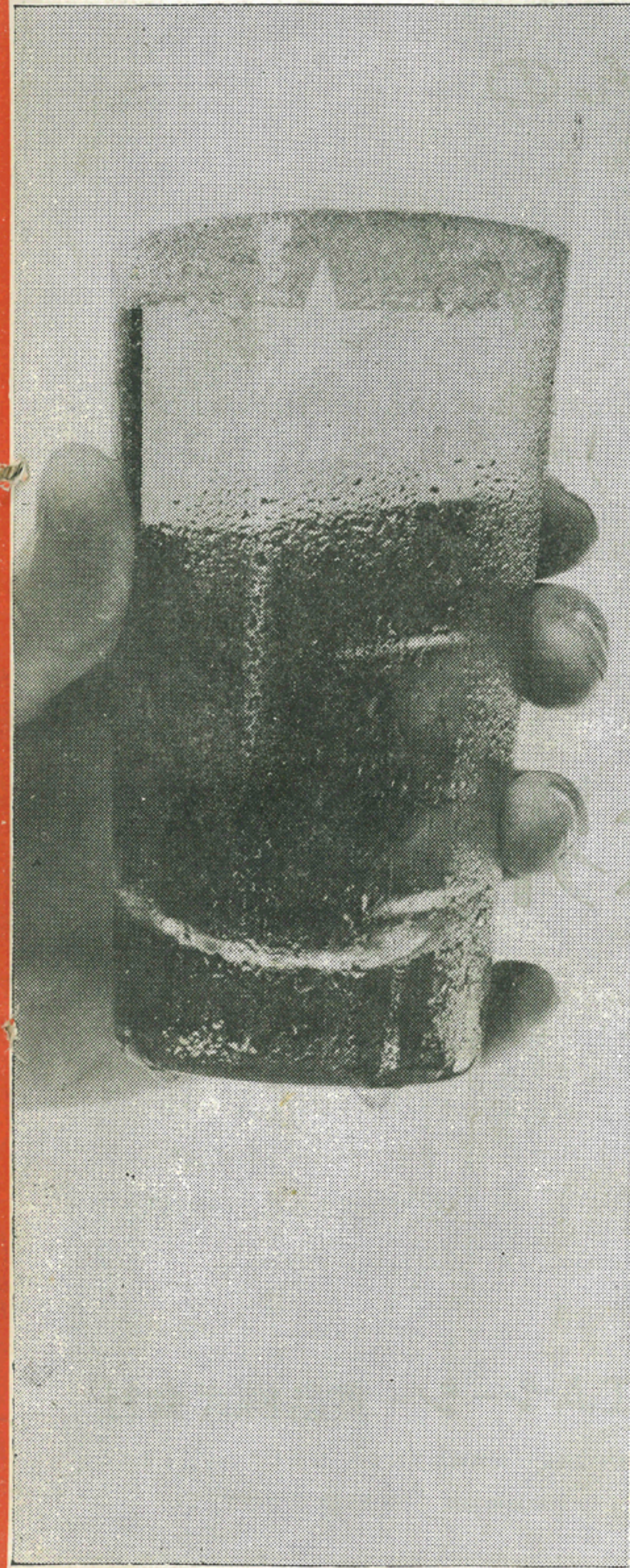
浜林君のそれ程の注意にも拘らず、君の晩年、君の家庭に病魔の侵入したことは誠に不幸の至りで、お気の毒に堪えない。君の臨終のとき、大野君に御息正夫君のことを呉々も頼んだと大野君から聞いた。子を思う親の心は山よりも高く、海よりも深いと昔からいい伝えられているが、その通りだとしみじみ感ずる。

浜林君と緑丘学園との縁結びには自分も片棒をかついたことを記憶している。初代渡辺校長の高邁な識見で中等教育界から、駿足の逸材を抜擢して学園の教授陣営を強化することになり、自分が命を受けて駆け廻り、五人の候補の筆頭に挙げたのが、自分であり、留学のために奔走したのも自分であった。

五人のうち二人小樽で採用することに相談はきまったが、他の一人は在任地の校長が手放さず見送りになったが、後に名古屋高商へ赴任し、残る三人もそれぞれ専門学校の教授に就任した。しかし、その中で最も光ったのは矢張り浜林君であると信じて疑はない。

三八・一二・二二

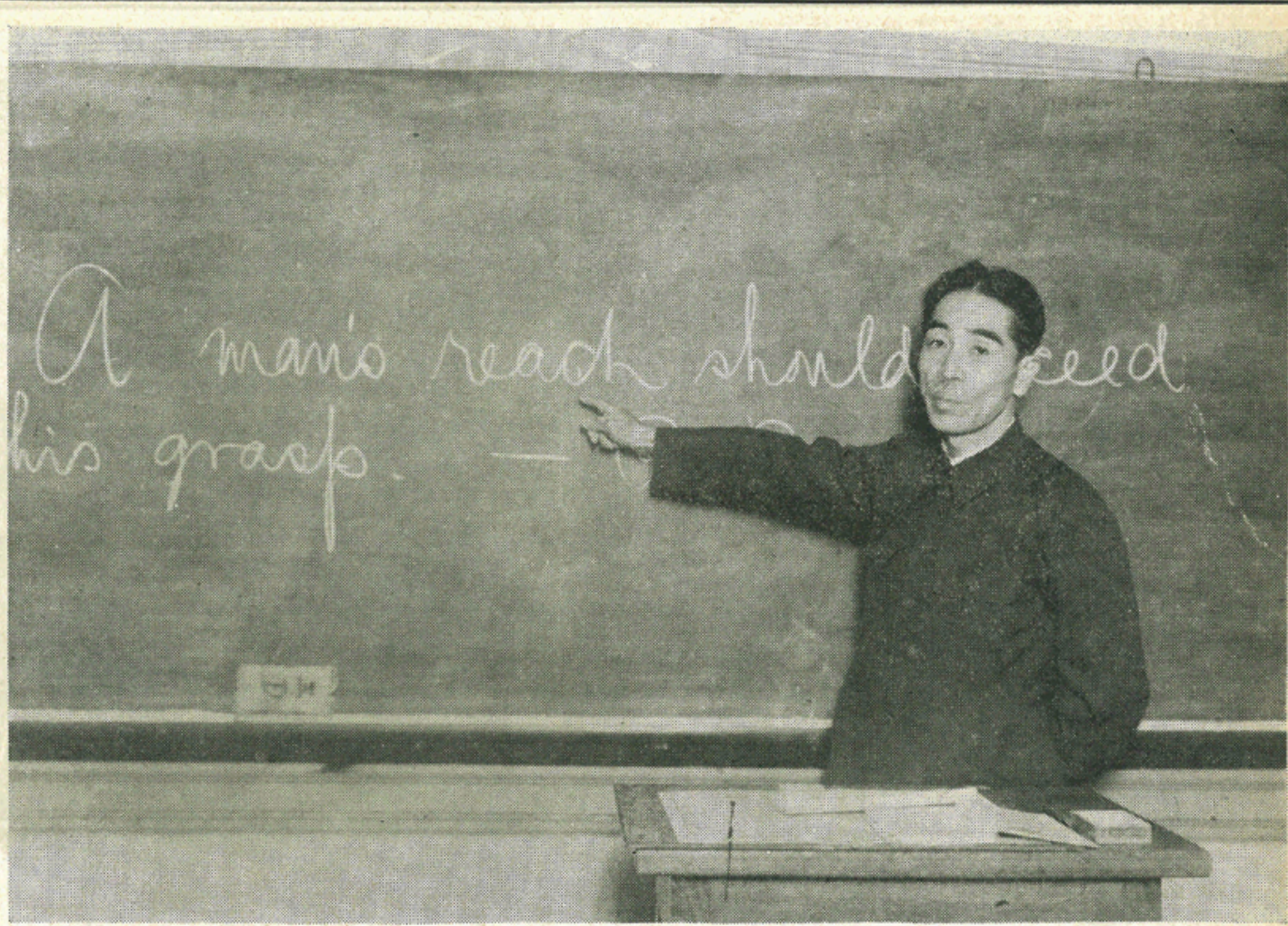
(元小樽高商三代校長)



うまさもでっかい 生ビール!

ミュンヘンにも、ミルウォーキーにも、こんな「でっかうまさ」はありません。ご存じ北海道名物「生ビールびん詰め」です。「瞬間殺菌法」により、今までのナマより保存がききます。普通ビールの三本以上みんなて飲んで三五〇円

サッポロ★ ジャイアンツ



浜林生之助先生年譜

明治二十年八月九日 三重県多気郡に生まれる
 明治三十七年 四月 三重県師範学校に入学
 明治四十一年 三月 同校卒業
 同 年 四月 広島高等師範学校に入学
 明治四十五年 三月 同校卒業
 同 年 四月 鹿児島県川内中学校教諭に就任
 大正 五年十二月 岡田一枝と結婚
 大正 八年 四月 福島県福島中学校へ転任
 大正 九年 三月 小樽高等商業学校教授に就任
 昭和 二年 三月 イギリスへ留学
 昭和 四年 八月 帰国
 昭和 十年 七月 小樽高等商業学校生徒主事兼教授に任ぜらる
 昭和 十六年 十月 勅任官待遇
 同 年 十月 小樽高等商業学校教授兼生徒主事に任ぜらる
 昭和 十七年 六月 高等官二等
 昭和二十一年 三月 小樽経済専門学校校長事務取扱を命ぜらる
 同 年 五月 校長事務取扱を免ぜらる
 昭和二十二年十一月十九日 老衰性結核のため死亡
 同 年同日 従三位に叙せらる
 同 年十二月 正三位に叙せらる

KYOC

最高の品質と
最高の技術を誇る

KYOC の製品

- ポータブルコンベヤー 各種
- クライマーコンベヤー 各種
- スラッターコンベヤー 各種
- ローラーコンベヤー 各種
- コンクリートミキサー 各種
- バッチャープラント 各種
- 自吸式ポンプ 各種
- バーチカルポンプ 各種
- モータープーリー 各種
- ウイーンチ 各種

KYOC 総合建設機械のトップメーカー

光洋機械工業株式会社

取締役社長 奥村正美 (昭17年)

本社	大阪市北区南同心町一丁目二番地	電話大阪(351)3091~5(代表)
大阪支店	大阪市北区南同心町一丁目二番地	電話大阪(351)3091~5・8291~5
東京支店	東京都千代田区神田小川町二丁目三番地 (新小川町ビル)	電話東京(291)1216・1309 3381~5
九州営業所	福岡市中浜口町一九番地	電話福岡(3)1841・2414
名古屋出張所	名古屋市東区堅代官町一四番地	電話名古屋(94)1315
仙台出張所	仙台市北材木町三九番地	電話仙台(22)5247
札幌出張所	札幌市南十一条西八丁目五四一の二番地	電話札幌(5)9868
高松出張所	高松市塩上町一一八一番地	電話高松(3)4392
広島出張所	広島市松川町四の一番地	電話広島(61)7620
工場	寝屋川・守口・吹田・東京所沢	



(後列右 浜林生之助)

父のことなど

浜林正夫

経済学博士
小樽商大教授

幼少時代

父生之助は明治二十年八月、三重県多気郡乙部村に生まれた。松阪市から東の方へ二里ばかりよったまいたくの僻村である。父の父は仲蔵、母は末津乃といったが、父が五才のときに祖父を失い、一九才のときに祖母を失って、姉と二人きりの孤児となった。家は農家で、家系などはまったく分らない。私がいつか、浜林という苗字は、明治維新のあとで百姓にも苗字をつけろといわれたときは、海のそばに林があったから浜林という名にしたのではないかと、いつたら、父が笑いながら、そうかも知れん、といったことがあった。隣近所にも同姓の家はない。貧乏暮らしだったことだけは間違いないようである。

小学校では秀才だったという。父の姉はいまでも元気だが、イクヤン、イクヤンといつて可愛がつてくれたという話だ。とくに国語や作文が好きで、小説家になりたかったらしく、家をとびだして上京したこともあった。師範時代の作文がずっと保存してあって、私もみせられたことがあったが、そのなかに、「小説家たらんとする友へ」というのがあった。小説を書くことが男子一生の事業たるにふさわしいか、というようなことを論じたもので、結論がどうなっていたのか、もう忘れてしまったけれども、小説家志望を諦める気持を、友人への手紙という形で自分にいじかせたものであったように思う。その当時の作文という美辞麗句をつらねるのが名文ということ

であつたらしいが、そういう傾向には反発を感じていたらしく、個性的な文体に努めていたようにも思われる。夏目漱石に私淑していたのではないかと、いまになって感ずるのだが、「この日や天気晴朗とくると一瓢をたずさえて墨堤に遊ぶ月並な連中」という「我輩は猫である」のなかの一句を、よく口にしていた。

津師範から

広島高師へ

小説家志望を諦めて師範学校に入ったのは、家が貧乏で学費がなかったせいである。当時の師範学校は授業料がいらない。津の師範ではたしか国文科だったと思う。英語に志したのは広島の高師へすすんだからで、それも漱石の真似ではない。しかし、父が英語の教師として有能であつたとすれば、それは日本語に熟達していたせいではないかと、私は思っている。英語を日本語に訳すときにも、それが日本語として美しいかどうか、翻訳の能力的テストだ、というのが、父の基本的な考え方であつた。

広島高師時代に小日向定次郎先生につき、その学風の影響をうけた、ということ。英語の背景「再版」のときにいただいた福原麟太郎先生の序文で、はじめて知つた。高師時代のことは、それ以外は全然分らないが、英語の基礎を学んだのはこの時期なのだろう。卒業後すぐ鹿児島県の川内中学校へ赴任し、ここで七



川内中学教師時代

小樽へ

大正九年、小樽へ赴任、これから三十年近い小樽での生活がはじまつた。半生を小樽ですごしたのだから完全に小樽の人になりきつてもよき。そんなものだが、心の底にはいつまでも他国ものの意識が残っていたらしく、「死ぬときは雪のないところへ死にたい」と、よくいっていた。赴任後、二年ばかりたつてから四寮の舎監になり、寮にくつついた官舎でくらししていた。この前後に長男、次女、三女が生まれ、長女が死に、次男が生まれた。大正十五年の緑丘新聞のコラムに、「旧ろう、浜林教授の家に玉のような男児生まれ」とあるが、この玉のような男の子が次男の私である。

舎監時代のことは、古い卒業生の方が私よりよく知つておられると思う。ピンポンをしたり、パイオリンや尺八をやったり、テニスをしたり、多芸多趣味の方だったが、同時に寮の一室を書斎にして猛勉強をつづけていた。トマス・ハーディに傾倒していたのは、このころである。古いスクラップ・ブックに、「作品を通して見たるハーディの人生観」という新聞きりぬきがあつて



後列 中央 浜林生之助

年間、中学の教師をしていて、そのあいだに結婚し、長女をえている。そのころの写真がいまでも残つていて、髭をはやしてイガグリ頭のことわい顔をしている。ボート部の部長をしていたのか、生徒と一しよにフイックスのオールを握つた写真もある。川内から福島へうつつたときさつはよく分らないが、校長と喧嘩をするなどいって来た教頭が、自分で校長と喧嘩をはじめ、そのまきぞえをくつて、いにくくなつたとかいふ話である。このへんで卵でもぶつつけてひとあばれすれば、まさしく「坊ちゃん」だが、そこまでは漱石の真似をするわけにもいかなかったのだらう。福島の生活は一年ばかり、ここで苦米地先生にスカウトされたという話は有名で、伊藤整氏も朝日

ある。どこかで講演をしたときの原稿が速記をとせたものらしい。大正十二年のはじめに、H・G・ウェルズの「盲人国」を訳注つきで研究社から出したのが処女出版ではないかと思う。つづいて大正十三年の末に健文社から「英文構成法」をだし、その後、昭和二年までの二年間に健文社から近代英文学叢書という訳注ものを十冊だしている。出版順にならべると、ハアディ「恋無情」、ロンドン「獣人」、ウェルズ「幻の園」、ギッジング「毒魚(しみ)」、ポー「黒猫」、ゴールズワージー「女心」、ジェイコブス「替玉」、ステイブンスン「見果てぬ夢」、イアン・ヘイ「混線」、キプリング「幽霊俵」となる。このほかに昭和二年にやはり健文社から「ハーディ短篇選集講義」をだしているから、この時期、つまり父の年令でいうと三十代の後半は、著作活動では一生のうちで一番多産なときであつた。中心になつてゐるのはハーディだが、ここにあげられた作家に共通する何らかの傾向があるのかどうか、何かそういうものに父がひきつけられていたのかどうか。英文学の素人である私には分らない。ただいえることは、このころの父は、英語そのものより、英文学に興味をもつており、さらに英文学をおしてイ



右から四人目ボート部長

ギリスという国に関心をよせていたらしい、ということである。近代英文学叢書のうちのいくつかは、名訳というお賞めをいただいたようだが素人の私が見るとずいぶん思ひきつた意識のようにみえる。翻訳は創作だ

という考え方がここでも基本になっ
ているようで、作品の題名なども、
原題にはまったくこだわらずに勝手
な題をつけている。
この叢書の最後にてた「幽霊傳」
の広告のところに、「以下続刊、愛
読を乞う」とあるが、続刊はでなか
った。イギリス留学のためである。

イギリス留学

帰朝

このときの旅行期は、「英国まで
鹿島丸船中にて」という題で小樽
新聞に連載された。ハマさんのキン
クス・イングリッシュより、わたし
のブローケンの方がよく通じたこと
がある、というのは、同行された大
野純一先生の自慢話である。文学を
とおしてイギリスという国に非常な
関心をよせていた父は、この留学の
機会にイギリスの風土と人間を肌
に感じ、英語と英文学の背後にある
のを生々しく感じとったことであ
る。帰朝の翌年（昭和五年）、留学
中の見聞は「英国文学巡礼」として
まとめられ、健文社から出版され
たが、ここにあらわれているのは、も
はやイギリスへの関心などというも
のではなく、ハーディを生み、キ
ツを生んだ国への愛着ともいうべき
ものである。第二次世界大戦がは
じまって、鬼畜米英などと人々が
いはじめたころ、「我国に好意をよ
せぬ英国であるから、ドイツが苦
めてくれるのは痛快であるが、ド
イツの爆撃機よ、どうかあの美しい
樹だけはゆるしてやってほしいもの



だ」と新聞に書きしるしていたほど
その愛着はつよいものであった。
留学から帰ってからの「文学巡礼」
のほかに、「Alpha of the Plough」
（昭和五年、健文社）と「イソップ
物語講義」（昭和六年、健文社）を
出版したが、その後、英文学よりも
むしろ英語教育に専念するようにな
った。プライト・リーダーズという
英語の教科書を作ったのは、昭和八
年ごろのこと、つづいてアロー・リ
ーダーズをだし、そのあいまに、オ

には毎年、家族づれで登別の奥のカ
ルスという温泉へ静養にいらして
いた。いまの大学の教師の給料では、
とてもそんなことはできないが、そ
のころの「高商の先生」といえば、か
なりの高給とりだったし、いづころ
からか株をはじめた、その配当
もかなりあったらしく、おまけに教
科書の印税も少なくはなかっただろ
う。教科書の奥付には検印を、子
どもたちが競争して押して、いくら
かの小遣いをもたらしたのを、覚えて
いる。ファミリー
ンジャーなどの
外人教師をよん
できてブリッジ
をやったり、も
う少しあつた
大野、木部両先
生と花札に興じ
たり、そうい
うゆりのある生
活のようであつ
た。酒はほとん
ど飲めなかつた
が、芸者と話を
するのが面白い
といつて、ときには料亭に客をよん
だり、よばれたりしていたらしいが
その請求書がまわってくると、「奥
さんがハイといつてすぐ払ってくれ
るそうだ」と若い先生を羨しがらせ
たという。芸者の膝によりかか
写真があつて、さすがにこれは一寸
気がひけたらしく、しばらくは家の
ものに見せずに机のひきだしに隠
してあつた。
世の中がだんだん窮屈になって、
とくに英語などをやっているもの

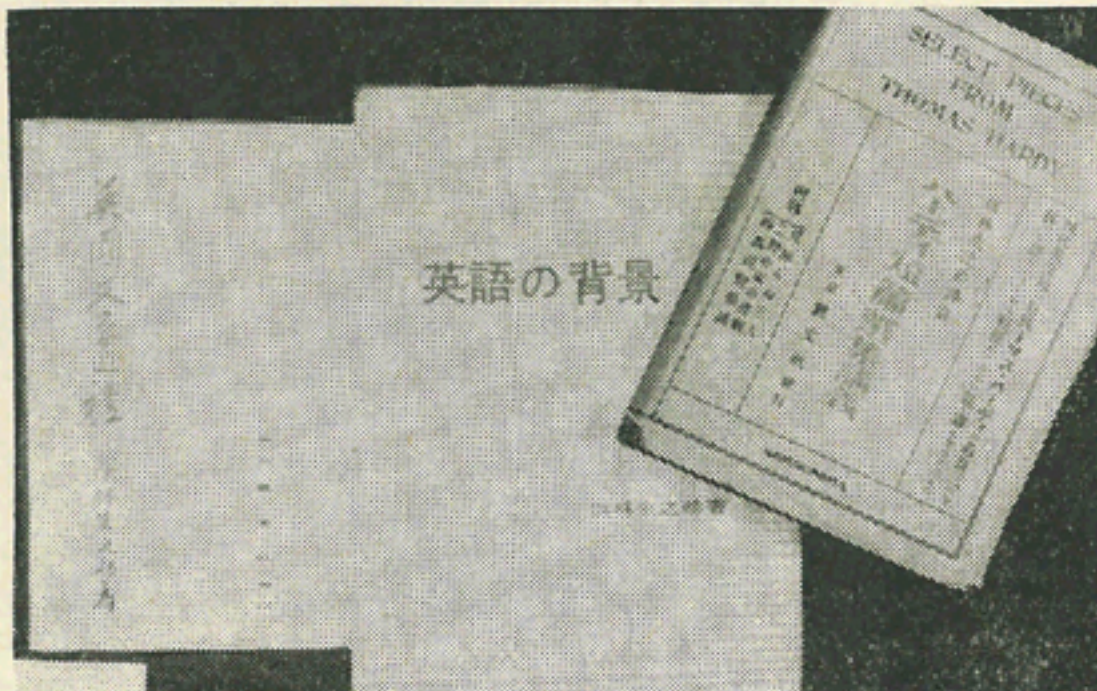
戦中・戦後

太平洋戦争がはじまった昭和十六
年十二月八日朝の臨時ニュースをき
きながら、「困ったことになった」
とボツンとつぶやいたのを、私は異
常に記憶している。私たちの熱狂的
な興奮のなかで、このつぶやきがあ
まりにも異質のものであつたためか
知れない。そうかといつて、また、
戦争に抵抗したり、非協力をしめし
たりすることもできるわけではなく
大多数のインテリと同じように、結
果的に戦争に協力させられていたと
いうことになるのである。保護観
察司という仕事をひきうけて、思想
犯の人々の指導にあたっていたこと
もあつた。
父は私をよく、散歩につれてい
た。子どものうちで、とくに私がつ
れてゆかれたことが多いように思
う。いつか赤岩の方まで散歩にい
たとき、漬物用の大根がいつぱい干
してある道を歩きながら、
赤々と陽はつれなくも秋の風
といふ句を知っているか、と私に話
しかけたことがあつた。中学生の私
はそんな句はもちろんな知らず、何
かいいかげんの返事をしていたよう
に思うが、父はむしろ独りごとのよう
にこの句をくりかえしながら、秋の

陽をあびて山道を歩いてきた。この
ときのことだけが、不思議に私の記
憶に残っている。そのときの父の気
持は推測のかぎりではないが、いま
思いだしてみると、いい知れぬ淋し
さがにじみだしていたように思われ
てならない。
私の姉二人が結婚し、兄が病気で
療養所に入り、私が東京の大学へす
すんでからは、もう六十に手のとど
ころとする身体で、防空壕をほり、
ときには肥えくみまでして、母と二
人の暮しをまもっていた。私が入営
するとき、「兄は病死で、弟は戦死
か」と、やけ気味に洩らしていたと
いう。幸いに私はすぐ終戦になつて
帰ってきたし、兄の病氣も一時回復
して家にもどつたので、また父も
をとりなおしたようであつたが、そ
のころ、すでに父の身体がむしばま
れはじめたのかも知れない。文字
どおり老體をおしての最後の御奉
公は、占領軍の通訳だった。そのこ
ろ私は家にいなかったため、よくは
知らないが、この仕事は身体にこた
えたらしい。昭和二十二年三月の卒

業式を最後に、床についたきりで、
とうとう雪のある国で世を去つて
いった。死ぬ前数日は、ほとんど眠
りどおしだったが、その日の朝、いや
な夢をみたよ、と話していた様子は
ふつうとあまり変わらなかつた。し
かし死期の近いことは自分で知つて
いたらしく、遺言めいたことを、時
々話したりしていた。襖一つへだ
た隣の部屋にいた兄が、ふと気がつ
いたら寝息がやんでいて、息をひき
とつていたというほど、静かな死で
あつた。
床の中で父はよく占領軍用のポケ
ット版の小説を読んでいた。そのな
かには、モームの「かみそりの刃」
などもまじつていたが、大体は詰ら
ない小説のようであつた。ときどき、
「おいおい、わしの知らん単語があ
る」といつて、ニコニコしながら紫
色の鉛筆でしるしをつけたりしてい
た。
どういうわけか赤鉛筆を使わず、
本に書きこむアンダーラインは紫色
だつた。机の上を整頓しておくこと
も有名だつたらしい。私などは、論

文一つ書くのにも部屋中を散らかす
のだが、父の机の上には本が一冊の
ついているだけで、ノートをとること
もあまりなかつたようだ。それでい
て、「英語の背景」のような本がど
うして書けるのか、私にはいまだに
謎である。全部、頭の中にしまひ
んであつたんだよ、という人もい
るが、私はきつと何か独特の整理法が
あつたのに違いないと思つている。



同族意識
あなたの会社の製品を緑丘人に
使って貰っておりますか？
調査をされた事がありますか？
一番大切な顧客
それは緑丘人です。
「緑丘」への広告をお忘れなく

大君の立ちかおせ

雲たなむく

行年記念の日

漢林生之助

(昭和12年10月9日 天皇陛下
御来校時の書) 古関周蔵氏所蔵

積水化学工業 新日本窒素肥料 旭化成工業 特約代理店 プラスチックの総合商社
田中弥商事株式会社
取締役社長 田中弥三郎 (大12) 専務取締役 山家利典 (昭12)
(本社) 大阪市東区北浜2丁目74番地 TEL 06 6556代~9
(東京出張所) 東京都千代田区神田淡路町2丁目19番地 TEL 03 2271・5259

浜林生之助先生の思い出

古 関 周 蔵 (六一三)

(千代田火災海上保険(株)会長)

人物月旦に色々な角度がある。社会人としての手腕、力働、声望等々とか、或は一個の私人としての人柄、素質とか色々な角度からの言い方があるけれど、我々が師事した先生ということになると、以上のことから離れて純然たる懐旧的なことが主となり、またそれで良いのだと思う。

私が浜林先生を教壇に仰いだのは多分大正七年か創立福島中学の三年生の頃だっと思う。粗野で無邪気で手のつけられない腕白の東北の少年だった我々は学校当局も各先生方も少からず手を焼いておられたこと、いまにして思うが、事、浜林先生の時間となると、全く手のひらを返したように温順で勤勉な模範的な学生と化して教場一人残らず静まり返って先生の講義を謹聴したものだ。

遂ぞ一度も叱ることも恐い顔もされなかったし、若い者に迎合するオクタートの高い講義でもなかった。淡々として流れるが如きものであった。それなのに静かに講義を受ける我々の態度は全く不思議であった。

寒い東北の冬昼食の後各教室でストープを囲んでワアワアわめきながら押し合い、へし合い、ふざけて取捨つかぬ程になっても誰かが廊下から小声で「ハマ、ハマ」というと、さしもの混乱もピタリと静まったのだから不思議だったし、それは「恐いハマ先生来る」というデマで冗談で、おどかしとわかって皆でワアと笑っても、また元のようにふざけが復調して高潮することがなかったのだから面白い。悪戯小僧共に何か良

心的な思い返しに魔術が「ハマ、ハマ」という低音のさゝやきのなかに含まれていたとしか考へられない不思議さを持つていた。考へて見ると、この原因は先生独特の皮肉毒舌の外に一つはこうであったと思う。浜林先生の赴任されるのと入れ代りに当時先生に人気のある英語の先生二人、S先生、A先生の二人がどつかへ転任されて姿を消して了った。この二人は平素我々々々向って半分自慢話として「自分達二人はいつも学生時代二番、三番を争って優秀な成績を保っていたものさ」という。好奇心に充ちた腕白小僧共は早速「一番を争ったんぢやないのですかい？」と聞き返すと、「一番は浜林先生が平素ちつとも勉強しない奴で、あいつには我々二人は歯が立たなかつた」という意味のことを何度か聞かされていたものだ。それが浜林先生が福島中学に現れるや否や二番、三番を争ったというお二人は忽然として消えて了ったのだから丸つ切り英雄崇拜の下地の出来上った所へ降り立った光背を持つ

た偶像みたいなものだったろう。先生は英語の本街道を歩むべくして歩まれた方ではなかつたらしい。しかし、それは却って何かの魅力となって我々を惹きつけていたと思はれる。不思議と私個人浜林先生のお気に入りの生徒だった。遊びに来いといはれて、福島市の真中にある稲荷神社の近くの奥まった先生のお宅に遊びに行ったら、奥さんはお産のためか、何かで郷里の伊勢に帰られたらしく自炊の鍋もそのまゝだったし、いまでも目に焼付いているのは「沢の鶴」の二合瓶が空っぽで転がっていたことだった。何でも火の気の無い所であるながら密柑を御馳走になつて、それでいて先生の話を聞く興奮して頬をほてらして帰った覚えがある。

先生の思い出を
花雲

濱林生之助

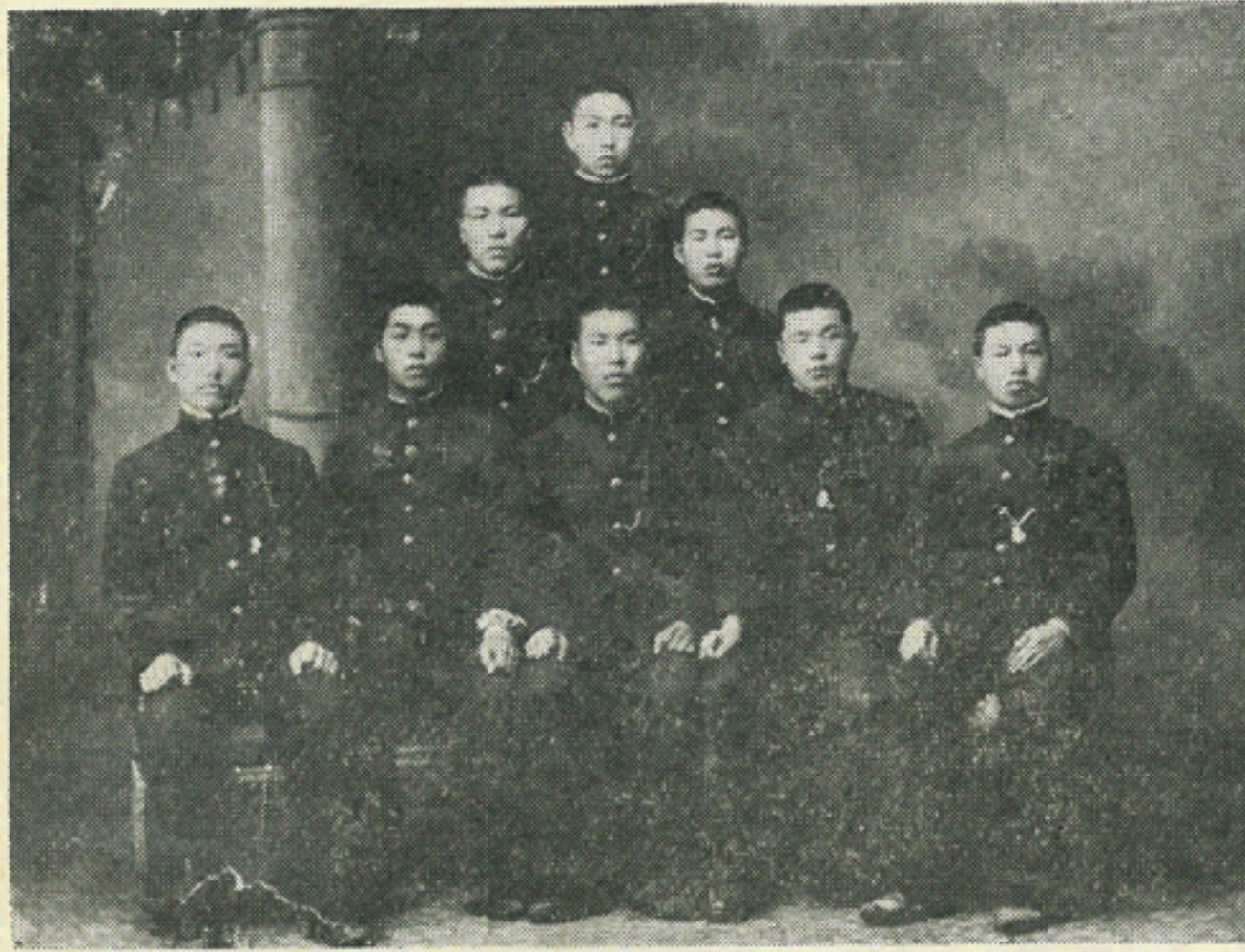
思い出を

花雲

浜林先生のアルバムから

(上) 左から二人目

(下) 左から三人目(立って腕組)



年生になって登校して見ると尊敬の偶像「ハマ」さんがいない。聞く所によると小樽高商の教授となつて、もう田舎中学には来られないと言ふことだった。

何だかすっかり気落ちしていたら小樽から部厚な手紙が先生の特長のあるペン字で配達された。ときめく思いで嬉しく読んだ覚えがある。一ツ橋は落第しても落胆するな。先生ってものは学問を教へるが、そればかりでないし、また教へ切れるものでもない。自分を思い出してくれたら、どうか愈げずに勉強しなけりやならぬと思ひ起して呉れ。

と云うしんみりしたものだ。そしてこの子ゆえ総てを捨て、黙然と何時迄もかくあらんかと思へり生之助と書いて、かねて頼んだ先生の半身の写真が入れてあった。そして一ツ橋も良いが雄大な北海道の自然の中で身心を育成して、それから一ツ橋の本科に行くことも出来る。その気があるなら小樽に来いと。私は一も二もなく翌年春小樽に走った。

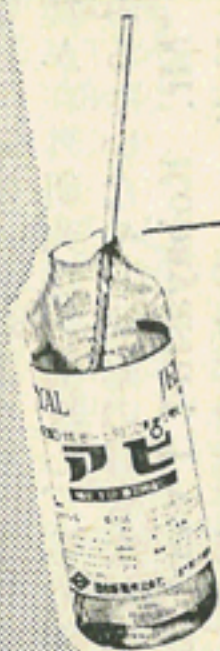
が曲り角だ。しかし、どれも皆私には恵まれた曲り角だった。小樽以後の先生については皆さんが書かれるであろう。先生の数多くの思い出の中から先生の小樽赴任直前の一こまを私事からんで述べさせていただきます。

疲れにのもう!

ローヤル・ゼリーとビタミンC 200mg./

アピ内服液

たっぷり飲めます。ステキな味です。
強壮、美容、疲労回復、食欲不振に



日本新薬



東宝 高橋忠大

浜林さんについて



椎名幾三郎

(関西学院大学教授)

緑丘会には浜林先生の教えを受け
た人が非常に多いので、それらの諸
君が、浜林先生の風貌なり、人柄な
りを私より上手にまた完全に再現し
てくれると思うので、私だけが書け
そうなことだけを書いて見ようと思
う。

私は下手の横好きで、テニスを愛
好していたが、浜林先生も同好の士
で、時々お相手をさせられた。当時
は軟式庭球で、浜林さんは占部さん
と組み、私は佐原君か大熊信行君と
組んで対抗した。浜林さんは後衛で
その打球は非常にシュアだったの
で、大いに悩まされた。浜林さんは
勝つても負けても、表情を変えずに
黙々としてテニスを楽しんでたよ
うだった。私よりはお上手だったよ
うだが、いつどこでテニスを習得し
たかは聞きももらしてしまった。恐ら
く広島高師の学生時代に覚えたもの
だろう。

「ミスタ(ミスター)の長音のしるし
「I」は不要」と私とはじめて面接し
たのは一九二〇年四月の初旬のこと
であった。この時、二人のどちらか
らともなく、いつも英語で話しあう
ということが約束された。そして、
この約束は約三十年間実行された。
戦争の頃、二、三人の同僚から、英
語で話しあつたりしては、憲兵
から後をつけられたり、じん問され
たりするかもしれないから、注意し
てはいか」といわれたことがあつ
た。とにかく幸どこからもおとがめ
にはあわなかった。

長と相談する際、苫米地校長の時は
毎朝空をみあげて、今日は相談申し
あげてよい天候か否かと考えたが、
大野校長には、こうした心配をせず
に話が出来るとしよう云々と。
さきの緑丘の大野さんへの記念号
に私は一つの英語のPun(パン)を
書き記したが、ミスタ浜林の場合に
も私一流のパンがあつた。ミスタ浜
林が在外研究から帰校し、私の顔を
みるやいなや、映画の好きな私に
"Mr. Kobayashi I went to
Hollywood, but I could see
no stars."
といった。そこで早速私は次のよう
にいった。
"You can't see the stars in
the daytime, can you?"
恐縮ながら、註をつけますと、star
には映画のスターという意味と、空
の星という意味とあり、その両方を
かけた言葉のしゃれであります。こ
うしたしゃれや笑話をパンとよびま
す。

ミスタ浜林と私

小林象三

(大阪工業大学教授)

「小林君、僕はハリウッドへいった
が、スターにあわれなかったよ」
「君は、日中、スターをみることは
出来ませんね」と
ミスタ浜林!!すでに地上になし、彼
の冥福を祈るのみ。



しないという浜林さんの人柄の現れ
と私は理解している。つまり、浜林
さんは英国流の個人主義者であつた
のだ。
教授会などでも、私などは口角泡
を飛ばして議論するのだったが、浜
林先生はあまり発言するようなこと
はなかった。いつも立派な意見をも
っていたようだが、無駄な議論の渦
中に巻き込まれなかったのだ。
なお、私は浜林さんとは、よく雑談
を交はした。先生の話題りはまこと
に物静かで、しかもウキツトやユー
モアに富んだものだった。外遊から
帰って来て、ロンドンで詐欺にかか
りかけたときの話などは、微に入り
細をうがち、実に興味津々たるもの

だった。
緑丘人のうちには、浜林先生を皮
肉屋だと評する人もあるようだが、
上手な皮肉を言うことは容易ではな
い。それには頭がよくて機智に富む
ことを必要とするからだ。
浜林先生の英文学における造詣は
極めて深いことは象知の通りだが、
他面、英文学が同先生を感化して、
ユーモアやウキツトに富んだ英国流
の紳士に仕立上げたものではあるま
いかと私は考える。
浜林先生は私たちに非常に親切だ
つたが、また夫としても、父親とし
ても、模範的人物だったように思は
れる。御遺族の皆様と共に私たちが
先生の早逝を痛惜してやまない。

伊藤整著「若い詩人の肖像」より

(新潮文庫)

英語の浜林生之助教授という、私
たちにステイヴンスンの「驢馬を
連れての旅」や「洪水のオアズ河」
などを教えた色の黒い、非常に出来
ることでは何人も疑わなかった先生
が、私たちのクラスへやって来て、
マツキンソン先生の時間をエスケー
プしたことに對して訓戒した。浜林
教授は簡単に言った。「あの男は馬
鹿じやありませんよ」この一言は利
き目があつた。「マツキンソン氏」
でなく「あの男」であることがよか
つた。また「よく出来る先生」とか
「立派な人格者」などというもので
はなく、「馬鹿でない」と言うのが
よかつた。その一言で私の学生はマ
ツキンソンさんが隣人であることを
発見した。私たちのエスケープは終
りになった。

また浜林教授は、ある時、この町
のある貿易商の所にいるイギリス人
が、この学校の英語の教師になりた
がつて運動しているんだが「日本の
学校をあまり見そこなっちゃ困る」
から、たつてなりたいたいと言うなら

「僕が試験してやるつもりです」と
言つて、私たちが嬉しがらせた。そ
の浜林教授はまた、私たちに「諸君
と僕との違いと言えば、まあ字引の
引き方が違う、と言つた所だね」と
言つた。
その浜林教授はまた、ある時、突
然教室で、「女房というものは、か
ぶっている帽子みたいなもので」と
言つた。二十歳前後の青年ばかりの
生徒はわつと笑つた。浜林教授は、
黒い顔をニコリともさせず、口の奥
の方で軟かく発音する英語じみた関
西系の発音で言いつづけた。「新し
いうちは、ハタ目はいゝが、どうも
しっくりしない。あちこち損んで中
古ぐらいになった頃、ちようどよく
なるもんです。ハタから見ると、な
ぜあんな古い崩れた帽子をかぶつて
るかと思うわけだが、その頃に工合
のよくなるものだ。覚えておきたま
え」
彼が話し終えた時、生徒は笑わな
かつた。(同書九七頁)



くろがねの牙え

室谷賢治郎

(小樽商科大学短期大学部教授)

浜林生の助さんが逝かれてから、早くも十七回忌を迎えた。注意深い編集部は「緑丘」に、先生追悼のための特集を企画し、私にも投稿を求められた。切日を考へ、吹雪の未明に起上り、茶の間のストーブの側に小卓を置いて、ペンを握る。

浜林さんと私は出身校も違い、担当学科も同系でなかったが、学校では教官室で顔を合はせ、取りとめのない世間話をする位のところまで

取立として書く材料を持ち合はせない。しかし、その世間話のなかでも浜林さんの言には、寸鉄人を刺す概のあったことを、印象に残している。髪容を飾らず、小さい口髭を蓄へ、巻煙草で黄色にした指先を握りながら、学生の答案用紙をめくり、時に珍答案に廻り遭うと、ひとの悪そうな苦笑を浮かべるといった風景を憶い出す。

人を知るには、その人と一緒に旅行するのが一番良いと、英語のリーダーにあって、私は浜林さんと一度道内の巡回講演旅行に出たことがある。これは私の小樽高商奉職の翌年(大正十三年)の夏休みの時のこと、その時の校友会弁論部の学生諸君(中の中野清一君がいた)に加わって、帯広・野付牛(今の北見)・網走・名寄・旭川・深川・滝川・岩見沢等を歴訪したのであった。この間、浜林さんは持参の英書を一冊読破した模様で旅の寸陰を惜んでの勉強振りに対し、年若い私は頭の下の思がした。その英書は、たしか新潮社から「露国十六文豪集(米國セルチュル氏編、衛藤利夫氏訳)と銘打って発行された原本だったと思ふ。

この弁論部恒例の巡回講演には、浜林さんは前にも引出されたことがあり、故大西猪之介教授と、林檎の余市に行った際の話を宿で聞かされた。大西教授が携行の独乙語の原書に読み入り、林檎の花の盛りを賞翫しに出かけようと誘っても応じなかつたこと、その講演会場の入口の講演者の名を書いて貼り出してあったビラに「大西教授他一名」とあった

ところから、浜林さんが壇上で開口一番、「自分は他一名と申す者ではありません」とやったことなど、実に俊敏痛烈である。

旅行といへば、三月の入学試験の季節に、私は浜林さんにお伴して一回ならず、東京受験場へ出張を命ぜられたことがある。人手不足の東京受験場では、緑丘出身学徒の自発の手伝い他に、文部省吏員の臨時雇に頼らざるを得ない状況であつたが臨時雇は試験当日遅参するやら、試験室内で用紙を配布してようと監督もせず直ちに室外で一服吸ひつける有様に、私が業を煮やして大声叱咤すると、浜林さんは「まあ控室で茶菓子でもつまんで下さい」と文部連に逆手の言辞を与へるのであった。

昭和二十二年三月五日の小樽経専卒業日の当日、浜林さんは文部大臣祝辞を代読した。その声はすでに暖かだ。この年の十一月二十九日の私の日記には次の如く書かれている。「学校へ行く坂で、午後の浜林教授の告別式に出席しないらしい学生と幾人も逢う。恩師に対する礼を知らぬ学生は済度し難い。告別式はスチームの温い講堂で、一般者、同窓生をも交へ、立派に執行された。自分は職員代表(温厚会幹事)としての弔詞を読む」

右の告別式に角帽で列した浜林正夫君は、今や小樽商科大学教授経済学博士である。憶い出は尽きないけれども、紙白がなくなつてきたので拙い一首を添へて稿を終る。

遷厝を迎へて逝きし君なりき
くろがねの牙え錆びを留めず
(昭和三八・一一・二九)

うな、いんうつな自然主義の文学や予言者の科学小説を好まれ、小生は前者の短篇集にご協力したことがあり、後者の「盲人国」にも、お手伝いしたが、よく小生にこう言われた。「人間の次にこの地球を支配する動物は、君、昆虫だ、とウエルズが言っているよ。人類も終りだね」

ハーディの死んだ一九二八年頃、浜さんは英国に留学され、エディンバラからR・L・S・(ステイヴンソン)の作品「セン・タイヴィズ」

浜さんと落語



梶川亨司

(大一一)
(岐阜大学 農学部教授)

その他を送っていただいた。先生の「本には蔵書印として鼻(ふくろう) (關)も見えぬことを暗示している」のゴム印が捺してあり、そのお腹のところにI・H・と記されておった。英国からのお便りのなかに「ぼくが田舎の旅館に泊って英詩の冒頭『愛してしかるのち失うは』と言ったとたん宿屋の女主人は『最初より愛さざるにまさる』と答えたので大いに我意を得ました」とあったのが印象的であった。

帰朝されて小生にロンドン製のボ

ケット・ブック(羊皮財布で1ポンドや10シリングのトレジャリ・ノートと紙幣を入れるところがきまつている)のなかに英国のコインをいくつか入れて下さつた。「人に財布を上げるときは、コインを入れて上げるのが英国の習慣ですよ」

と言われた。その財布は小生のマスコットとしていまでも大事に保存して、教室でポケット・ブックの説明に実物として学生に見せたりしている。それはお金がたくさんあるという緑

起のよい財布としてだが、いままの大学の先生なんか仲々お金が多量ならぬ。「朝日ジャーナル」(昭和三八・一一・一〇)に伊藤整はこう書いている。

「この人は教師臭がなくて、やさしい口調で日本語には元来『彼女な』どという言葉はありませぬよ、などと皮肉を言い、金をためることも上手で、外国人の教師は、ぼくが試験してやるなどと言ひ、その専門の学問の外に人生の急所を知っている人だった」

在天のみ霊よ、
願わくば安らかなれ!

小樽高商は小樽外語であった。外語劇がなつかしい。ぼくのドイツ語劇には小林多喜二がバックその他を援助してくれたものだ。当時錚々たる人材多く、英語学では苦米地氏、英文学では中村和之雄、浜林両氏が光っていた。小生にはトレヴァ・ジュウンズ氏が沙翁のリネット(十四行詩)をコックニーの癖もないロンドン語で講ぜられたのを忘れられない。

氏ご夫妻は樽中でもコロキアルを覚えて下さつた。それから、大平先生、小林象三先生、中村賢二郎先生がそれぞれ個性ある講義をして下さつた。中村和之雄先生は十二年もロンドンに居られた人で、教室ではイヤ・ロツク・ホームズを手にとるようになって解説された。一度岐阜に来たことがあつたが、戦争中のごとき質素な洋服を着て居られた。大平頼母先生は植物遺伝学の権威で、軽妙な米文学の作品を面白く説かれた。

さて浜さんだが、先生は週一回小樽商業に講師としておいでになり、英文学を担当された。色浅黒く、美髯を蓄え、いつも煙草を離さず、皮肉屋で滑稽味のある話術の中にも、仲々渋いところがあつた。

夏になると、ぼくは先生一家と塩谷村(伊藤整の郷里)のお寺の離れを借りて、英文学の記事をよみに避暑に行ったものだ。大概一週間で二冊作品を上げた。午後は磯舟のついで沖に出て、岬にある洞穴を探索して、ロビンソン・クルーソーやパイロンを気取つたりした。浜さんは飄々として居られたが、英文学でもハーディやウエルズのよ

ぼくの考へでは浜さんはそれがめつた人だつたとは思われない。質素だつたからそう見えたのだらうと思う。粗末な和服姿で演芸館に落語を聞きにゆき、話が落ちると腹の底から出るあの一沫の哀調を持った笑聲が忘れられない。長いこと第四の寮監をして居られたが、いつも金監室の蔵書の前で小生に英文学を指導して下さいつたり、先生の著作のお手伝いをして下さつた。奥さんと奥さんの妹さんやお子孫たち(正夫さんとも幼なかつた頃)と一緒に食事(主としてスキヤキ)をたべ、夜道を遠く舟町まで帰つたことがいくたびあつたことだらう。

先生は三重県の御出身、ぼくが今ご郷里の近くの岐阜に居ることも何かの因縁であるかも知れない。「そらや、そらや」という三重訛がなつかしく回想される。

なつかしい先生であつた。表面は快活でユーモアやウィットをとぼすけれども、仲々の皮肉屋で、心の真底には寂しいペシミズムを持って居られたのではなからうか。それはハーディの人生観やウエルズの前見に共通したものでもあつたのだから。先生がお亡くなりになつたのは五十八才という若さであつた。惜しいことであつた。しかし先生も人生一生のお仕事を完成して逝かれたので思い残すことはなかつたことと拝察している。

在天のみ霊よ、
願わくば安らかなれ!

緑丘の伝統に脈々として生きる

清水 春 雄

(大一二)

(前小樽商科大学教授
岐阜女子短期大学教授)

濱林先生といえば、「英国文学巡礼」や「英語の背景」をはじめ、訳註書も多く、学界教育界に非常に大きな功績を残されていることは、世間周知の通りで、殊に緑丘人はいずれも十二分に承知されているので、新に私が蛇足を加える余地がないような気がする。しかし何か書くようにと言われて自分のことを振り返って見ると、英語の教員となつた関係で、長い間にわたりいろいろ先生にはお世話になつたことが思い出される。

「ご迷惑になつてはいけないと思つて、実際にはその質問状を出したり

はしなかつたが、語学についても文学についても、お尋ねすればいつでも答えていただけそうな先生がおいでになるという安心感は、今から思えば何にも増して若い時代の心の支えであつた。

私の高商在学当時の先生についての記憶は、何分四十余年も昔のことであるから細かいことは殆んど薄れている。こちらが幼稚であつたせいもあるが、一つには先生が小樽においでになつたばかりで、まだ万事に控え目にしておられたのかもしれない。兎に角、これという変わった事件は思い出されないが、ザンギリ頭にされた素朴な風貌、時に警句を盛られるが物静かに話される先生のイメージは今でも消えない。

先生のお力添もあつて私が老学生として広島文理大へ行つていたころ先生のお若い自分の勉強振りを噂に聞く機会があつた。先生が高師英文科出の三羽鳥の一人であるとか聞かされ、なるほど道理で感じたものがある。

「スクールージ」「浜さん」

何番目という英語など……

佐藤 信 雄

(大一二)

朝日ジャーナルの十一月十日号に作家伊藤整が小樽商大について一文を書いたが、その中に次のような一節がある。

「濱林先生之助については次のような挿話がある。英詩と和歌の韻律の比較研究という比較文学の先駆的な業績を持った八木又三が転出したあと、伴房次郎は苦米地英俊に全国を歩かせて、名目的でなく本当にできる英語教師を捜させた。苦米地は英語の出身である。彼は各地の中等学校を参観してまわつた。福島中学はどこかで、教室にはいると、そこで教えている色の黒い英語の教師がすばらしくできることがわかつた。それを引抜いて連れてきた。それが浜林である。濱林は広島高等師範の出であつた。」云々。

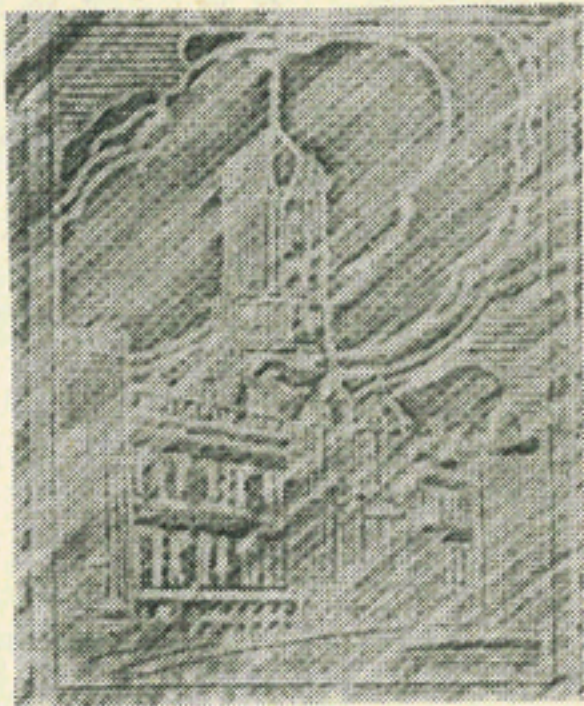
しかし私が大分以前苦米地先生から聞いた話と少し違つたところがあつた。すなわち英語の先生をさがしてこいといつたのは渡辺龍聖校長（伴先生は当時の校長でない）であつた。苦米地先生は四人の教師に白羽の矢を立てて参観に出かけた。その第一が当時私が五年生に在学していた札幌一中（今の南高校）の都築東

作先生であつた。私のクラスではなかつたが、となりの組の小樽高商の先生が参観にきたことを、私なども知つていた。もちろんその目的など知るよしもない。

だが都築先生は選に入らなかつた。その理由は、苦米地先生によると、渡辺校長の条件の一つに発音がよいことというのがあつたが、都築先生はその点にいささか難があつたからだといふ。

先生がまだ若いころ、英語教師をして友人数人と東京で落合つて話し合つた時、誰かが「ウィルソン大統領は何代目の大統領か」を英語で何というかと聞いた。皆で考えたが分らない。たまたまその時斎藤秀三郎氏の正則英語学校を参観することになつていたので行つて参観した。すんでから斎藤先生のところへ挨拶に行くと「何か質問がありますか」といふ。そこで「何代目」は何と聞いたらいよいよとときくと、斎藤先生も即答がでない。「今英語大辞典をつくつておられるところだから、必ず考へてのせます」といふ風なことを言つて、カードにそれを書いて棚の中に入れた。

【16頁へつづく】



学巡礼

西川正己

(大一五)

本書は実に懐しい書物である。浜林先生の講筵に列した四十年の昔が本書を繙くことによつて昨日のことのように思い出される。僕等が卒業した翌年昭和二年二月九日英語学及び語学教授法研究のため英吉利国へ留学を命ぜられ三月三十一日出発、独逸国及び亜米利加合衆国を在留国に追加せられ、昭和四年八月二日帰朝せられたそのイギリス留学中のお土産が本書である。彼地から英語青年に Hardy の葬儀に参列された模様をつぶさに報ぜられたのを拝見して懐しく遙かに先生をしのんだことであつた。本書もまた Hardy District ともいうべき Wesley 訪問記から始まる。ハーディーの短篇や「テス」の中に出てくる各地名に関連した文学遺蹟の解説が作品の解明と相俟つて実に興味深く読まれる。ハーディーのカスタブリッチ (Caster brage) であるドーチェスタ (Dorchester) 訪問記は流石に先生の心をときめかせたらしいが学校で先生からハーディー作品を教わった僕達もこの一篇に一読心の跳るのを感じた。Max Gate-The Home of Thomas Hardy. O. M. と書かれたハーディー邸宅の写真も出ている。ウエセクス巡礼が九十頁にも及んで「牛津及び附近」の項の第一に Dr. Johnson が顔を出す。牛津雑記に、

る。タモ・シヤンタの作られたニス川の岸、その川ぞいの樹々が涼しい蔭をつくつてゐる。その下かげに可愛い小経がある。爺さん(案内の)はこれを指さして「タモ・シヤンタをつくつたのはこちや」と教える——先生の筆は記している。そして先生はこう附記されている。見ていたような断言ぶりだが、この名詩が生れたのはこの川のほとりと世間で推定がきまつてゐることゆゑ、まあこの小徑にして置いても大した間違ひではあるまい。「プロンテ・カンツリ」「シエークスピア・カンツリ」「ディツケン・ランド」と先生の英国巡礼の旅は愛蘭土を除いて果しなく続いて最後が「ロンドン」の一篇で終つてゐる。クイラ・クーチの「沙翁論」の中の「偉大なる芸術家は作品に死んで作品に生きる……」という言葉から始まる本書の「はしがき」の中で先生は

【15頁から】
浜林先生達は天下の大先生でも分らないのだから、分らんでもいいやとは思つたものの、何というか考へもし、人にもきいたりしながら、大辞典の出るのを待っていた。しばらくして大辞典が出たので(昭和三年日英社)その「番目」の項に次のように出てゐる。(私の持つてゐるのは昭和五年発行、日英社縮刷版)
何れ、What number?—How manieih? 「注」是は "twentieth," "thirtieth" に依る新語にて英語唯一の欠乏を補ふもの。此大辞典の編む處に非われば、之を用ふるも用いざるも隨意なり。
とあり、
What son is he—How manieih son is he—of Mr. Matsuda?
How manieih president was Harding?
という例が出てゐる。(他は省略)
齋藤先生の意気は壯とすべきも、英語の辞典にない新語を使うんでは面白くない。何とか他の言い方はあるまいかと、それから折ある毎にきいてゐるうち、次のような言い方を教えてくれた人がある。それは、
Which president was Mr. Harding first, second or what?
これなら判るじやないかと浜林先生は言われた。
さらに先生は当時小樽高商にいた米人マッキンソン氏と汽車で函館に行く途中、話をしながら「このトンネルは小樽から何番目のトンネルか」とマッキンソン氏がきくように話

浜林先生の名著

英国文

The Ring and the Book の話が出て来て小林象三先生を一寸思い出すのです。英詩と小林先生とブラウニングが三題咄のように思い出されるからです。

「レーク・ディストリクト」が次に四十頁近く続きますがグラスミアのワーツワースの墓の写真が実によく映つてゐます。ワーツワースを語つて先生の筆は実に完璧である。英詩の好きな人も好きでない人も先生の麗筆によつて知らず知らずライダル湖畔の詩人の生涯とその優れた詩篇に心引かれずにはいられなくなるであらう。大熊信行先生が御好きであつたラスキンの墓に詣でる記事と写真もある。御影石の方尖碑(オペリスク)は写真で見ても一異彩である。

「パインズ・カンツリー」は曾て英語研究に掲載されてむさぼるよう讀んだことを覚えてゐる。この項費すところ七十頁。殆んどパインズの記述で終始してゐる。先生は余程三十七才で死んだこの人間味の多かつた詩人が御好きであつたらしい。パインズの傑作タモ・シヤンタの話と共にこの詩の最初の草稿が生れた由来などが現地の地名と関連して面白く述べられてい

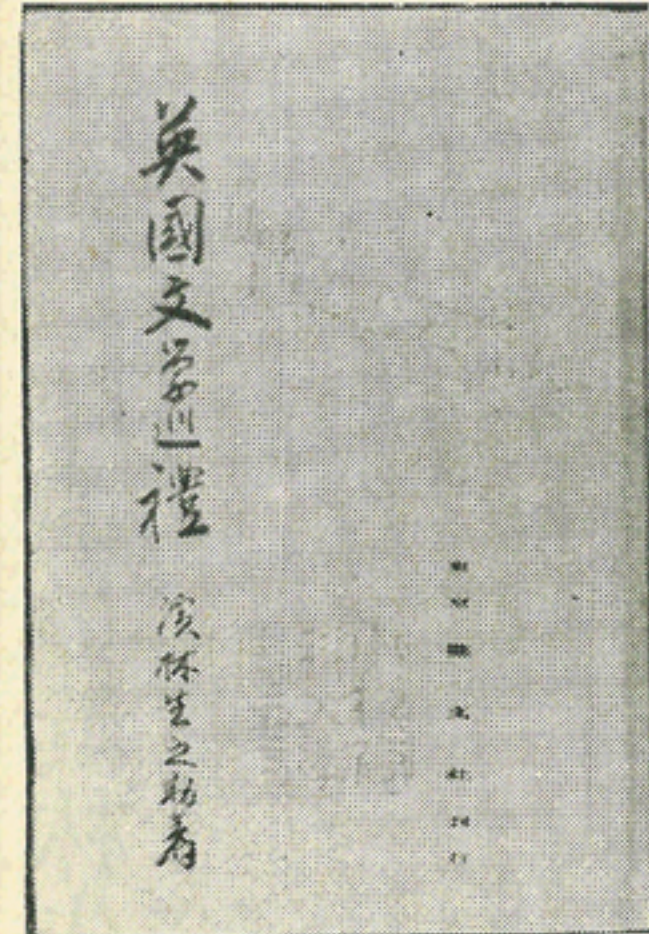
れ等天才の書き残した不朽の作品に親しむ機会が生れて来ないと誰がいえよう。
と述べられる。先生の名著「英国文学巡礼」を読んで英国文学色彩にあこがれて本気で真剣な文学巡礼に志す人々も少なくないことである。残念なことには本書はすでに絶版である。発行所の健文社もすでに無いのではないかと思う。初版は昭和五年十月十五日発行。僕はその初版の一本を所持してこの貧しい一文を草した。筆の至らぬところ先生に深くお詫びをして、浜林先生記念特集号」に寄せることにした。

「倫敦」

何といつても一番こゝに縁故のふかいは「チェルシ」の賢者」と呼ばれたカーライルであらう。外の家は人が住んでいて入つて見るわけにも行かぬが、幸ひカーライルの住宅のみはミュージアムになつていて入場料を払へばいつでも見物出来るのだから、チヂックに滞在中、夏目さんの真似をしてその家を探ねて行つた。
チューニ・ウオークを一寸横に入ったチューニ・ロウというのが、その町である。近所にこの賢者の銅像があるからすぐわかる。ノカを叩いて案内を乞ふとお婆さんが出て来ておはいりといふ。入るといきなり、
「お前さんミスタ・ナツメの文を讀んだ事があるか」ときく。夏目さんの文といつてもいろいろあるが、多分この博物館を訪れた記事のことだらうと思つて「ある」と答へると、「あの中に書いてあるお婆さんというの私の事だよ」とお婆さん國貨のような顔をする。

をもつて行つたところ、氏は、
How many tunnels does this make from Otaru?
といつた。先生はこれをきいてさすがにうまいことを言ふと感心した。以上が私のきいた話である。大分あとになって、この話を雑誌に公表してもいいでしょうかと伺つて、お許しを得たのであつたが、つい先生の生前には発表せず、一九五四年になつてはじめて書いたのであつた。先生については他にも色々と思ひ出はあるが別の機会にゆづりたい。老いてますます先生をしのぶ思いのいやますこの頃である。
(一九六三・一一・二〇)

「おやさうですか、それは始めまして。しかしあの中にはたしやお婆さんと書いてあつて、あれを書いたのがええともう何年前になりましたかね……」胸算用してると、お婆さん横合から
「お前さん一体わたしをいくつと思つたさうですか」といつたが、西洋人の年令はわかりにくいものだ。まあ若い方へ間違へば大丈夫と、「さあ六十ですか」といふとお婆さんが笑つて、「お前さん中々お世辞がうまいね、わしや八十だよ。胸算用の答がやうやく出る。さうだこのお婆さんもう八十になつていていさ苦である。それにしてもお世辞のないところ随分若く見える人だ。誰れがくれたのか、この婆さん漱石文集の「文鳥」をもつてゐる。そしてそれには婆さんの事を書いたところを線がひいてある。「今余の案内をして居る婆さんはお婆さんの如く丸い。余が婆さんの顔を見て成程丸いと思うとき婆さんは又何年何月何日を誦し出した——この婆さん今でも丸い艶々しい顔をしてゐる。
(英国文学巡礼三七頁)



英国文学巡礼
浜林先生之名著

四十年前の浜林先生

大久保 鹿 弑
(大一一)

浜林先生はわれわれが小樽へ入学した同年の三月赴任して来られて小樽人になられたので、何か同級生というような特別な親しみを感ずる方であった。

当時の母校は外人教師も六人を数え、日本人では苦米地、中村、小林など英語陣何れもキビキビした人々の中に、お一人だけは誠に物静かな



(大正12年頃？第四寮前で)

ここに四十年も過ぎ去った昔を想い出すことは誠にむづかしく、ハッキリした記憶が甦らないのは誠に残念であるが、大阪「緑丘」が先生の記念号を出されるに当って、淡い記憶を辿りつつ責務を果すこととした。

(尼崎市議員)

控え目な、どちらかといえば暗い感じの先生であって、外国語担任というのには不釣合のように思われた人である。ところが英語の発音は低音ではあったが、誠にきれいな歯切れのよい発声で一番よく聞分けられたと記憶する。

この穏和しい先生がまた、きわめて皮肉屋であったことを想い出す。いつも冴えない顔色をして物静かに教壇に立たれた学生も周回も一向無関心の素振りでもなく、ユアを進められるのであるが、時々ビシビシと意を衝くような警告を吐かれたように思う。

この先生がそれから二十七年間も全生涯を小樽に送られて、母校に尽されたのであるから全く母校の大恩人と申し上げねばならない。

「オン・ライン」と呼ばれた私

西野 嘉一郎
(大一一)

私が小樽高商へ入学したのは、大正十二年関東大震災の年である。そして最初に靴をぬいだのは第四寄宿舎であった。四月のことで御承知の通り駅から緑町にある第四寄宿舎までは田圃のようなぬかる道であったと記憶する。北陸の田舎から鈴らんの花咲く北海道を夢みてきたこの小樽に全く幻滅の悲哀を感じたのは私ばかりではなかったと思う。

しかもその第四寄宿舎の汚いことそこへ現われていらしたのが、浜林先生であった。いま考えてみると先生はまだ三十前後であられたと思うが、極めて落ちついたとおる声であるが低い声で私達をほめるでなく、くさすでなく一条の訓示をのべられたことをはつきり覚えている。この先生が受験準備の時参考書等で名を知った浜林先生であった。私は商業学校出身であったので特に英語の時間が多かった。その中でも先生の時間は週三時間位だったと思う。最初教わった英語の教科書は私達が今まで手にした英語の参考書とは類を異にした英国製の英文学のテキストであった。一冊はたしかゴーツウィーの或る恋愛小説、いま一冊は著者は忘れたがコメディであったと思う。先生独特の英文学的講義をかされたのであるが、この時間ほど楽しいものはなかった。私ははじめ

て先生によって英文学というものを知った。暫くして私は第四寄宿舎からすぐ傍のYMCAの寮に移ったので浜林先生の寮長としての御指導は受けなかったが、先生の個人的な性格にふれなかったことは今考えると残念である。

親友西川正己君等は第四寄宿舎の寮生として先生を心から慕い、一生を英文学の研究にささげ、この面の教育者として師弟の教育にあたりおられるのも先生の御人格の影響だと思ふ。私は学生時代から寝坊のためあの地獄坂を遅刻しないようかけ上ったものである。浜林先生の授業はいつも第一時間目まで私がかかむ頃は、先生は出席簿を手に出席をとっておられる。私がドアを明けたらたんに私の名を呼ばれることもしばしばあった。先生はある時ドアのところで答えている私の顔をみてニコニコ笑いながら、君の名前はこれからオン・ライン(On line)と呼ばうといわれた。その後たまに早く席についていると「オン・ライン」は今日はいるねと皮肉をいわれたこと等すべてなつかしい憶出である。英文学のことを多少でも人と論じた本を読むことのできるようになったのも浜林先生のおかげだと常に感謝している。

柳芝浦製作所専務取締役

千代田火災海上保険株式会社



取締役会長 古 関 周 蔵
取締役社長 手 嶋 恒 二 郎

東京都中央区京橋 1-3 新八重洲ビル TEL (535) 4 6 7 1

過去への回想の扉を静かに開くと黒い背広服をスマートに着こなし、綺麗にカットされた美髯を柔和な口辺に蓄え、背恰好のスラリとしたチエントルマンが教壇に佇立していられる。手に小さな洋書を持たれ、まことに物静かな語調で講義される姿は、恰かもそのまま絵になる英文学者のスタイルである。そして、近代の文豪キーツに就いて語り、彼の文章を解釈してその詩文の有つ芳醇な香りに調和した巧緻な訳出は、学生を全く魅了し尽すのである。

恩師浜林先生を憶う

天 野 雅 司

(大一一)

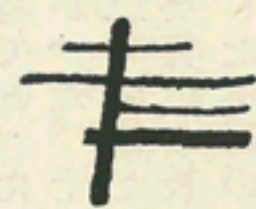
日本電気機器kk社長

でも個人の自主精神を尊重する先生の身についた文学者としての教養は、むしろ私に、学生達の無邪気なエネルギーの発散を喜んでおられたように思われる。かようにして第四寮の学生達は伸び伸びと成長していったのである。

私が昔を追憶し、母校のことも心に思い浮べる時、必ず下町に近く位置した第四寮から、彼の地獄坂を登校する若き日の自分を懐かしみ春四月、雪融け初めた路の傍に、草の芽の鮮やかな早緑を発見して、永い冬籠りから開放された喜びを誰よりも先に実感出来たことは第四寮生の特典にあつたと思ふ。

浜林先生が「蠶魚」を職訳上梓されたのも恰も大正十五年のこの季節であつたと思う。

唄の師匠浜林先生



増田 常次郎

(大一一五)
中部証券金融株式
会社 取締役社長

浜林生之助先生には大正十二年四月から同十五年三月卒業まで、第四寮の舎監として御指導をうけ色々お世話になったが、緑丘三年間の生活で私にとって最も思い出の深い懐しいありがたかった先生は浜林先生であつた。「思い出」の記の投稿を依頼され筆をとつた所以である。

まず「唄の師匠」の由来であるが当時の第四寮では寮生も舎監も同じ風呂場に入浴していた。あるとき私が浴槽に浸りながら江差追分節の前唄をうなづいていたら先生が入つて来られ「君、唄はうまいね」とほめられ「どうしておぼえたか」と尋ねられた。私は江差生れで子供のときから追分節を聞いていたので習はぬ唄をうなづいていたのでと答えた。先生は「君は民謡調のものを勉強し給え。きつと成功するよ」と歌手になれと言はぬばかりに、おだてられた。そしてその場で早速先生が「君に博多節を教えてやるよ」と「百万石の知行とるよりあなたのそばで……」の文句と節を教えて下さつた。

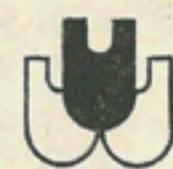
先生声は低音ながら澄んだいゝ声だつた。私は御厚意に甘え、いゝ氣になつて先生の真似をした。その後二度、風呂場で御指導をうけたが「君はおぼえが早いね。唄は真似だから耳と勤がよくないと駄目だ。英語も同様で唄のおぼえのわるいものは英語は上達せん。君に英語の天分ありと認め今後多くの試験の点数を二割増してやるよ」と真顔でおつしやつた。唄を教えてもらつて恐縮しているのに、おみやげまで頂戴し感激に堪えなかつた。この二割増が寮生に伝わつて私の先生の英語の成績は水増しということにされたが、嬉しい評判だつた。先生の英語の時間もいやではなかつたが、風呂場の唄の時間は実に楽しかつた。

生徒としても寮生としても、出来のよくない私を先生は特別にお心にかけられたように思う。こんなことがあつた。たしか三年生のときだつた。と記憶するが、先生は私に先生のご郷里のお知りあいの資産家に養子にゆかぬかとすゝめられた。洵にあり

がたいことゝは思つたが「資産家」にこだわつて即座にお断りしたが、「実の両親だけでなく、未知の人物として世話してあげることも人生の君が内地の多くの郷里を生活の根拠地とするもおもしろい運命ではないか」というような、お言葉を思い出し、あつたとき先生のおすゝめに従つていたら今頃どうなつていたらうと時々思い返すのである。

卒業のとき、在寮の同期生を舎監室によんで、奥様共々すき焼を御馳走され、送別会を催して下されたのもありがたいことだつた。そのとき先生は「ぼくが舎監として送り出すこの寮の卒業生のうちで君達が一番粒が揃つている。平均点はいゝ方だね」というようなことを言はれたが皮肉屋ハマさんの送別の辞として素直にありがたく拝聴した。そのとき記念に頂戴したシェークスピアのテニペストは戦災で焼いてしまつた。卒業後数年経つたある秋の日、青函連絡船のこみ合う船室で私の肩をたたく人があつた。振りかえると浜林先生がニコニコと立つておられ、「やっぱり増田君だつたね。遠くから見ているが、頭の髪もあそぶ格好がどうも学校時代の君に似ていたの、もしやと思つてそばへやつて来たんだよ」とやさしいまなざしで、いかにも懐しげに言はれたのは私も嬉しさに眼頭が熱くなつた。教え子の一人一人の癖を記憶されておられる先生の深い愛情に強うたれたことであつた。御冥福を祈り、博多節を口ずさんで筆を擱く。

広告マツクと美術印刷・紙工品



株式会社 三優社

京都市下京区寺町通松原下ル
TEL. (35)0271・4950・7713
取締役社長 山村太兵衛 (昭12)

是非一度皆様からの御用命を……特別奉仕

丸ぼうずの浜さん

大塚 武雄

(大一一五)

四十年も昔のことですから、日は定かでないが授業時間中に浜林先生から「ぼくは週二十八時間持つていゝんだよ」ともらされた事を今思い出す。私も教育者のはしくれとして三十六年間教壇に立つた経験から、週二十八時間の授業時間は今日では考えられない過酷な労働時間である。当時小樽高商の英語は相当なものとの定評があつた。教授陣には苦米地、小林、浜林、中村、マツキンノン等の各先生のお名前と共に夫々の特徴が直ちにおもひ出されるのであるが、なかんずく浜林先生の授業時間には偉大なる英文学者に接する誇りとおもふ。この大先生が週二十八時間におもふ。この大先生が週二十八時間も授業されていた事をおもふといまの若い連中の不平など吹き飛ばしたくおもう。

緑丘五十年史のなかで私は初めて浜さんのその後を知り得た。「人事の異動にかんしては二つのことにふれておかなければならない。一つは浜林教授の逝去である。浜林教授は三重県出身、広島高師を卒業後、川内、福島の中学校に教鞭を

とり、苦米地前校長に見出されて大正九年三月本校に赴任し、それ以来二十七年余にわたつて、苦米地校長を助けて本校語学陣の強化につくしてこられたのであるが、その間、生徒課長あるいは教導部長として学生の指導にあたり、また昭和二十一年三月から五月までは校長代理をつとめ、本校の発展に尽力されたのである。専門の英文学、英語教育にも大きな業績をのこされ……

この記事を見ながら私は母校発展史のなかに浜林先生の果された大きな業績を、こんな角度から確認したい。即ち花やかな舞臺で常に脚光をあびながら大向うをうならせていた名優苦さん等の一団ありとすれば、この後で黙々と舞臺設営や黒幕として緑丘劇場を支えていた方々のなかに浜さんの大きな存在を見出すのである。凡そ英語の先生といえはハイカラなものとしていた。その当時みるからに村夫子然としていつも丸ぼうず、気どりもなく、てらいもなく人間浜さん丸出しで学生陶然その名訳にきゝほれて英文学のよさを胸底に秘めると同時に、肌とおして

しみいつた人間浜さんのよさを身につけて卒業したわれわれは誠にしあわせであつた。小樽の卒業生は地味だが、真面目だとの定評はこんな先生がおられたおかげと考えるが、どうか。当時私は緑丘新聞の編集子として数次浜さんの私邸を訪れた事があります。当時の教授の官舎はお気の毒なほど、おそまつで、誠に御質素な御生活とおもわれました。いただいた原稿の内容などはわすれましたが、珠玉の一編として光つていたようにおもいます。

丸ぼうずの浜さんも、われわれ三年生の頃からポツポツ髪をのぼし始めました。のぼしかけのアンチヤンといた格好、しかし誰いうともなく「先生の洋行が近づいた」そんなうわさのうちに、われわれは丘を去つた。爾来四十年、いまや先生

はなし、書庫の奥から一冊の小型英書Alpha of the Ploughをとり出し読み返して見ると当時の先生の名訳とおもひがけがほうふつとしてよみがえつてきます。
人間の生き方、有り方のほんとうのすがたを身をもってお示しになり化育された恩師浜さんに還歴のいま心から敬意と感謝をさゝげ御冥福を祈りたいと存じます。

紙のトップメーカー

営業品目
新聞用紙
印刷用紙
包装用紙
筆記用紙
雑種紙

王子製紙株式会社
本社/東京都中央区銀座4の3 TEL (561) 6161(代表)
工場/苫小牧・春日井

読み・話す・書く・聞く

「英語を知ってる」恩師浜林先生

木曾栄作

(小樽商大教授 昭二)

紺紺と袴といういでたちで北海道庁立小樽商業学校(現在の小樽緑陵高校の前身)に胸をふくらませて入学したのが、大正八年三月であったが浜林先生に初めてお目にかかった

のは四年の時であった。先生は週一回、四年と五年に英文の教授にいられてきたからである。当時の庁商には立派な英語の教員が揃っていたと、いまでも信じているが、英語の作文というものに特に特別な関心と興味を起させて下さったのは浜林先生であつたとおもう。小樽高商からは先生のほかに、大平頼母先生とデーゲン夫人、マツキンノン先生なども英会話を教えるにいられたとおもう。英語学習については随分恵まれた環境にあつたとつくづくおもう

大正十三年四月に小樽高商に入学したが、私は神戸高商(当時四年制)への入学を切望していた。浜林先生は当時長らく高商の第四寮の寮監をしておられたので、庁商在学中から上級学校入学準備のため、特に英語の特別指導をお願いして先生のお宅へおじやまをする機会も多くなり

御家族の方々とも親しく交際するようになった。時々先生の出版物の校正のお手伝いもした。私の神戸高商受験志望はある事情から断念したが、その一つは浜林先生のような立派な指導者が小樽高商に既に居られたことも理由であつたとおもう。若い時には土地にある学校などには正しい評価を与えずに軽視しがちなものとおもう。

小樽高商に入学すると私は商業出身なので英語は週十時間であつたがマツキンノン先生が四時間、浜林先生は主として英文を教授されたがテキストとして山本有三著の「嬰児殺し」という小説を使われたが、ここで始めて高等英文の序説、入門ともいうべきものを教わってなるほどと、うなづくことしばしばであつた。一年の半ばをすぎた頃、先生は「英文構成法」という書物を出版されてテキストとして使ったが、この書物は内容はまことに立派なもので大いに役立ったとおもうが、いまは絶版になつているのが惜しいことだとおもう。こう書いてくると何か浜林先生は英文の先生のようにおもわれるかもしれないが、それは先生の一面にしかすぎない。一年の時に初めて万国発音記号について先生から教わつたのも私の英語研究歴には忘れ得ないものの一つであらう。

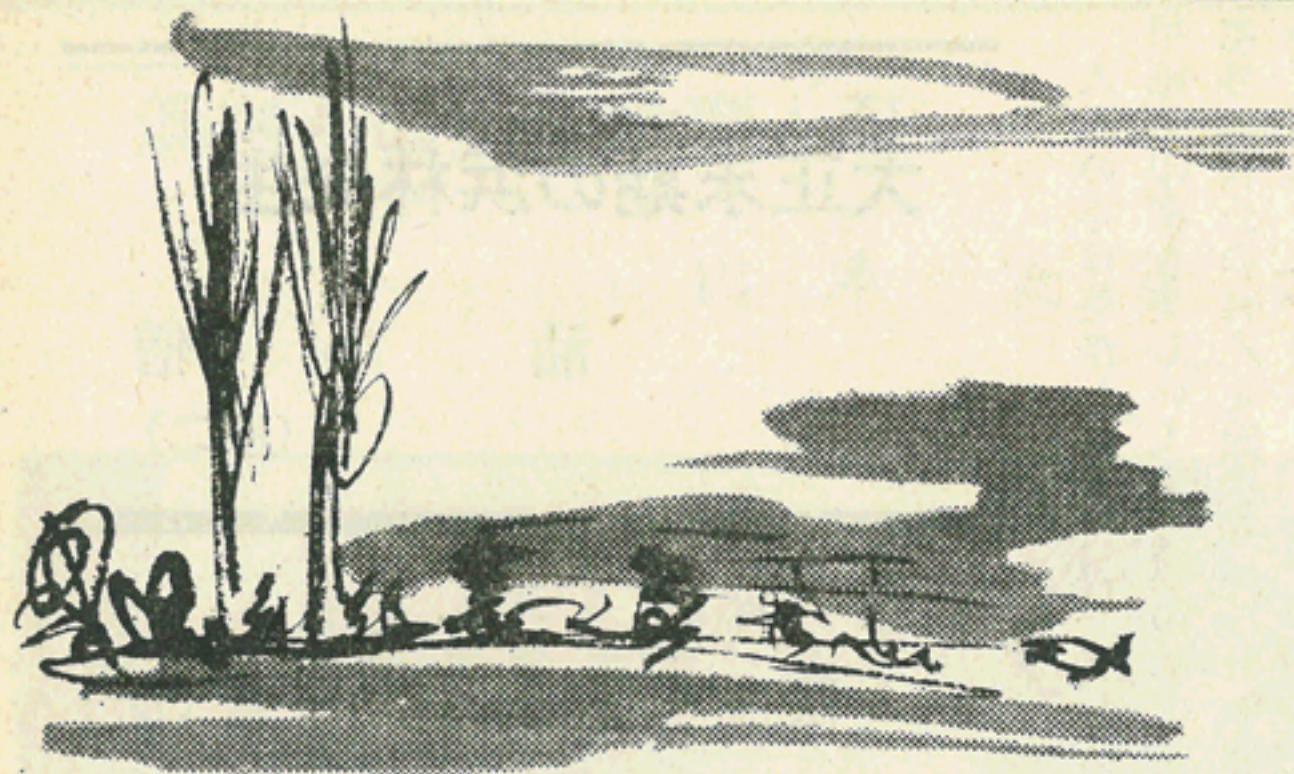
当時の小樽高商の英語教授陣は文字通り全国稀に見る充実したものであつたと信ずる。吉米地英俊先生、中村和之雄先生、小林家三先生と何れも第一陣の教授がずらつと並んでいたことは、われわれの幸福と誇りを象徴するものといえよう。

三年の時に、浜林先生からは「ブルズワーズ」の「マン・オブ・プロパティ」を覚えていただいたのだが、このテキストは当時の私にとってはかなり難解なものだったと記憶している。どうして、このような英文から、こんな日本語が生れてくるのであろうかと、先生の模範訳の立派さに首をかしげることがしばしばであつた。先生の英語に対する底知れない力をしみじみと敬服したのである。

テニス部送別会と第七銀行

小貫武

(昭二)



十一月の初め「朝日ジャーナル」に伊藤整先輩が母校の沿革を要約よく書き纏めたものを愛読した。そのなかに浜林先生の小樽以前のお勤め先きや、招いて、来ていただきたいきさつも憶出のよすがともなり、そぞろ懐しさが心痛く感じられてならない。先生は私達の昭和二年組を教へ卒業して欧米視察に赴かれた、と記憶しておる。という事は元来先生は頭髪を伸ばすことをお好みにならず、常に坊主刈りであられたのが、洋行と決つて「仕方がないから伸ばすことにしたよ」と静かに微笑された三三年前が今のようにおもしろい。先生は試験毎に三つの出題の内必ず一つは「位」、一題は応用問題で私達を困らせたものだ。ところが試験終了後先生は、この問題の解明をなさるのを常とした。二・三単語の判らぬときは前後の意味よりして、当然この単語はかくあるべきだと推理し、断定を下す明解さは、全く私達を魅了したものだ。先生から教へを受け、ホントに英語が好きになり、社会に貢献した同窓は数限りなく多いものと信ずる。「読書百遍意自ら通ず」漢文で習うことを英語を通じて先生から教つた不滅の学理がとこしへに私の心に生き続けている。真に偉い先生でした。

先生は四寮「玉ノ井寮」の舎監を兼ね、テニス部の部長でもあられた。それまでの軟式を一抛して硬球に代へたばかりだったので色々無理なお願ひもした。順々と訓されて理に服した様は涼風一過、清新な気で

テニスに明け暮れたものだった。よき時代によき先生の教を受けた私達はホントに幸福だったことを再認識する。どうか卒業できることが判明？(まことに恥しい話ですが)先生にお越し願つてテニス部の送別会を催した際、談話々々社会へ出てからの生活設計におよび、巴むを得ない場合の出費をどう按配するかの話題に、私は思はず「第七銀行でとりあえず都合します」と申したら、先生は例の静かな、スキ透る低い声で、そして微笑を浮かべながら、「第七銀行とは」「質店をそう申します」「君は借りた経験があるか」「あります、小樽では高商の学生ですと衣類の外に書籍でもノートでも相きな値段で喜んで貸してくれました」「後は問はるゝまゝに質屋の名、始めて暖簾をくぐつたときの心境、利子、三ヶ月の猶予期間等お答へして恰度持つておつた質札を御覧に入れて、御参考に供したことも憶い出の一つといへる。先生の前では、恥も外聞もさらけ出してしまいたくなるような印象を深く私達に与へて下さつた温い血の通う恩師でした。限られた紙数が尽きて、摺筆した直後に、ケネディ大統領の暗殺のニュースが入つて来た。先生御在任だったら」「馬鹿な奴は今も昔も困を問わず、おるものだね」と静かな、スキ透つた、低いお声で仰言つたことでしょう。

(元昭和飛行機工業株式会社 常務取締役)

冷暖房及び管工事全般設計監督施工

日邦工業株式会社

取締役社長 井 薬 政 市 相談役監査役 宮 地 邦 介 (大11)

大阪市西区南堀江通1丁目2番地 電話大阪(530) 8 4 6 1 (代) ~ 5 番

工場 大阪市大正区南御加島町二丁目二七二番地

出張所 横浜市鶴見区東寺町七二五番地 電話 鶴見(54) 2 3 0 3 番

大正末期の浜林先生

小僧 油 (昭二)

小僧が浜林先生の御薫陶に預ったのは一九二三年の四月から二七年三月の満三年と数ヶ月である。

先生の御薫陶に預ったのは一九二三年の四月から二七年三月の満三年と数ヶ月である。

入学の年は英作と英国製の表装も用紙も印刷も美しい人文地理の本を窓外に郭公の鳴声を聞きながら教わった。其中に吾国の年老いた農夫が牛を使って水田を耕作している写真があり情け無く思ったのを憶えている。

卒業の年はトーマス、ハーディーの何かだったように思う。先生は當時玉の井寮の舎監をして居られ、寮生の為週一回特別講義をされたので小僧もお願いして聴講させて頂いた。テキストはデエロメの『ポートの三人』で小僧の好きなバブ(飲み屋)なる言葉は此時憶えた。英語は本当にむづかしい。英作のテキストは山本有三の『嬰兒殺し』

だった。どうした風の吹廻しか小僧の拙訳をバツサブルだと云はれ教室で読上げて下さった。これに感激した小僧は此榮譽を穢すまいと次回の拙訳はマツキンソン先生に下見して貰い内心得意でいた処、結果は豈計らん哉、殆んど小僧の初の拙訳通りに訂正されて了った。小僧の切角の努力水泡に帰す。米語は当時ミツシヨンスクール以外では余り歓迎されなかつたらしい。

たしか二年の時だった。小僧に訳読の番が当たった折『コーン、フイールド』を『麦畑』と訳すべきを『玉蜀黍畑』と訳して平然としていた。先生静かな声で『K君、これは何処の話ですか?』『ハイ、英国の話であります』『ちがいませんか(先生は皮肉屋であった)』『ハイ、ちがいません、英国の話です』

此時、教室の一隅よりワツト爆笑起る。感の悪い否、英語力の貧弱な小僧未だ何事か判らず鳩の豆鉄砲。嗚呼恥しや恥しや。

先生は稀に見る語学の天才であった。昨今街に溢れる巻舌の下素な西部米語と異り、格調の高い綺麗な『キング、イングリッシュ』を話され、其リイディングを学生達は恍惚として聞いたものである。しかも、小僧達が辞書と首引きで調べても、恰も塵硝子を通して見る如く如

何しても判らない文章も、一度先生の手にかゝると、全く不思議な事にスラスラと実に鮮かな名訳になつて了う。

これは戦後母校木曾教授編集で出版された先生の名著『英語の背景』に其片鱗の覗える如く、英国及び英国民の地理、歴史、風俗、習慣及び国民性等に関する先生の深い学識と洞察力の表現であつたに違いない。

しかも先生は勉強家で毎夜遅くまで読書された。寮生のなかには先生に負けてはいけなないと、先生の部屋に燈が消えるまで頑張つた者も数知れない。かく先生は専門の英語のみならず真摯な研究生活によって学生に勉学する気風を身をもって教へられた。これは緑丘学園に対する此上無い貢献であり、学生に取り無上の賜であつた。

小僧の悪友がいった『緑丘は中央の教授養成所だ』と。地理的なハンディを考慮して当時の渡辺、伴先生達が並々ならぬ苦勞の末、市井に埋れている実力者、あるいはまた少壮の秀才を捜し出しても、緑丘において研究生活五、六年(此間海外留学の恩恵に預る人もある)も経て稍有望視される教授になるとドンドン中央の有名大学へ逃避して了う。余談だが戦後大野学長は此点に關し一方ならず心勞され、これが打開に献身

されたという噂を耳にした。

浜林先生は此点においても高潔な人格者だった。先生位いの英学者に成られたら中央からの誘惑?も数多かつたにちがいない。だが先生は生涯を通じて緑丘に留り学生の訓育指導に献身された。

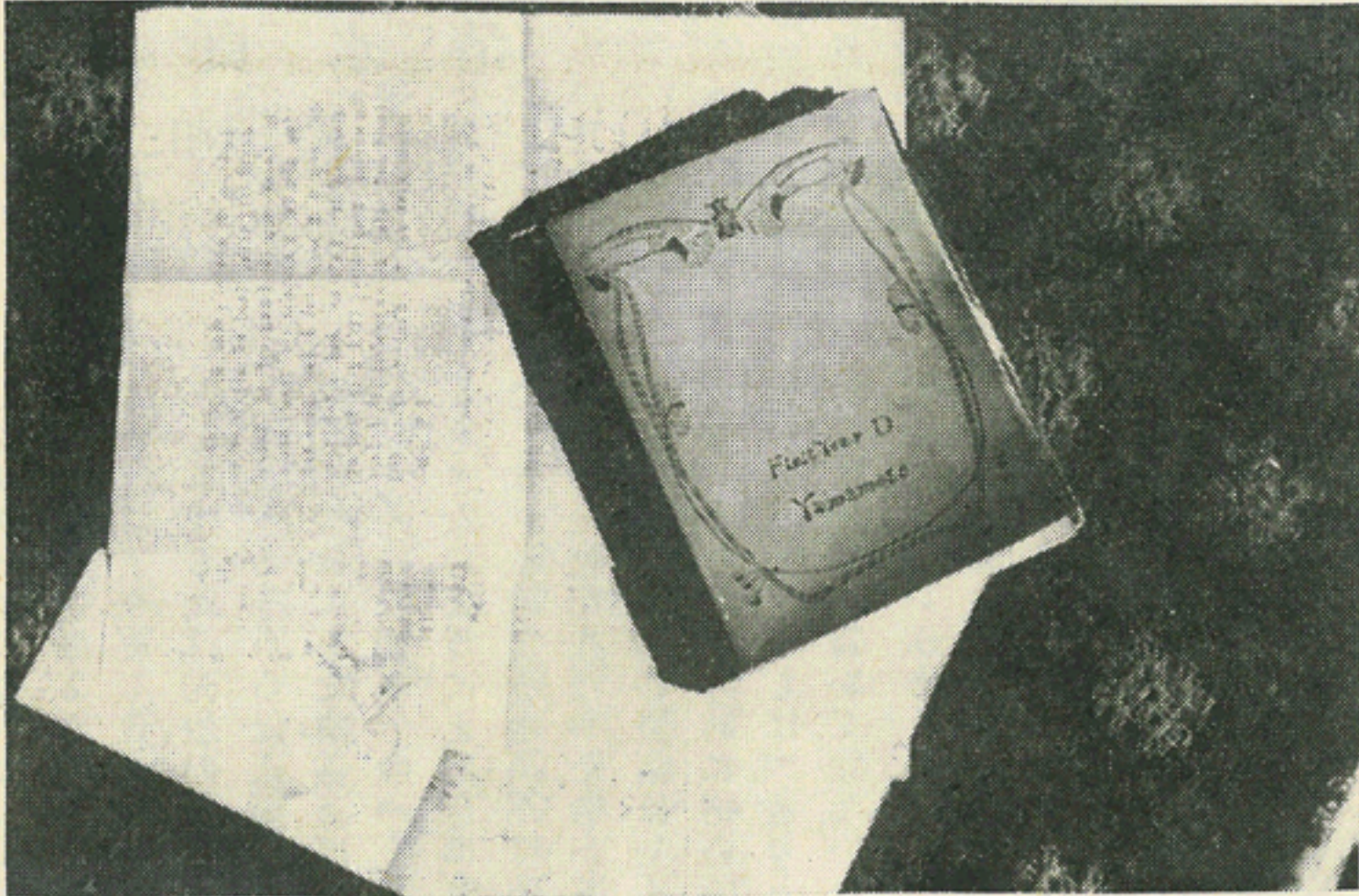
もし先生にして教壇を去り、文筆生活に入られたら、漱石の如く、上田敏の如く、或はまた独文の鶴外、露文の昇曙夢の如く多くの名作を世に出されたのでは無いかと若干残念な気持のしなくも無いのは小僧一人ではあるまい。

先生の感化を受け熱心に励んだ多くの教え子達は現在実社会の凡ゆる分野において夫々立派に活動している。専門の英語の教授になつた人もいる。大谷敏治(東京外大)伊藤整(東京工大、英語教授としての氏を知る人は案外少いかも知れないが)木曾栄作(母校)高橋保郎(北大)を始め多数の先生の後継者が元気で活躍している事は緑丘の誇りであり地下の先生も定めし喜んでいて下さるにちがいない。

確かなる筋に依れば御息正夫博士は先生の御遺志に依り緑丘に來られ、現在人も知る花形教授として活躍していられる。『此親にして此子あり』親子二代尽きせぬ緑丘への愛情、只々感謝あるのみである。

浜さんの英語教育と私

山本 安次郎 (昭二)



私が高に商入ったのは大正十三年(一九二四年)の四月のことである。伊藤整さんが朝日ジャナ(本年十一月十一日)の

浜さんの思い出といつても、すでに四十年も古い昔のことになるからすべて霞の奥にとざされて余りハッキリしない。しかも、浜さんと親しかった訳でもない私には、特に書くべきこともないのである。それにも拘らず、緑丘編集長の求めに応じようとするのは、二十年前渡満の際に、親類へ預けておいた本が此度偶然にも返って来たが、そのなかに當時を語るノート一冊があり、そのノートから浜さんが教材に使われたプリ

ントが見つかつたからである。恐らく、このようなプリントをもつてい

る人はないであろうし、浜さんの思い出の特集というからには、これを貴重な資料として提供して、当時の人達の思い出のよすがにしたく思ふのである。私でさえ、このノートやプリントを見ておれば、次第に震もはれて、当時の様子が思い浮べられ、浜さんの、人を馬鹿にしたような顔が見え、丸くて軟かな声さえ聞えて来るから妙である。

「大学の庭」で小樽商科大学は昔は小樽外国語学校の別名をもつていたと書いておられる。なるほど、そういわれて見れば、専門の教授陣以上に外国語の教授陣は充実していたように思われる。私達の時代を顧みれば、コレボンの苦さん、英語の中村さん、浜さん、小林さん、ビジネス・イングリッシュの蒔田さん、キヤメロンさん、会話のマツキンソンさん、ドイツ語の杉岡さん、フランス語の高橋さん。独仏会話のデーゲンさん、その他露語のスマルニツキさん、中国語の関さん、さらに英文簿記の村瀬さん、商品実験の指導を英語でやるフランクさん、皆なつかしい人々である。いまの新制大学の外国語が如何にお粗末なものであるか、當時を追憶して深く考えさせられるところである。

それはそれとして、浜さんの英語教育である。私は田舎の商業学校の出身で、英語などあやしいものであつた。当時の辞書の発音符号はウェプスター式というのか、とにかく不備のもので、それに取りかわるべく漸く万国音標文字が採用されつつあつた。私達は入学早々写真に見えるプリントのフォネティック・サインで随分ためつけられた。フォネティック・サインを英文に、英文をフォネティック・サインで書かされる。度々その試験をされる。色の黒い顔、鋭い目、軟かく細い声から突きさすような皮肉が飛ぶ、骨身にこたえるのである。それから浜さんが著わすところの(書名は忘れたが)英文解釈の基礎の本を逆に使ってコンボシヨンの訓練をされた。さらには、有

名な山本有三の『嬰兒殺し』の英訳によつて英語的表現を教へ込まれた。教育は生れつきを引出す作用と共に鍛える意味をもたねばならないと思ふ。今日、次第に鍛える面が忘れられつつあることは改めて反省すべき点のように思われる。後年、京大の入試に『枕草子』からの一文の英訳を課せられたが、何とかやれたのは浜さんを初め諸先生に鍛えられたお蔭に外ならない。浜さんの『伝説』や人柄や逸話については他に適当な人がおられようし、また伊藤整さんが『若い詩人の肖像』で語り尽されておられ、蛇足はやめることにしよう。その代り、私の失敗談を書いて筆を措こう。

それはこうである。昭和二十八年春、私の三男が中学に入学することになった。その時丁度病床から起き出せるようになったのを幸い、三男に英語を仕込む気になり、基礎工事から始めるべく、フォネティック・シンボルから始めた。ところが、三男坊はそのために英語が嫌いになり、私の教育は失敗に終つた。彼が英語が好きになつたのは高等学校も後半になつてからであつた。

その点、やはり浜さんは偉かつたのだなあと思つて思われるのである。鳥は鵲のまねをしてはならないし、法は人を見て説かねばならない。浜さんがわれわれの英語教育にどんなに苦勞されたことか、しみじみ有難く感じられると共に自分は果して、どれだけの苦勞をしているかと反省させられるのである。

(京都大学経済学部教授)

貴重な存在だった

浜林先生

清水貞雄

(昭三)



して別れたような事でしたが、その折にも先生の話しが出て皆その頃を思い出した。今更乍ら先生の余徳を偲んだ事でした。先生の名声は自分が緑丘に入る前から伝え聞いて居たので入学後は大事な講義とばかり張り切ったあつた温かな、ゆっくりとした声を逃さないように聞きほれたものでした。私のような英語は不得手で極く平凡な存在だった者が麗々しく憶い出を語る等の資格は全くない事を知りつゝも断片的にあの頃を振り返って、いまでもはっきりと印象にのこる数片を書いて見たいと思います。

一年の時は、先生選の短編集で八雲、マーク・トウェン、キプリング、等のものでトウエンの確か船員が金を使い果し、女装で帰船する様子を面白い文章で進んで行く物語りで、先生もあの白いきれいな歯を見せ、終始笑を浮かべながら講義されて行ったものだった。蛙のジャンプの賭けの話もアイ、ベツチュウと言う声が、いまでも深く印象に残っている。

またロバートブラウニングの詩は確かガリで刷つたもので講義され、題はラストライド、トゲザー、二人の最後の騎乗とでも訳すのか、愛する女性と別れるに当ってきれいな緑の丘を遠乗すると言う別れのつらい

切々の気持と、清らかに別れる様子をよく現わしたよい詩だったと印象は深い。

二年の時はギンシングのヘンリーライクプロフトの手記でロンドンの下町で暮した頃を田舎に帰って煖炉の側で思い出を語ると言うもので、いまにして自分達がその境地に入ったようにも思われ、仲々よい講義であった。

一度夏の頃小樽では、その頃稀であった外人の洋琴家のロシヤのポリス・ラスという人の演奏会があり、私も余りわからないながら種徳小学校の会場に夜行した事があった。先生も行っておられ、印象が深かったのか翌日の講義の折その話しをされ、曲の内バツハのG線上のアリヤをたつた一本の線であのような妙音が出るのだと説明された。その頃ビヤホール通いの連中を指して無理をして、あのような音楽には何んとしても触れて置くべきだと強張られて居た事が記憶に残っている。

また講義の途中で手頃の一節を見出した時は、これは仲々よい文だ。今度試験に出そう、等と言はれるので半信半疑でマークして置くと果して試験に出題されて居りアツと思つたりしたものでした。私は自宅が小樽の緑町なので時折先生とは街でお会した。一度家の前で偶然に着物

姿の先生に会い、何んだ君の家はここかと家の商売の話し等を聞かれ、地味な様子ながら渋い、温和で印象的な美顔の細面の先生のその時の笑顔が余韻のようにいつまでも記憶に残っている。

色々と次々と思ひ出は尽きないものがあり、本当にあの頃の大切な時代所謂ブライスレスアワー、を先生のような立派な人格と得難い講義に触れて緑丘で学んだ事はいまにして思えば全く幸であったと感ぜずにはおられない。いままさらながら、いまは亡き先生に深い感謝の意を捧げる次第です。

(北海道労働金庫常務理事)

浜林先生追悼特集号

読後感をお洩らし下さい

二月二十日

この浜林先生の追悼特集号は多数の執筆により先生の第十七回忌を記念するにふさわしい特集号となりました事を心から喜び皆様に厚く御礼申し上げます。次号に皆様の読後感を掲載し今後編集上の参考にいたし度いものと存じますので忌憚なき御意見をお洩らし下さい。

浜さんという親しまれた名で学生時代尊敬の的だった先生が長逝されたから既に相当の月日を経て今度追悼特集号を出されるとの便りを受けいままさらながら卒業後三十五年という短くない年数を経過した事を改めて知らされ、その間学校とも、先生方とも縁の薄れるまゝ過ごした事を残念に思はれてなりません。

偶々去十一月末札幌の同期生十数人が久し振りに集り、帰りは例によつて校歌、栄光今やの行進曲を合唱

楽しみつつ学べ

坂垣与一

(昭四)

(一橋大学教授)

私が英語の勉強を意識するようになったのは、商業四年生になってからである。ある日の昼休みの時間だった。私は一年先輩のHさんに用事があつたので、五年生の教室に入っていた。Hさんをめぐとくみつけて私は、そばに近づいていった。Hさんは三、四人の友人と何やら盛んに議論をたかかわっていた。突然その友人のひとりが「それでは辞書をしらべよう」といいながら、とり出したのはオックスフォード版の英々小辞典であった。何を争うていたのかはもちろん私にはわからなかったが、イングリッシュ・イングリッシュ辞典を繰っている先輩の真剣な姿をみたときほど、大きな衝撃を感じ

たことはなかった。それまでそういう辞典のあることも知らなかった私には、それはあまりにもかけ離れた別世界の出来事のようにさえ思われた。

このことがあつてから、はじめて私は、これまでの自分の英語の勉強について真剣に反省するようになった。教室で習う英語の教科書で事足りたりとしていた。私も、これではいけないと、もっぱら受験英語の参考書を買ひ漁り、夢中に読みはじめた。小野圭次郎、山崎貞、花園兼定、南日恒太郎、——そして浜林先生之助先生の「英文構成法」も私の書架にならべられた。小樽高商のイメーシがはじめて私に浮びあがつてき

たのは、実は浜林先生の本を通じてであった。しかし、本当のところ、これらのあまりにも受験を意識して書かれた無味乾燥な技術の書に、やがて退屈を感じるようになり、しまいに英語の勉強なんの感激もおぼえないスランプに悩まされるようになった。

五年生になって、秋の頃だったと思う。学校の帰り道、何気なくいつもの本屋に立寄ったとき、偶然に私の眼を射た本がほかならぬ浜林先生の訳註書、トマス・ヘアディ作「恋無情」であった。上質コットン紙の手ざわりのよさ、何よりも巻頭の序文や巻末の広告文の名調子に、何ともいえない新鮮な魅力を感じた。

「百花繚爛の文園に心ゆくばかり逍遙し、楽しみつつ学べ」と著者は呼びかける。「近代英文学は世界文芸の華、可憐凄愴妙艶神秘、変化と表現の妙を尽し研を競うて集まる英文学の名花、湧くが如き讃評を博していまや学生読書界の寵児たり、浜林先生の権威ある訳註識者悉くこれを激賞せざる者なし」のうたい文句に胸をおどらせた。懇切な訳註もさることながら、その訳し方のいかに大胆にして縦横闊達なることよ、しかも訳語の選び方の何とゆきとどいた繊細な心遣いよ。原文と訳文とを克明に対照させながら、私はしばしば

感嘆の声をあげ、朗々と訳文を愛誦して夢心地になるのであった。ウェルズの「幻の園」、ステイブンスンの「見果てぬ夢」——あのころの感激はいまもなお忘れることができない。

大正十五年の春、私は憧れの小樽高商に入学した。一年のときの英語の先生は、苦米地先生、小林先生、蒔田先生の三人であった。浜林先生は二年の受持であつたのか、ついに教室ではおめにかかる機会はなかった。時たま廊下でゆき違ふ背の高い先生にお辞儀して、心のなかで「恋無情」の先生は、この先生だと思ふやいた。二年生になったとき先生はイギリスへ留学され、御帰国の頃には私は卒業していた。すれちがいの人生とは、このようなものか、私はヘアディの「運命」にも似たものを感じずが、私に英語を学ぶ楽しみと喜びを最初に、あたえてくれた先生は浜林先生であった。先生はすぐれた英文学者であつたが、同時に英語受験生の心からの友であり、師であつた。現代の受験生がどんな参考書を心の糧としているか、私は知らない。浜林先生の彫心鏤骨の名訳「近代英文学叢書」十冊がもし再刊されて世に出たならば、必ずや早天の慈雨として英学生諸君の病める魂を癒やすであろうと固く信じている。

義兄の思い出

神戸改革派神学校長

岡田稔

若き日の浜林先生



いたのが、印象に残っています。お正月のことでした。二回目は盛夏の候で、紫竹君たちの挙式に列席するた

私には貴校の卒業生の一人である西川正己氏と宇治山田商業学校で同級で

洋行土産にあるキリスト教関係の書物の古本を依頼したところ、注文

教会史を送って下さいました。その後私も米國に遊米の機を得たとき、

く従順にやっけていくことでした。いつかもらった手紙のなかに、最近新しいゲーテの訳書を読んでいるが、やっぱりゲーテはえらいねと

義兄は広島時代に一米人から受洗はしたが、キリスト教信仰は持っていない。ただ文学書として聖書は愛

聖書と並んでゲーテの言葉が記されているのを見て、私など聖書の神の言葉だと信じこんでいるキリスト教徒としては一種の不自然さを感じる

牧師が出来るなあ」とあきれていました。が、神学校を出たばかりの伝道者には、まだそこまで手が届かなか

教育者として特に英語教育という一つの領域で、義兄は一応の天務を終えたことを私は信じて、尊敬の念

私は浜林一校の弟ですが、義兄とは十五年以上年下でありますので、

戦前に二度小樽の家を訪ねたことがあります。初回は正夫君が確か

を覗く

現代は疑問の時代

オーソリテイに対する反感と挑戦

先づ汲め、現代の一般的思潮を

(昭和7.6.28. 緑丘から)

ゼミナール 浜林指導研究室

窓から入る緑の新鮮なまぶしさ

を反射し合ふ新しい壁！ 浜林教授研究室……階段教室の階



「英文学研究の学生が殆んど多数を占めてゐる……」と。英文

作家。及び作品より初めて、先づ一般的流れとも云ふべき現代思潮を説

(和島雄治郎氏一昭八一提供)



日立商品特約店

日本電氣機器株式会社

取締役社長 天野雅司 (大正15年)

本社 サクラバシ日立シヨーストール

大阪市北区曾根崎新地2丁目50番地

電話大阪(361)8871番(代表)

大阪(361)4602番(夜間専用)

京都受験場から…… 半歳の印象

井藤 久也 (昭五)

思い出は昭和二年小樽高商入学試験の際、京都受験場において英語の書取の時間に始る。丁度先生が英国に留学される直前である。英語の馴染薄かった私にとってはあの流暢なすき通るような気持のよい発音で「By means of the wireless telephone……」で始められた時の事が印象深く、いまなお脳裏に刻まれている。

当時母校には高名馳せし幾多の大先生が居られたにも拘らず私の知っているお名前は残念ながら浜林先生一人であった。それは数多い受験生の大部分でもあったのでなからうか。それ程に先生の名著「英文構成法」が多く受験生に親しまれた事を物語るものであろう。

待ち焦れた先生の帰国も既に私達三年生二学期に入つての事と記憶している。颯爽として教壇に現われた英国風の紳士、之が私達が憧れた浜林先生その人である。

口を開けば朗々玉を転がすが如く齒切れのよい口調と巧みな話法で時にはユーモアを交え嫌な英語の時間も学生をして厭かしむる事なき、その教授振りは大先生としての風格充分、しかし先生も英国に在りては印度人かベルシヤ人か或は、また朝鮮人かと尋ねられたとか、或はまた英圏でも下層社会では通常会話で使はれる言葉の数は三百語位とか、また或る床屋ではHairとAirが反対に発

道具になるな

富崎 信夫 (昭六)

卒業の前年の秋と記憶しますが講義の小説を机上において例の通り物静な口調で次のような意味の事を話された。「諸君は実社会に出て色んな壁に突き当る事は覚悟しなればならない。この壁を乗り越えて前進する事が生きる事である。この壁は然し常時あるものではない。この事より諸君は道具にならないように、特に注意して生きて行かねばならない。例えば、あの男は字を書く事が上手だからと重宝がられて一生字書きで終るようなことがあつてはいけない。算盤がうまいからという事で一生を計算器で終つてはいけない。重宝がられると往々にして、このような事になりがちであるが、それは道具になつてしまふ懸念がある」

私は浜林先生のこの名文句を忘れずに実行して来た事を幸と思う。道具になるような特技は私には無いと思つていても限られた社会のなかで

浜さんの思い出

音されAtmosphereがハトモスフェアと発音されるのに驚かされた御様子。「英国人にして斯くの如く君達の英語の知識は遙にすばらしい」と賞められたのやら貶されたのやら。ともあれ僅か半年では先生から直接多くのものを学び得ず「見果てぬ夢」の儘学窓を出たが先生の温い風貌に接し片時たりとも学び得た事に幸と誇りを感じている。(公認会計士、税理士)

(小樽倉庫社長)

Gentleman「スンス」

鈴木 三七 (昭八)

先生には三年間お世話になりました。中学時代、どの学課よりも英語に興味をもつていた小生にとっては英文学者とは先生のようなお方を指すのだからと思われました。御遺著「英語の背景」(二三、二、十一発刊)も有意義に読ませていただきました。

誠に物静かな流暢な発音も思い出されます。そして時には皮肉な一とき、——ある時間、東北地方から入学してきた一学友がGentlemanを東北弁の発音にありがちな「スンス」と聞こえるように訳した処、先生は黒板に「紳士」と書かれ、その学生に読ませ、一同に披露して匡正される等——仲々興味のあつたご教授振りもなつかしい思い出になりました。

サムさん びつく

小池 三郎 (昭八)

浜さんの思い出を書けといわれて喜んで筆をとった。いまは亡き浜さん。みんなが浜さん浜さんといつて浜林先生とか浜林とかいわず、また

は時として道具になりそうな気配が無い訳でもなかった。そんな時、後継者を養成して順次に引き継ぎ、お互が道具にならないように注意した積りです。私は新同窓生を迎える会に出席する度に先生の、この至言を披露して来ましたが、苦米地先生のコレポンの中にParticular toと云うのがあつて先生の処生訓として、この「何々に限る」は絶体に必要であるから左様努力するようにと言はれました。字を書かせたら、あいつに限る。算盤をおかせたら、あいつに限る。これがParticular toで大切なことだと教えられました。私はこの両先生の言を一緒にして後輩に披露すると共に私自身の為にも復習しております。

浜林先生の思出として三十余年を経た今日なお耳朶に残るのはPostの発音です。授業中教科書にこの字が出て来た時例の通り生徒をして次々に発音させたものです。勿論ポスト、ポスト、子供の時から正直な発音でした。諸君はよくも本校に入学出来たものである。(このあとの句は多分誰かと重複するので割愛します)

ボウスト (POUST) であつた。君は何処の中学の卒業かと聞かれ顔が真赤になつたのは私だけではなかつたと思う。高商に入つてボウストで冷汗をかいたが何事によらず基礎は大事なものだと思ひました。

ボストは冷汗と同居して覚えましたが what happened の使い方は、その発音と共にいまでもはつきり先生の真似が出来程正確に覚えております教科書に使用した小説のなか

に出て来たのですが、先生の名訳に感心して居た時なので余計印象に残つて居たものと思はれます。私は教授法と言うものには無知ですが、以上全く異つた方法での教え方があるとすれば、どちらか教授法としては成功したものと思はれます。

what happened. これが考えずに自然に口に出るであらう時が来た時一層浜林先生に対する追憶と感謝は深まるでしょう。赤いポストを見ては苦笑して来たこの三十年、幸い道具にもなりきらず知己友人から what happened! とも言はれずに来た事を感謝しております。(板谷商船取締役)

プロフェサー

ハマバヤシのこと

山本 信爾 (昭八)

小樽高商の入学試験には英語が最も重要であり、またそれだけに点数が稼げる科目でもあつた。受験勉強には当時幅を利かしていた先生の英語の参考書があり態々夫を求めて何とか出題傾向などを探り出そうとしたものだ。案に相違して実際に出た問題には縁が遠く苦笑したわけだが、さて入学してから先生の講義とお顔に接するに及んで何と、こんな一夜漬の勉強ではとてもエイゴのエの字もマスターする事の困難さを悟つたものである。私はあの英国紳士型の先生と言うよりプロフェサーハマバヤシと単的に呼ぶのがびつたりした位、その人柄を現はすこと

仇名もつけなかったのは、学校の内外にその名をとどろかしていた英語に英文学に對する造詣の深さへの尊敬と、浜さんの渋味溢れる人柄への親愛の情と、内に秘められた鋭い観察と諷刺に對する恐れや驚きに由来するものと考えている。

たしか白髪の出るお年ではなかつたと思うが、白髪まじりの豊かな頭髪と、ゆつたりと間をおいた太い眉毛、やさしそうな目とやゝ武骨な鼻とひげ、それに大らかな口、一見飄々としていながら骨格の逞しい感じのする風格のある浜さんだったと記憶している。ほんとうに浜さんは緑丘の誇り得る先生の一人だった。

不勉強な私には、その後の浜さんの業績や足跡は余り知らないが、英語を通じて学生に残された印象は極めて強烈なものだったと確信している。私は浜さんと親しくお話する機会に恵まれなかつた。ほんとうに残念なことをしたと今でも思つてい

る。しかし唯一つ具体的なことで忘れられない思い出があり、いまでも思い出す毎に微笑を禁じ得ない。さてそれは或日、先生の時間である。教室はシーンと静まり返っている。トーマス・ハーディの英訳に誰かが当てられるだろうかという瞬間である。恐れが現実となつて遂に私に命が下つた。丁度その日は運よくハーディの小説の虎の巻をあらかじめ読んでいたので少々自信を以て訳し始めた。その文章は仲々ロマンチックで女のところにサムと云う男性がその家の垣根を越えて会いにゆくひとこまである。月が輝きやいて、その

辺は明るいのだが垣根や木立の下は暗い。サムが忍び足で女の立っているとそこに近づいてゆく。この間のハーディの描写がいろいろ叙情的に書かれていて美しい。私はその情景に従つて静かに訳していった。誰かが「気分が出るなあ」と溜息まじりに声をあげた。私の訳の最後の部分に今でも覚えているが、こういう文章があつた。「Sam! How you frightened me!」私は少々面はゆかつたが勇をふるつてこう訳した。サムさん。びつくりするぢやないの。私は紅潮した顔をあげ半ば期待をもって浜さんの顔を見上げた。そうすると先生はこういわれた。「君のは日本語に近いね」。

浜さんは決して学生を褒めなかつたそうだが、それは如何にも浜さんらしく、日本語に近いといわれたことは褒められたと同じと解して、今でも得意になつて居る次第である。私の最も敬愛する先生の一人である浜さんの追悼号とあつては、乏しい内容でも何か書かねばと思ひ敢て筆をとつた。

浜さんの面影はいまでもありありと浮ぶが、その浜さんは既におられない。卒業後既に三十年を経過した今日とあつてはやむを得ないことかもしれないが淋しい限りである。浜さんの御冥福を心からお祈り申し上げる次第である。

金にたとえた

浜林先生

寺尾 八郎 (昭九)

「ダバーヴィル家のテス」の一部

を今日只今でもそう思つているし同友諸氏もまた同感だらうと信ずる。

当時は外人教師が少くとも六、七名は居られたし、従つて嫌が応でも口と耳から英語(否語学というものを)を習はねばならなかつたし、しかも、それが相手に通ぜねば役に立たなかつたわけだ。先生が屢々その外人教師達といとも極めて自然の姿で英語で話されていたのを側で感心して見て(聴いてではなく)いたものだった。私の感心したのは英語が旨かつたと言ふことより、むしろ先生の人が柄が、その態度ににじみ出たことに心温まる憶いを何回もしたとか、教室に於ける先生の憶い出も数々あるが、あれでいて仲々厳格であつた。私の教へられたその厳格さというものは語学としてではなく、いまにして思へば云はばマナーエチケツトにあつたように感じた。

私は今日お陰で多少英語を使うチャンスが尠くないが、どんなに酒量が増しても乱れることがないような気がするし何年たつても当時の先生の面影がホフツツとして浮んで来るので時々ハツとする事がある。あのニューアンスの香り高き教室での追憶は末永く私の脳裡から消え去らぬであらう。あの懐しい発音とイントネーション、風格あるプロフェサーハマバヤシはもう眠られてから可成になる。遠く霧立ちこめるロンドン郊外をさまよい歩いてでも居られるのか。よき時代によきプロフェサーにつく事が出来た同友は、また英語というものはなされても人と人との附合いつながりに強い、しかも香り高いきづなを与へてもらつ

が浜林教授のテキストでした。全篇のどの個所に当るか皆目覚えていない。しかし筋だけはうる覚えながらたどることができた。テキストに梗概が載っており、自分たちがやっているのはどの部分かとその学年では時折対比したから。予習には全くこずった。原文に忠実であろうとすれば国語がこちないか、まともな日本語であれば原文から遠ざかるかのどちらかで、さじを投げて教室へ出掛けるのが間々あった。神妙に予習したのは勉強好きのせいではなくもし当てられた時にしどろもどろの醜態をさらすのがいやにだった。動機が不純とはいえ英文学のよさの片りに触れる濃度を増した気がする。

悪戦苦斗の予習とは打って違って教場は春風たいとうたるものだった。なにしろマツキンノンサンの授業と違ってドリルもなければ問答法もなく、教授の名人芸の独演をひたすらうっとり聞きほれていけばよかったのだから。予習にテキストと取組んでいる時に私の手に負えない難所につかると「このパッセジを教授はどんな風に手際よく処理するのだろう」と胸を弾ませたものである。この期待はついぞ一度も裏切られたことはなくその都度鮮やかな訳しぶりに魅了された。原文をそこなわないびつたりあてはまった日本語なのだ。英日双語の魔法使いなのだ。私は独り合点した。

独演という表現から演出を想像するでしょうが、演出なぞみじんもなく、本場に淡々たる授業でした。コース・リーディングは課さなかったが訳す前に低い声で読まれた。そのさまは眼前の私たちのことは一切念頭にないようにひたむきに英文に打込んでいた。ちようど掌中の玉をいとしんで、なでさするよな読み方だった。教授はこの作品にぞっこん傾倒していたのである。

それが、私たちが単なるお客さん扱いにするのに終始したかという決してそうではない。私の予習でお気付きの通り読解だけは私たちにさせた。ある時、近藤英二さんの訳を「よくできましたね」とあっさり賞めた。そこは私たちが歯が立たないと思越してたのだから、この賞め方は余人なら絶讃が至当なのに万事控え目な教授は、それができない。銀いぶしのような控え目は好もしく私の目に映った。

控え目の親類筋に当るのだが、あかぬけたノンシヤランスをも私は教授に見出した。ノンシヤランスはとかく無能、怠慢のかくれみのに使われるのだが、教授のそれは正真正銘のものだった。その証拠に軍部は大陸に事を構えて満州国をでっち上げた。この振舞に英米はひんしゆくしていたのに対し、英米ならするものぞとの風潮が強かった時にアングルサクソンはブルドッグと同じに一旦食いついたら放さない、しつようさを持つてからあなごなるのは、早計であるといましめを洩らしたことがある。偽物のノンシヤランスなら、ほっかぶりして知らぬ顔の半兵衛をきめこんだことだろう。不要な他人干渉はしないという高尚な精神に裏打されたノンシヤランスである。

浜さんの憶い出

自分が捨てられた悲しみのあまり自殺したものであることを知る。アシユハーストは果樹園の老人にも、妻のステラにもその元兇が自分であるとは気付かれなかったが、胸を絞められる想いで丘を降りるという筋書きです。

また先生はトーマス・ハーディーに傾倒されていて、われわれに「ダーピル家のテス」を盛んに推奨されていきました。私も一心発起、本を手に入れて読みはじめたのですが、一千数百頁にも上る龐大なもので、精々五十頁も行った処で挫折した記憶があります。

何はともあれ、生活に潤いを……その貴さを教えて下さった有難い先生です。

(三井銀行 大阪西支店長)

開気と、その御講義を通じてわれわれに英文学(といつては大袈裟ですが)の味わい方を教えていただいたことです。皆様も御経験の通り、学校では来る日も来る日も、やれ経済原論だ、やれ簿記だ、コレボンだと我利々々の盲者になるように詰めこまれたわけですが、その中であつて、先生の時間は正に砂漠でオアシスにたどり着いた思いをしたものでした、われわれの生活には、潤いが絶対必要なんだと教えられましたし、現在もそれを身をもって体験しつつあるわけですから、私から私は今でもソロバン玉をはじいて明け暮れする銀行の仕事に疲れた時など、「林檎の木」の物語りをなつかしむので

この本は戦争中の疎開騒ぎで紛失しましたが、二十八年を経たいまでも明瞭に筋書きを追うことが出来ます。アシユハーストという大学生が田舎の果樹園でミーガンという娘と恋仲となり、春の夜の林檎の木の林の中で抱擁する。そのトタンに娘が幽霊を見る。この幽霊はミーガンの後の運命を予言するかの如く現われたのでしょうか、アシユハーストはミーガンを捨てて都会育ちのインテリ娘ステラと結婚する。二十五年後アシユハーストは銀婚式のお祝いに、ステラと共に近郊のドライブ旅行に出かけ、とある丘の上で休憩していた処、そこに自殺者の墓(アチラでは自殺者の墓は一般と区別して立て形も違う由)を見付ける。偶々通りかかった老人に問いかけると何とこの老人は前述の果樹園の使用人であり、墓はミーガンのもので、

自分が捨てられた悲しみのあまり自殺したものであることを知る。アシユハーストは果樹園の老人にも、妻のステラにもその元兇が自分であるとは気付かれなかったが、胸を絞められる想いで丘を降りるという筋書きです。

また先生はトーマス・ハーディーに傾倒されていて、われわれに「ダーピル家のテス」を盛んに推奨されていきました。私も一心発起、本を手に入れて読みはじめたのですが、一千数百頁にも上る龐大なもので、精々五十頁も行った処で挫折した記憶があります。

何はともあれ、生活に潤いを……その貴さを教えて下さった有難い先生です。

(三井銀行 大阪西支店長)

無意識の吸収、あの発音

土屋 龍郎(昭一)

栃木県山奥から笈を負い遙々津軽海峡を渡り小樽高商に入学したのは昭和九年四月でした。山頂には残の雪が姿をさらけ出し、風は肌をさし、寒々とした風物がいうにいわれぬ淋しさを多感な少年に感じさせました。しかし入学して内容を語学にとつてみると名前に違わず、浜林先生、小林先生、外人教師ではマッキンソン教師、ダニエル教師、コレボンは木曾先生といづれも錚々たる権威者許りでして矢張り他校をへいげいでいたことは事実でした。初

リザードはする、他人事には介入しないという態度から親しめなかつたが、それでも卒業式間際になつても就職が確定するのは滅多になく、卒業証書則失業証書の就職難で、私たちは憂うつだつたのを見兼ねて「金を見給え。金はなにも売込に狂奔せずに悠々と安眠に耽つているの人間共が勝手に血眼になつて探し求める。これは金の値打が絶大だからである。それにしても、金に埋れつぱなしというのではないが、かすに時をもつてしなれば陽の目を浴びることはない。これと同じに君たちが発掘される時が来る。その時には君たちは、さん然と眞価を發揮する。」と私たちに金になぞらえて活を入れてくれた。この暖い思いやりは実現して、鋭い洞察力通り昭九会に面々はやがて求人側に迎えられる、今は各分野で活躍している。私たちに自負心をふるい起こさせたこともさることながら自ら頼む所のない人には吐けない言葉である。

テスの作者トーマス・ハーディーは一九二八年に他界している。この人を失つて愛惜の余りテスを私達に講義したのではないかと想像してはフイクションになるだろうか。私たちが教授がいつ帰朝されたかあいまいである。とにかく私たちの入学と近接しているのは確実なので、あるいは教授の留学中に彼の死に会つたかも知れない。近來英語国にてトーマス・ハーディーは非常に高く再評価されているにつけても、教授を想うとテスが思い浮び、テスを想うと教授が思い出される。私には浜林さんがテ

めはかかる先生達の教授について行けるかなと内心びくびくしておりました。

のでしようか。Where did you learn English? your English sounds like British といわれては

たと思ふものがありました。浜林先生の発音を無意識の中に小生が吸収していたのでしようか? 浜林先生の憶い出は小生には命の糧です同時に良き師について何故もつと励まなかつたか、悔悟の念がわいて来ます。

(シエル石油大阪支店 販売部長補佐)

漱石をおもわす

井上 克己(昭一)

私は昭和十一年卒であり、浜林先生には高商一年のとき英文学エッセイを教わりました。

浜林先生には樽中の時数回お顔を

出講で知つておつたので、始めてではなかつたが、大層静かな穏な調子の講義で、始めて英文学の心髄たるエッセイを知りました。たしか、エリオットの作であつたと思ひます。

随筆の如何に軽妙なよき、を知り、それ以来森田草平や寅彦、たまさん等の随筆をかたつ端から読み始めた機縁となりました。

私達は当時先生方を親しみと愛称でそれぞれ渾名で呼んでおりました

が先生は「浜さん」と呼んでおりました。浜さんはこげ茶の服か黒い洋服をよく着ておられ、真っ黒い顔から白い歯を出され、「顔が特に色黒であつてその印象が深い故かそう感

じた」と痛烈なアイロニーをよく言

われた。

濱さんの憶い出

濱林先生の憶い出を喜んで書くことにしました。「喜んで」と申しま

すのは、実は小生筆不精で、従来新聞とかお得意さんの社内誌などに原稿書きを強要されて、正に死以上の苦しみを味わつていたので、先生の憶い出は、すらすらと書ける気がするからです。

先づ脳裏に浮かぶのは、先生の瀟洒な英国紳士風のスタイルです。先生はなかなかのスタイリストで、本場で生活されただけあつて洋服の着こなしがまことに板についておられた。それに一寸気取つたポーズをされるのですが、ちつともいや味がな

い。祝日もなれば、山高を一着に及んで颯爽と御登校になる。山高帽と申しても若い方は御存知ないでしょうが、活動写真……いや映画で、村長さんなどがかぶつてでてくるあの碗の形をした帽子です。当時は上流社会のシンボルとして重用されていたもので、他の人がかぶつていると少々ユーモスラになるので、先生だけは英国紳士型に益々磨きがかかる、といった調子でした。

それから小生にとつて特に印象の深いのは、先生が当時テキストとして選ばれた「林檎の木」Apple Treeの御講義と題する物語りの持つふん

試験の点数は随分辛い方で、私も一度所謂つかまされた、落第点ももらったことがあった。それ以来すっかりこりてどうやらすれすれで卒業させてもらった。

私は漱石はどんな学者か面識がありませんが、一時漱石に擬り、作品、随筆、伝記あらゆるものをあつめた経験があり、一番好きな哲学感を持った学者であります。何かしら浜さんはこの漱石を思わしめてなりました。風貌などもなんだか似ているのでないでしょうか。

小樽高商が産んだ学者として先生の業績は燦然と輝いています。私達の在学中に英辞典の編さんや英文学の訳で、浜さん、浜林生之助の名前を見、如何に当時の学生が誇りに喜びを感じたか知れなかつた。

私達の遠い思い出の胸の底に何時までも浜さんの姿が残っている。
(住宅金融公庫)

東京受験場の

ヒヤリング

小池 輝 男(昭一一)

昭和八年三月東京外語で行われた小樽高商の入学試験の時、始めて先生に接したわけである。確かHearing か Dictation かの試験担当をされた時、始めて先生の英語に接したのである。

群馬県の桐生中学に入学し、ここで一年の一期を、全然 Alphabet も教えず発音記号のみを基礎に、発音だけを叩きこむという変わった先生

浜さんの思い出

に教えられ(今でもこれが大変有難かったと思つているが)二年の時、東京の立教中学に転校、ここで外人教師に編入早々、発音がよろしいとほめられたのが動機で英語が好きになり、その後四年生、五年生の二年間、アメリカ人教師を中心に英会話のグループを作つてそのメンバーだつたりしたので、試験場で先生の発音を始めて聞いた時、何となくめらかな、と強く感じた当時の印象を、今にもまざまざと思ひ出すことができる。

小樽時代は全く先生の授業は楽しみだつた。英国仕立の地味なそれについて何か味わいのある落着きを持った洋服を無造作に着こなされ流暢に講義を進めながら、時々折にふれとばされる wit に満ちた皮肉、警句等、全く楽しい授業だつた。

三年になりゼミナールを選ぶ時、私はためらいもなく浜林教授の英文学にした。ただ運動をしていた関係でよくさばらざるを得なかつたためそして更に卒業前十一月、就職の面会上京し、合格しながら体格検査で肺浸潤の診断をされ、シヨックで十二月以降殆んど学校に行かず下宿に寝てしまひ、従つてゼミナールにも殆んど出なかつた私は、先生に對してはあまりよき弟子にはなかつた。と今にして慚愧の至りである。ゼミナールでは先生が選んで下さつた英国の作家(今はもうその名前を思い出せない)の小説を読んで時折の発表をする事になつてはいたが、前記のような次第でこの Dansel in Disting という本の内容も殆んど憶えていない。でも先生のお部屋

で覺つかない Reading のあとこれのたどたどしい口調で訳す私を温いお顔で、終始聞いて下さつた先生を忘れる事は出来ない。
(日本ビーシーエス研究工業株式会社 業務課長)

音楽の造詣も

深かつた

柴 竹 僱津視(昭一一)

小生昭和十七年縁あつて木曾先生の御媒酌に依り浜林生之助長女照子と結婚、長女は昭和二十二年十一月二十九日に誕生しましたが、先生は僅か十日の遅いで初孫の顔を見ず十一月十九日に亡くなられた事は甚だ残念な事でした。現在次男の正夫君が遺志を継いで母校で教鞭をとつて居ますので此の点先生も安心して瞑目されている事と思ひます。

先生と小生との繋がりには小生高商受験の折、札幌の予備校にて英語を教わたつたのが始めてですが、高商入学後英語のレッスンの多いA級を志望したのも先生の影響が多分にあつたように考へておられます。

元來頑健な体質でなかつた為か、音声も低く教室でも余程注意を集中してないと聞き取れぬ事もあり、さらに静かな口調で話されるも骨身にこたえるが如き独得の皮肉には一同全く悩まされたものですが、反面その解釈のあざやかさには膝を叩いて感嘆する事多く予習にも次第に興味が出て生来余り利口でない小生も英語には比較的良い点が取れたよう

私の保証人

酒 井 誠(昭一一)

浜林先生は私の小樽の保証人であり、在学中病氣にかゝり一時危篤を宣告された事もある私にとつては、非常にお世話になつた恩人であります。

随つて私が小樽を志願するに至つた経過について奇しき因縁があり、それが後になつて浜林先生につながり大きなみちびきとなつたもので、先生にとつては有難迷惑な事であつた事だらうと思ひます。それは中学の校長先生が吉田さんというお方で小樽の長橋中学より来られたため小

樽への進学を私に薦めて下さつたのを素直に受取つた贈物として合格の晩に浜林先生に紹介をいただいた訳で、同先生は広島高師で2、3年先輩であつたようです。そんなわけでも知らない小樽に向つて希望の胸をふくらませて渡道した私は、先生は親のような感じで何かと相談に出かけたものでした。当初は大学へもと大いに勉めた積りですが病のおかす処となり、これは断念せざるを得なくなり、あはや、卒業も危いかという時さへありましたが、諸先生のお蔭でどうやら小樽だけは卒業させて頂きました。学校では授業中なかなか、しんらつな諷刺がよくとび出しましたが、家庭ではなかなか良いお父さんのように見受けられ、私も何かと御指導を受けました。

いま緑丘に浜林先生の追憶号が出る時の話でありましたので、私は當時を偲び筆をとつた次第ですが、私がこゝで「云々」する迄もなく同先生が非常に日本人らしからぬ、むしろ英国人に近い会話、更に英文法に造詣の深い事より来る英人の得意のユーモア、諷刺に非常に似ている同先生のそれらを思い浮べ偉大な先生であつたと、いまさらながらしのばれてなりません。

(富士銀行 八王寺支店長)

先生と胃痙攣

桜 庭 幸 雄(昭一一)

中学五年生のころ、当時JOIKから放送されたラジオの「受験講座」をきいていたので、英語の浜林先

生(國漢はたしか当時北大予科の宇野親美教授)のフアンであつた。フアンであつたといふこと、英語が出来るということ、は別問題で、緑丘の学生になつてから浜林先生にほめられた記憶は一度もない。しかし、あの歯切れのよい発音とや、皮肉なシヨックとは、依然として私を先生のフアンにしていた。

一度先生に、嘘をついたことがある。三年の時、同級生のY(彼も物故したが)がサボつて学校を休むこととなり、私が届けることを頼まれた。私は翌朝、職員室へ行つて、生徒課長であつた浜林さんに、その旨を届けたのだが

「Yが急病なので今日休みました」「急病? そりや大変だ、病氣は何だね?」

「そこどうつかり」「胃がいれんです」「そりや大変だ」

と先生はもう一度繰り返してから医者に見せたらう。医者は何処の医者だ、と矢継ぎ早の質問だ。私には胃がいれんの経験がなかつたので良く解らぬが、「とに角、医者が下宿へ来てくれて注射をしたら嘘のように痛みがとまりましたが、今日一日寝かしておくように云われましたので」

浜さんの思い出

わたしは君、胃病の權威だからね」と笑われた。しまった、別な病名にすればよかつたと思つたが、もう遅い。先生は職員室の角火鉢に片足かけて

内田百問の

随筆をすゝめる

岡 本 元 次(昭一一)

入学して、浜さん(こう呼ばして頂くことを御許し下さい)の講義の第一声は、こうだつた。「君達ね、高商の入試に合格したからといって英語の試験が出来たと思つたら大間違いですぞ……」この言葉は三十年経つた今日でも、私の耳に生々として居る。

入学して最初の講義といつても、実は私は入学した年、一年休学した。入試は当時一橋近くにあつた東京外語(現外大)で行われた。小樽には英語の入試に、当時もおそらく現在もあまりないと思うHearingがあつた。その時のHearingの先生が

耐酸・耐蝕・鉛加工・鉛工事一般

日本 滲鉛工業株式会社

社長 大久保 鹿 式 (大正12年卒)

大阪市東淀川区木川西ノ町六丁目五

電話 三 国 (392) 1 1 5 1 (代表)

浜さんであったことを入学後知った。私は最前列の真中だったから、先生の真ん前にいた。地方出の中学生には、Hearingなどは最も苦手で、さっぱりわからなかった。静かな調子で流暢に聞かせる。声が低いので、速くの席の者に聞こえるかな、そんな余計なことを思った。私はその入試中終始高熱に悩まされた。幸い合格したので、無理をして小樽へ行ったもの、当時の川柳校医に肋膜炎と診断され、入学式に出ただけで、雪のまだ残っている小樽をあとに、再び内地に帰り、一年間静養した。その時浜さんの講義用テキスト (Milne: Not That It Mattersだ) を買って帰った。翌年私は一年生として再登校した。その時の第一声が、冒頭の言葉であり、その時初めてこれが有名な浜林先生か、入試の時恨めしく思った先生だと思った。

一年後の新しいテキストも随筆集だった。「The Rush Age」という本だった。それはその本の最初のエッセイの題からつけられたタイトルだった。その中の一節は今も覚えてる。その中に、You realize that there is no room in it for motorists and pedestrians というのがある。こゝで it は London。当時日本では想像もしていなかった車の洪水が、今日各地で混乱を起している。ロンドンのことは知らないが、どうだろう。

先生は、英語をうまく訳そうと思つたら、まず日本語に通じていなくては行けないと、私達に国語の勉強をすすめ、内田百間の随筆を推奨し

浜さんの憶い出
た。先生の言葉には、その静かな口調、態度とは対照的ときえ思われる響きを感じられた。先生が英国に留学中、ある理解出来ない英語があった。指導を受けている師に訊ねたところ、それには答えず、ただ一言、「I envy you」と言っただけか、浜さんから聞いた。なんでも入れ歯の意味の言葉だったと記憶する。浜さんが皮肉の影響をその師から受けたか浜さん本来の性格なのか、先生のこのことから、師の影響よりも、後者の方だろう。

三年になつての浜さんの講義には難解な J. Galsworthy: The Man of Property が使われた。その講義の時間に、私はある単語の意味を問われた。私は予習していたので辞書を引いたが会憎その単語がなかった。その旨答えた。短かい単語だったのが忘れて了つた。その時私の机の上に研究社のポケット英和があった。先生はそれを見つけて、「ありますよ」と言い乍ら辞書を取り上げました。「ありますね」と辞書をおいた。私はぎやふんだった。確かに辞書は引いたんだが、Spell を見誤ったのか、見つからなかった。それだけならまだよかつたんだが、そのあとがいかげんか。君なかなか講義はうまいが、英語の勉強もしてくれ給え。皮肉なんてもんじやなかつた。

浜さんの講義の次に、大谷先生の講義があつた。黒板にまだ浜さんの字が消されずに残っていた。うまいですね、枯れた味でもいろいろうまいでしょうか」と大谷先生改めて感に入つた様子だった。

先生がお亡くなりになつたことはしばらく知らなかった。英語の背景」という本が出て初めて知つた。驚いた。残念だなど痛感した。先生を偲ぶために、その本を買つた。紙がまだ不足していた時だから、出版は大変だったろう。それだけに価値のあるものと認められたに相違ない。それにしても粗末な紙で、何か先生に済まないように感じたことを覚えてる。

色の黒い、油気のない髪をした村夫子然とした浜さん。一度教壇に立つと、教室は名講義に静まりかえり、思はず低い嘆息をあげさせた浜さん。小樽の誇る教授であり、私達の畏敬する先生だった。

原稿のメ切が迫つて、相変らずの一夜漬けて拙辞を連ねた。百問でも読んでおけばよかつた。

(東栄段ボール株式会社)

生活必需品

北条恒一(昭一四)

昭和十一年四月。白線の高校生の望みも破れ、傷心の私は泥んこの小樽の街に辿り着いた。入学してしばらくの間は、もう一度東京へ帰つて高等学校を受験し直そうか、どうかという気持の乱れが、出席は不定、酒も煙草もという生活に私を溺れさせていた。学校ではこの年からせち辛い出席点制度ができていた。一時間休むと一点宛減点という今思えばまことに馬鹿々々しい制度で、その上尚悪いことは欠席届を出す、このマイナス一点が〇・五点になる新

しい仕組みであつた。当時の校長は苦さんであり、生徒課長は浜さんであつた。この浜さんが、この不愉快な制度の生みの親であることを寮の先輩からかきかされていた。出席の乱れ勝ちな私は、仕方なく生徒課に欠席届を出しにゆく日が多かつた。と或る日、生徒課の陰気臭い部屋から出ようとした私は浜さんに呼びとめられた。

「君は北条時敬さんと何か関係があるのかね」ときかれた。おそらく度々欠席届を出しにゆく私の名前が目にとまり、「こいつはどういう奴だろるか」ということで、私の戸籍調べが始まつたのであろう。すると私の親父は北条時恒であり、時敬と時恒じや何か関係があるのじやないかということになつたのであろう。

時敬は私の親父の叔父であり、私が十いくつかの時に亡くなつたが、私の記憶では何となく厳めしい、とつきにくいお爺さんだった。親父からきかされた話では、筋の通つた頑固さで有名だった人で、昔、金沢の第四高等学校の校長をしていた時、時の総理大臣である伊藤博文が金沢にきたとき、知事だとか、いわゆるおえらい方々が、その宿舎に御機嫌伺いに行つたのに、

「教育は政治の支配をうけてはいけない。」

という信念から時敬校長、とうとう御機嫌伺いをしなかつたという話がある。浜さんは、この私にとつての大叔父が、後年広島高等師範学校の校長をしている時に、この学校の生徒だったのである。

「なるほど、これじやうるさいわ

い。」

と私は浜さんを見直したが、そんな経緯があつてから、これが現代用語にいう人間関係というのか、何だかんだうるさく言われたが、妙に親近感だけは持っていた。今でも目に浮ぶのはいつも茶色の洋服を着て、色は黒く眉毛の濃い苦味走つた英国調の紳士である。

二度目の三年生の時、私は浜さんから英語の時間に「サイラス・マーナー」を習った。その教科書の第一頁に「necessaries」という単語があつた。この単語の意味を授業中に私がさされてできなかったのか、それとも前後の関係からの適切な訳語がどうしてもわからなかつたのか、その時の浜さんのまことにうまい訳し方が、あれから二十何年もたつてゐるのに、今だに耳に残り、そして私個人の為に役立つたのである。この単語を流暢なやわらかい言葉で「生活必需品」と訳されたのである。

これが私個人に役立つたというのは、大東亜戦争の末期に、この戦争に私はあくまで批判的で、絶対に日本の軍隊に協力しなかつたのに、アメリカの無差別爆撃は、私の家まで焼いてしまい、同時に物心ついた心から集めていた千冊に及ぶ蔵書も焼かれ、落ちぶれはてて神奈川県は逗子の町はずれに身を寄せた。しばらくの間、町はずれの家から逗子の駅まで自転車で通つていた。逗子の駅まで歩けば三十分近くかかる、どうしても自転車はなくてはならないものであつた。ところが悪いことに私の嫌いなアメリカの兵隊がこの狭い町に、うようよしていたのである。

彼等の行跡というものは、こんどのケネディ暗殺に象徴されているように、まことに野蠻の極みであつた。十年前前だつたか、或る晩、日本共産党の伊井弥四郎さんと二人で一杯飲み、彼は元国鉄労組の委員長であつたので、私もおこぼれ頂戴と酔つた勢いで一緒に乗込み、何だかんだしゃべりまくつてゐるうちに、隣にいたフランスの黒人水兵に

「お前さん。アメリカの兵隊を好むか。」

と伊井さんと二人で、たどたどしい英語で聞いたところ

「大嫌いだ。」

とこれまたたどたどしい英語と身振り返事をした。彼等は世界中できりわけてゐることを余り意識してゐない。この野蠻なアメリカの兵隊に私は逗子駅から家が帰る途中、しかも、それは昼日中、強盗されかけたのである。私の乗つていた自転車を止めて、その自転車をよこせというのである。途端に私はかいつとなつて、

「てめえら毛唐は、日本で強盗をやるともりてきてゐるんならとつと失せろッ。」

と怒鳴つてやろうとしたが、英語じやこれが出てこない。そこへ思いがけず私の口から

「デイス・イズ・マイ・ネセエサリイズ。」

という言葉が飛び出したのである。そうしたらアメ公は手を離したので私は力一杯ペダルを踏んで「馬鹿野郎ッ」と言つて逃げ出した。

道々「浜さんにいいことを習つた」

教室の静けさ、先生の人格の反映で

飛塚誠一(昭一四)

浜林先生はこわい先生であつた。恐ろしいという感じではなく、畏敬に通ずるこわさである。先生の授業はしんとした。先生の實力である。教室をしんとさせる先生はいくらでもいる。しかし、大きい声一つ出さず、淡々とした講義を続けながら学生を威圧する空気が教室内に漂ふということは、先生の人格の反映である。

先生は英語の教授であるから、その人格とは、専門の英文学の造詣の深さ、英語そのもの、実力に裏打ちされていなければ、意味をなさない。その点先生の英語の力は奥行きが深かつた。そして先生自身も、その点充分自信を持っておられたようである。その自信が教室を、森厳ならしめたのである。

昭和十四年に私は緑丘を卒業したが、当時支那事変が深刻な様相を呈しつつ、また一方欧州においては、ヒトラーの台頭が不気味な将来を示唆してはいたけれども、なお緑丘の学舎には、アカデミックな校風が温存されていたし、語学に対する愛着は、多くの学生が強く持つていた。しかし先生の専門である英文学

を、先生の指導を受けて深く極めようとする者は居なかつた。その衣鉢を継がんとする者は皆無であつた。その点先生は、当時の学生に対し、もの足らぬ感じを持っておられたと思う。

吾々、英語に興味を持っていた者は、先生の門を叩く代りに、当時、英国の名門の大学を出られて、赴任されて来たストリー先生を囲んで英語研究の集ひを持った。ストリー先生は吾々生徒とあまり年令も変らず、好奇心の旺盛な快活な英人であつた。日本に対し、素朴な愛情を持ち、吾々との交際も、卒業まで変ること無く続いた。否卒業後も、先生来日の都度、集れる者は集つて、旧友を温めている。今ストリー先生は、英国にあつて母校の日本史の教授をされている。

そのストリー先生も、浜林先生の学殖に就いては尊敬の念を持っておられた。そして一見何の波瀾もなく流れるように講義されてはいるけれども、講義の前夜は、いろいろと真剣に準備されていることを知つたのもストリー先生からである。私は一層先生に対する尊敬の念を深めた。そして従前よりは、私自身も先生の講義の前日、準備に身を入れるようになった。

厳格な講義の合間、教材にロンドンの街が出て来た時等、先生は楽しそうに曾遊の想ひ出を語つて下さつたが、先年、ロンドンを訪れた時、先生の話の内容がさつぱり甦つて来なかつたのは悲しかった。廿数年の歳月は若い日の貴重な記憶を空しくする。

卒業後、何年か経て先生が宿病のため逝去されたことを知った時、あゝ、また一人緑丘は惜しい先生を失ったものだと思つた。...

母校の想ひ出は、卒業後、年を経るに従つて色濃くなるように思はれる。拾年、卒業後廿幾年目かに小樽を訪れた時、寸暇を割いて、一人地獄坂を登り、校舎を訪れた。...

「浜サン」は愛称は緑丘に学んだ多くの人々の語草の中に「忘れ得ぬ人」の一人として永久に生きていくのでなからうか。...

「浜サン」と悪童物語 野田 政 秋(昭一七) 学校の先生の幾人かには必ず誰がつけたかわからないが愛称と言うものがある。...

「君たちは六三一人の志望者から選ばれて入学を許可された二五六人の一人々々である。君たちが出来たわけでは決してない。落ちた人よりやや、点が上廻つたに過ぎない。むしろ英語については最低の年度だった。」

浜さんの思い出

私が小樽高商に入学したのは今から二十四年前の昭和十五年の四月であるが、浜林先生のことを先輩は「浜サン」と教えてくれた。...

「浜サン」は大正九年に小樽高商に赴任され、昭和二十二年になくなされたのであるから私達が先生から英語を教えられたのは先生の人生から見ると晩年の時にあたる。...

先生から受けた印象は単なる英語の教師ではなく濃厚味のある英文学者であった。「英語」という言葉を通して英国の国民性、貴族或いは庶民の社会生活を語り、時には英文学上に登場する主人公の人生哲学を講義されたものだ。...

当時英語を数人の先生から教はっていた。うち某助教教授は満二十三才の紅顔の美少年といった感じの先生であった。しかし東京高師をトップで卒業された秀才の方で小樽に赴任されて二年目とか。...

共、大笑いをしたことがある。あとで浜林先生、何かうまく訳された記憶がある。 も一つ、二年生の時と思うが、学生は予習も出来ていないし、先生もお疲れになっていたのか、或る日、先生に漫談をおねだりした処、先生ニコニコして、それではと、...

まいが、お構いなく授業の始めから終りまで日本語を全然使はない教授法をとられた。 質問されても、質問そのものがわからない始末。日本人なんだから少しは日本語で説明してほしいといった生徒の潜在的な不満が芽生えてきた。...

或る日のこと始業のベルがなると同時に誰言うもなく「一つエスケープしよう。皆窓から外へ出よう」という訳で窓外に飛出して芝生の上で横になること数分。 教室を覗かれた先生は誰もいないので当然このことは生徒課長のところへ注進された筈。...

「浜サン」の登場とあつては純心な悪童だった丈に皆内心ことの成行きを思案顔。 「浜サン」はおもむろに「本日の諸君の行動は誠にゆゝしき問題である。我々が学校の門をとじるか、諸君が丘を下るか道は唯一つである。しかし諸君の父兄は、そのいづれも望まないであろう……」と諄々とさとされた。...

結果は「浜サン」の人間味溢れる訓戒の一駒でことなきを得た。御迷惑をおかけした某先生にも、この機会にお詫び申し上げたい。 最後に「浜サン」の御冥福を祈りつゝ筆をおく。 (雪印アイスクリーム販売KK)

技術革新に貢献する 丸嘉機械株式会社 MARUKA 大阪(本社)・東京・名古屋・岡山・広島・姫路

「嬰兒殺し」英訳の思い出

岡田政次郎

(住友商事(株)常務取締役) (昭二)

浜さんには、小樽の三年間、御教えを受けたが、今も数々の思い出の中で特に鮮かに想い出されるのは「嬰兒殺し」の英訳をやらされた時のことである。...

共、大笑いをしたことがある。あとで浜林先生、何かうまく訳された記憶がある。 も一つ、二年生の時と思うが、学生は予習も出来ていないし、先生もお疲れになっていたのか、或る日、先生に漫談をおねだりした処、先生ニコニコして、それではと、...

青春重ねて来たらず

赤津俊樹 (昭一九)

これは昭和十七年に入學、十九年秋に緑丘を去った私達へのあの「浜さん」の第一声であったのである。私達が教へをうけた二年半は戦争という緑丘最悪の云はば受難の一時代であったわけだが、先生にとっても英文学研究を阻む悪夢でもあられた

英語の背景 濱林生之助 北條書店版

わけだ。先輩によく聞かされた先生一流の皮肉も心なしか、当りの弱さをも覚えたものだ。そのような或る日、講義を終えて帰られる先生から教導部長室へ呼ばれた。何だろと内心いぶかりながら室に入ると、あの特有な低く静かな声で「君は勉強したらもつと出来る、素質はあるんだから怠けるなよ」とさとされた。...

☆「ウエセクス」 一度かういふことがあつた、スウオネチに行くつもりで切符を買って車に乗って待っていると、「甚だお気の毒ですが、けふは人が少なくてスウオネチ行きは成立しませんから、ウエーマスに変更して下さいませんか、賃金は同じです、あなたはいかですか？」と私のうしろの男にきく。...

☆吉田惟孝は、その伝説を裏書きするようなもう一つの浜林伝説を、昼食の座興に私たちに語った。それは浜林生之助が高等師範学校の生徒だった時代、教師は浜林に訳読を宛てたときには、それでいいと云つて、そのあと自分では講義しなかつた。...

まんびつ五人集

次回

津久井 七雄 (大一一五)
 中田 乙一 (昭七)
 福田 誠 (大八)
 福村 鉄太郎 (昭一四)
 野村 善梧 (大一一五)
 大平 善梧 (大一一五)

幻を追って

下吹越 栄吉

(大三)

(東京支部)

「持統すること即生することだ」と言うが若き日の夢幻が今日なほ私を生き永らえさせてくれているようだ。大正三年学校から室蘭の日本製鋼所に御世話になり自らなる大きな希望を胸に秘めて孜孜として勤務した。先輩として長谷川清治、西郷、石塚氏等の指導を受け、またクラスメートの川上久辰、本間悟一君達と手を取り合せて、仕事に精を出した。よく働き、よく遊んで、楽しい毎日を送った。其間よく未明に起き出て付近の山野を歩き廻り道なき熊笹を踏み分け鳥を驚かしたりして工場開門に職工達と共に入場して作業状況を順を追って見学して事務所に出る事を続けていたのだが、或日、重役室に呼ばれ、何の目的で早朝から工場内をウロツクのだ。海軍の監督官から注意があったがと尋問されたので、驚いた。当時室蘭工場では日本海軍の御用で諸種の兵器の製作に当たっていたので相当秘密な部面もあつ

たことで、あやしまれたわけだ。当時日本製鋼所は日英共同資産であり英国から技術者が多数来て居り、年二回英国から会計士が来て会計監査もあつて原価計算も当時としては相当整つていた。毎月の工場作業の原価計算書が表示されて経理部へ回つて来るので記帳するのには理解を持たねばという心算からの工場作業の見学であることを納得してもらつたのだが以後許可なしに工場に入らぬようにと注意された。そこで、それからの早朝は山歩き専門となつて、山野を跋渉してウツ積のはけ口となつたようだ。

大正五年の正月元日であつたが常よりも早く寮を出て茶津の町並を通りぬけ栗林牧場のあるところを経て大平洋岸の巖壁に立つてみると、水のほとと東天が明るくなつてくる。水平線に雲も出て茜さして、まさに太陽が産れ出んとすると、それを迎えるとして雲がわき巨人の如き入道雲になつて来た。驚くべき偉大な形の入道、まさに地球を呑まんとするかの思つた。其頭部にさし登る旭の光が後光となつて、なんとも形容のつかえない神々しいものとなつて来た。其偉大さ、その荘厳さ、そのけだかさに打れあきれ、現実なのか、

幻なのか、われ魔性に取り付かれていたのではないか錯覚ではと眼をこすつてみたりした。するうちに旭は姿を現し、入道雲は形を乱して来たのであつたが、世にもこのようないみじき景観があるものかと其年の元旦は誠に偉大な元旦であつた。

雪が多かつたようで、入学式当日も校庭には三〇センチ位の雪があつたし、始めての夏休みが始まるとういう六月の終りか七月の始め頃まで校舎のかげには煤煙によこれた雪のかたまりが残つていたように思う。

夏休みが始まると、級友の多くは思い思いに、郷里へ、内地へと急いだ。私は方向をかえて樺太旅行を思い立ち、行ける所まで行くべしととうとう敷香まで脚をのぼしたことがある。今はもう行くすべもない樺太東海岸の小さな町の名がおぼろな記憶に残つて居る。北の果てのおもい出である。

私の遍歴

八家 要

(昭七)

(神戸支部)

昭和四年、緑丘入学の年は格別に

緑丘時代は橋本さんの早口の商業簿記に困り、糸魚川さんの銀行簿記、実習は帳尻の合はぬまゝに卒業さしてもらったが、昭和三十年の暮れには銀行屋として筑紫の果てに転勤と相なつて居た。九州の勤務は恰度二年半、おかげで名所は大体見学の機を得たことはまことに有難かつた。日向の上椎葉の山奥に鶴富屋敷を訪ねたり、土地の古老のひえつき節を聞かしてもらつたことなどおもい出はつきないが、わけても最も印象的だったのは、薩南半島の南端長崎鼻に立つたときは往年の樺太行をおもい起し、わが日本左衛門ぶりに

年甲斐もなく感慨にふけた。

もう北海道を訪れる機会もあるまいと思つていたが、三十四年に札幌に支店を出すこととなり、仕事の関係で渡道する折を得た。昭和七年、青函連絡船で北海道に別れをつけて以来二十七年ぶりのことである。

関西ばかりで過し、緑丘では寮生活も知らず平凡に過した私など同期の諸兄の記憶の片すみにもあるまいと思つていたが、札幌在住の同期の十数名が急に集まつて頂き楽しい会食の機を作つて下さつたことはいい知れぬ喜びであつた。二十七年間の年月の隔りは数分のうちに消え去り友情の有難さをしみじみとかみしめたものである。

当初は小樽行きは全然予定していなかったが、同期生との語らいで如何しても一度小樽の街への慕情もだし難く、翌日早々にそれこそ時間を盗んで小樽にとび一時間ほどの間に懐しい街をタクシーでかけ廻り、地獄坂を登り想い出の校舎をカメラにおさめた。あの本館の玄関に通ずる坂道で菅さんが、われわれ内地から行つたスキーの初心者に手ほどきして頂いたことをまだ間もないことのようにおもしろい起しながら丘を降りた。

二十才への台がわりは小樽で、三十才へは北支の郵戰戦線で、四十才へは終戦直後の名古屋でと、人生の年輪をきざんで行つた。勤めの本拠の關係で関西以西を主として転々として居るため同期の諸兄にもお目にかゝることも全く少ないが、神戸の

一隅から諸兄の御活躍ぶりを、緑丘紙や新聞紙上で懐しく且つは羨しく拝見している。

次回は三菱地所株式会社取締役総務部長中田乙一氏(昭七)に御願します。

六十代の幸福

現在の私は七〇点位

広岡 一男

(大八)

(東京支部)

友達の大部分は、既に還暦を過ぎている。会うと、よく、こんな話が交わされる。

「Aは、まだ現役でやつて居るね。俺達の内では、彼が一番幸せそうでないか。」

「俺はBの方が幸せだと思ふね。彼は重役になれず、五十五で停年退職になつたが、親思いの息子のお蔭で悠々自適の生活をしている。いつ会つても幸せそうな顔をして居るよ。」

六十代の幸福は何か、人によつてそれぞれ見方や考え方が違ふと思うが、私は、次のようなフアクターで現在の自分を自分が採点してみた。

(カッコ内の数字は満点)

第一 健康 一五(二〇)

何といつても健康が第一だ。数年前会社をやめてから調子が好くなり、この頃では、何を食べてももうまいし夜もよく眠れる。肩がこるとか、頭痛したりすることもない。頭は益々

禿げ、齒も最近になってメッキ悪くなつたが、耳や目は若い時と交りはなく、老眼鏡がなくても夕刊位は読める。そんなわけで、一五点(満点二〇)位はつけてもいいと思ふ。

第二 妻 一八(二〇)

所謂出世もしなかつたし、金儲けにも縁がなかつたが、妻には恵まれたと感謝している。小樽の女学生時代からの恋女房だが、キレイ好きで、働き者で、世帯持ちもよく、貧乏にも決して不平をいわない。最近髪の毛が白くなり出したが、しかし、私の慾目かは知らぬが、同年配の婦人と較べると若々しく見える。

第三 収入 七(二〇)

恩給とか、年金とか、或は地代、家賃など、特定の収入のある人は別だが、私のような一般サラリーマン上りには、月額三千円余の厚生年金があるだけだ。だから相当の蓄財がない限り、絶えず生活不安に脅かされる月々の生活費に窮するようでは悲惨の極みである。

幸か不幸か、私は妻と二人きりの暮しだから、贅沢をしない限り、月々の生活費も大してかゝらない。しかし、配当や利息で賄うためには、生活費(月額)の凡そ二〇〇倍の元金を必要とする。ずなわち、仮に、月五万円的生活とすれば一、〇〇〇万円、月三万円としても六〇〇〇万円の資産がなくてはならない。しかも、金利は低下の傾向にあり、消費物価はどんどん上昇しつゝある。僅かの蓄えしか持たぬ身には心細い限りである。

ある。

第四 子 一五(二〇)

娘二人。それぞれ平穩な家庭生活を営んでいる。二人とも速方に住んで居るが、時々会いに来てくれる。その点親として申分ないが、慾をいえば、一人でも男の子がいてくれたらと思うことがある。

第五 趣味 一七(二〇)

引退して急に老い込む人がある。それは、その人の心の持ち方にもよるだろうが、何か一つ趣味を持つていたらと思われる場合も少くない。私は、何にでも興味の持てる質で、毎日退屈するようなことは全くない。特に私の熱中しているのは囲碁だ。やればやる程面白く、好敵手となら終日対局しても倦むことがない。金はかゝらぬし、頭腦的運動になるし、幾つになつてもやれる。私も、伴先生のように、これからも生涯この道を楽しむつもりである。(晩年の伴先生とは、よくお相手をした)

以上五項目の外にも、職業・友人・親族・家・信仰など幾つかの項目があると思ふし、また、各項目のウエイトの置き方にも色々異見があると思う。しかし、紙数の關係もあり、こゝには前記五項目に絞り、そして計算の便宜上、各項目共二〇点の一〇〇点満点とした次第である。諸君も一つこの方式で採点して見て下さい。

次は神戸の福田誠君に頼みます。

たわごと

八木 安 (昭一四) (名古屋支部)

緑丘を出て二十有余年、長い筈のこの歳月が実に短かく感ぜられる。私は昭和十四年卒、現在名古屋の東海高等学校の英語教師を勤めている。社会の片隅で黙々として「人造り」に専念している一本の「埋木」というと多少実感が湧いて来る。その「埋木」に自らライトを当てて浮彫りして拡大してみようと思うと、先きにインキが自らにじみ出て来る。

私は緑丘を出て九大法文学部一愛知時計電機株式会社一入隊一終戦一社会の激動一そして急転一教職に入り東海高等学校の英語教師となり現在に至っている。

私の「人造り」に専念する「場」であるこの東海高校は私立であり、大学進学の結果にかけては全国有名校の一つである。名大百名、東大十名余、京大三十名、慶応大八十名、早大六十名余、一ツ橋大数名、東工大数名、名工大三十余名……毎年大量に大学に送り込んでいる中学、高校一貫教育の六年制の学校である。この学校で英語を教えるもう十八年になる。緑丘卒業生の中で教育畑で働いているといえれば珍しい方である。緑丘時代色々の先生に御厄介にな

った。時々恩師の著書だかと研究発表に接し懐しく思っています。特に私的にまで御厄介になった先生は故中村先生(英)糸魚川先生(金融)花村先生(西、英)原岡先生(漢)ストリー先生である。皆文通もし、戦後直接お会いして旧交を温めさせていただいているが、原岡先生のみ、何か御手紙を出す機会を失って本当に申し訳なく思っています。この機会に謹んでお詫び致します。

我が母校も新制移行に当っては小樽商大となり、全国稀なケースとなった。他校との合併でも連合でもなく独自の個々の力で愈々発展して行くことを切に祈っている次第である。高等学校の教育畑で大学進学を取扱っている子弟の教育、子弟の能力、養、家庭の環境、両親の子供に対する教育理念と態度等の重要なことが身を以て感ぜられる。現代の教育は昔とは大きく変化している。今ここでは難しいことはいわぬ。高等学校の教育は高等学校で始まるものではない。中学、否小学校児童の就学以前から始まっている。ここに家庭の教育の重要さを特に感ずる。子供の物事に打込む能力、考える能力、忍耐力、広い視野への閃き等、どうしたら幼い子供達にそれが身につけられることであるか。そのことに関連して次の二つのことを最少限家庭に守っていただきたいと提唱したい。

(一)出来るだけ読書の習慣としてそれを纏める力を養いたい。古今東西の名作の easily されたものの子供

読者だより

去年の春に子母沢寛氏が「射裡昔がたり」を著して亡父善蔵の弓を追想して下さいました。一筋の道を極めることの難さを痛感されます。今さらに忘れたりとは言いがたし父の残せし一筋の道

大平善梧(大一一五) 「註」「射裡昔がたり」は文芸春秋昭和三十八年五月号に掲載。

緑丘につながる無限の嬉しき、それもこの頃は、罰があたるぞと居ても立っておれませぬ。

中野清一(大一一五) 私は昨年十月スリースコアアンドテン(七〇才)となりました。これからはオクトウチネアリアン(八〇才)をめざして進むこと、なります。小林象三

ケネディの死

山本 俊雄 (昭一三)

(東京支部)

その日 陽も翳りて 悲しみ 地を覆ふ 慟哭 悲嘆 悲愴 かな 言葉を知らず その精を 蘇れ 秋日 なほ寒く アーリントンへの列は続く 不滅の功を讃えて 久遠の火 燃ゆ その霊よ 安かれ

向きの本でもよい。出来るだけ幼いときから沢山読ませたい。

(二)テレビは子供の知識を広くする。しかし視覚、聴覚の両面から入るので「カン」の鋭さは増すけれども纏める力は増さない。時にはラジオを静かにきかせて聴覚のみより来る話しを聴かせて、それを子供なりにききながらまとめる訓練を、ききながら想像する力を、きき通す忍耐力を養いたい。こうすることによって学校に於て学ぶことに対する素地を幼い時から確りかりと作りたいものである。以上のことが教育者というか、教育労働者というか、その私の各家庭に対する行なっていただきたい最少限の二大提案である。

次は野村鉄太郎氏にお願いします。

まんびつ執筆者

- (大三) 高橋徹男、下吹越栄吉 (大六) 伊東小四郎 (大八) 戸井正三、大野純一、三好長次、増井得三、谷本朋次、郡菊之助、西村百太郎、松本義一、広岡一男 (大九) 菅谷重平、奥村義信、小島憲市、奥田直 (大一一) 宮地邦介、小橋庸三、杉山昌作、神沢重治、梶川亨司、功刀泰重 (大一二) 田中弥三郎、塩谷精一郎、古関周蔵、大久保鹿式、大井義郎、渡辺一夫、小河成美、池田繁正、田中実、穴釜升夫、玉井武、日南田美文、佐藤信雄、若林周五郎 (大一一四) ほろにが太郎、片岡亮一、小武海鉄郎、松原治郎、森下弘、北村良吉、桐田鉄郎 (大一一五) 増田常次郎、中野清一 (昭二) 黒羽秀夫、牧野吉男 (昭三) 佐竹繁寿、樋山三郎 (昭四) 小山健児、湊静男、高橋一男、玉井英夫、宇山慶三 (昭五) 池田啓助、井藤久也、吉川友記、北村太治郎、横井七之助 (昭六) 八家要 (昭七) 土岐秀雄、本間広松、小池三郎、高見美雄、会津幸雄 (昭一〇) 篠崎万治郎、若月雅司、北村匡弘 (昭一一) 浅野潔、土屋龍郎、木下

- 春雄、三崎嘉郎、島崎保信、中尾弘、中道良徳、川原俊一、松井要吉、進藤彰、越崎清二、中木平三郎、丸山一郎、紫竹亜津視、秋葉隆一郎、墓目英三、本間誠一、鎌田正三 (昭一二) 内藤好生、皆川荘一、西谷作太郎、矢野正郎、宮内美雄、木内武之助、牧田恒雄、本間英作、森川正明、石川孝一、浅田厚 (昭一三) 江川裕一郎、若山永太郎、木村章三、山本俊雄、松ヶ野寿夫、丸山弥、平木勇三、金垣英雄 (昭一四) 伊原利勝、大沼誠治、北村幸、谷英純、沼田博、太田正勝、志岐雄雄、河西辰男、沢村薫、石黒政夫、北条恒一、三浦正、飛塚誠一、竹島篤二郎、金井勇、八木安 (昭一六) 相原正美 (昭一六後) 中村平之助、小林芳美、松村克巳 (昭一七) 榎谷真一、長尾昌弘、桑野泰次郎、阿部敬作、越智直行、山田光男 (昭二二) 牧口富伍、リトル・ラン、ドナア、服部奎吾 (昭二五) 北野巧 (昭二九) 古内一成 (昭三〇) 石津洋三 (昭三一) 小田島和夫 (昭三五) 佐藤良雄、本前勝支朗、長津行高、猪浦淳一 (昭三六) 神田隆志

「緑丘」出版を遅らせる!

まんびつ執筆者に御願い

まんびつ五人集は一人でも執筆が遅れますと、それだけ編集が遅れ、そのため沢山の愛読者に迷惑をかけます。書きたくもないものをバトンタッチで書かされるのですから、御察し申願ひ申し上げます。

【五〇頁から】

当日は生憎ドシャ降りの悪天候であつたが関西勢の森下、三浦、畑を加へて元氣な十六人が集つた。場所は二子玉川の豪華な富士観覧館で進藤君の肝入り丈けあつてお狩場焼料理のデラックス版。会館は進藤君が在米中の知人の経営で名ばかりの取締役もやっていると、今度もまた先生に迷惑をかけたようだ。卒業四十年ともなれば白くなるかきれいに禿げて還歴の貴録を示しているがヨク見ると小樽時代の顔が浮彫りされて来るから面白い。集つた連中は元氣な点では学生時代と少しも変っていないと自慢しているようだが「年には勝てないよ」と小川君(中流製薬社長)は学術映画「老化に挑む」を試写してくれて「OZ」(若きを取戻す新薬)を寄贈してくれた。また森下君(日本新薬社長)からもローヤルゼリーの「アピ」などの種々の新薬を頂戴した。全く老

(畑記)

異動

栄転

- 平賀泰正(昭一一) 日本不動産管理(三菱鋁業) 東京都千代田区丸の内二ノ二(丸ビル八階)
- 信田英吉(昭一三) 三菱銀行検査部(三菱銀行札幌支店) 東京都中央区日本橋大伝馬町二の一大伝馬町ビル
- 山本博(昭三五) 新宮商行東京支店分室へ
- 東京都江東区深川加崎町二番地 大沢一男(昭八)
- 埼玉銀行経理部長(熊谷支店長) 滝沢七郎(昭三)
- 東洋電機製造(株)大阪営業所駐在取締役(大阪市北区角田町三十一番地) 阪急航空ビル五階
- 松岡卯之典(昭一二) 神戸銀行ニューヨーク支店長 土岐秀雄(昭八)
- 三井銀行広島支店長(神戸支店長) 三井銀行研屋町七七
- 竹井虎男(昭七) 大成冷熱工業(株) 東京都新宿区市ケ谷八幡町一五
- 川上俊明(昭三三) 北海道拓殖銀行馬喰町支店(大阪支店) 東京都中央区日本橋横山町四番地
- 松村清一郎(昭六) 専売公社高槻工場長 高槻市芥川二四
- 吉田荘太郎(昭一五)
- 三井物産札幌支店長取締役(砂糖部長) 石黒政夫(昭一四)
- 野村証券(株)西部本部長(札幌支店長) 横山秀男(昭八)
- 北海道炭礦汽船(株)北海道営業所 札幌市北一条西二丁目 三輪栄作(昭三六)
- 玉野注射器製作所 東京都板橋区中丸町十八番地 横山為裕(昭一二)
- 興国人絹パルプ(株)醸酵化成品事業部長(興国人絹パルプ(株)大阪支店長) 東京都港区田村町一ノ一 橋田和道(昭三四)
- 日新火災海上保険(株)総務部 大阪 市北区梅田町二七産経ビル五階 高橋正敬(昭一一)
- 太陽火災海上保険(株)横浜支店(大正海上火災保険(株) 横浜市中区住吉町六の七八(大清ビル) 田上東福(昭一二)
- 日魯漁業(株)取締役社長(副社長) 高野憲一郎(昭一三)
- 丸嘉機械(株)東京支店長取締役に 林文平(昭一三)
- 柳上野へアリング商会(ナチヘアリング販売(株)) 東京都台東区御徒町三ノ一九
- 河野通雄(昭五) 新井組東京支店(神戸銀行) 小原芳春(昭三五)
- 東洋レーヨン株式会社販売サービスマ部東京販売促進課へ 浜浦英祐(昭四)
- 三菱電機(株)東京商品営業所へ(東京都千代田区丸の内二丁目十二) 丸山一郎(昭一一)

住所変更

- 北海道食糧産業(株)へ(旭川米穀名寄支店から) 山本博(昭三五) 東京都豊島区巢鴨五ノ一、一〇九 馬場徳太郎方
- 小出文夫(昭一六前) 名古屋市中区和区川名山町一の一 岩島博(昭四)
- 札幌市美園八条七丁目五五二番地(北向) 石田興平
- 京都市北区小山上内河原町十三 田中弘康(昭四)
- 東京都杉並区下高井戸二の四三八 小橋庸三(昭一一)
- ☆東京都武蔵市吉祥寺北町三丁目七の二六 丘村良朔(昭一一)
- 大阪市生野区南生野町一ノ六八 岡部良造(昭三三)
- 東京都北多摩郡国分寺町字平兵衛新田八六 小林芳美(昭一六後)
- 越谷市瓦曾根一〇二四番地の二五 越谷南団地一六五号
- 佐々木周一(昭四)
- ☆東京都中央区松ヶ丘二丁目十一番十一号 田中修吾(昭一三)
- ☆東京都渋谷区松濤二丁目七番ノ八 丸山一郎(昭一一)
- 札幌市琴似町宮の森五〇三番地の二 山崎博(昭一六)
- 武蔵野市桜堤二の一七〇四 (☆は町名又は番地呼称変更)

事務所移転

金垣英雄(昭一三) 太平工業(株)(東京都文京区元町二丁目七番地)へ

次号は三十八年度最終号

三十八年度もこの特集号を以て第五号(通巻三十五号)となり、約束通りあと一号で終らせていただきます。次号には三十九年度申込用紙(振込用紙)を同封いたしますので、お忘れなく御申込いただきますようお願い申し上げます。

途中から御申込下さいますとバックナンバーが御座いませんので、編集部も困りますので、印刷部数が定まりませんので早目に願います。

原稿についてはお願い 原稿の字はカナ釘流が最高です。一行十六字で願います。

「緑丘」発行月は奇数月です 「緑丘」の発行月は奇数月(五、七月、九月、十一月、一月、三月)六回です。二〇頁を以て標準頁とします。

増大号は場合により合併号(二ヶ月分)として発行することもありますので予め御諒承願います。

芭米地先生長寿祝賀会

S.38.11.9

於迎賓館



芭米地先生の長寿を祝福して集った同窓諸兄

芭米地先生御夫妻

いつまでもすこやかに

去る十一月九日(土) 芭米地英俊先生長寿祝賀会が既報の通り芝白金迎賓館で開催された。

当日は先生の長寿を寿ぐように空もからりと晴れ渡り、菊花は薫り、迎賓館の庭、池、黄ばんだ樹林を小鳥も嬉々として飛び交う。ドイツ・リュブケ大統領が迎賓館に滞在中であり南門へ通ずる長い静かな道を会場へ急ぐ、館内は静寂、人のさ、やささえ聞えぬ。

会場入口には神田事務局長、小貫武副支部長、高橋亘、中尾弘、武岡達良、赤津俊樹四氏委員の他女性二名もお手伝いに見え、手落ちなきよう万端の準備中であった。午後二時には百余名の祝福する同窓の人々が厳粛な面持で入場して来る。受け付けを通過と忽ちくつろいだなごやかな空気にとけ込んで久々の語り合いがはじまる。

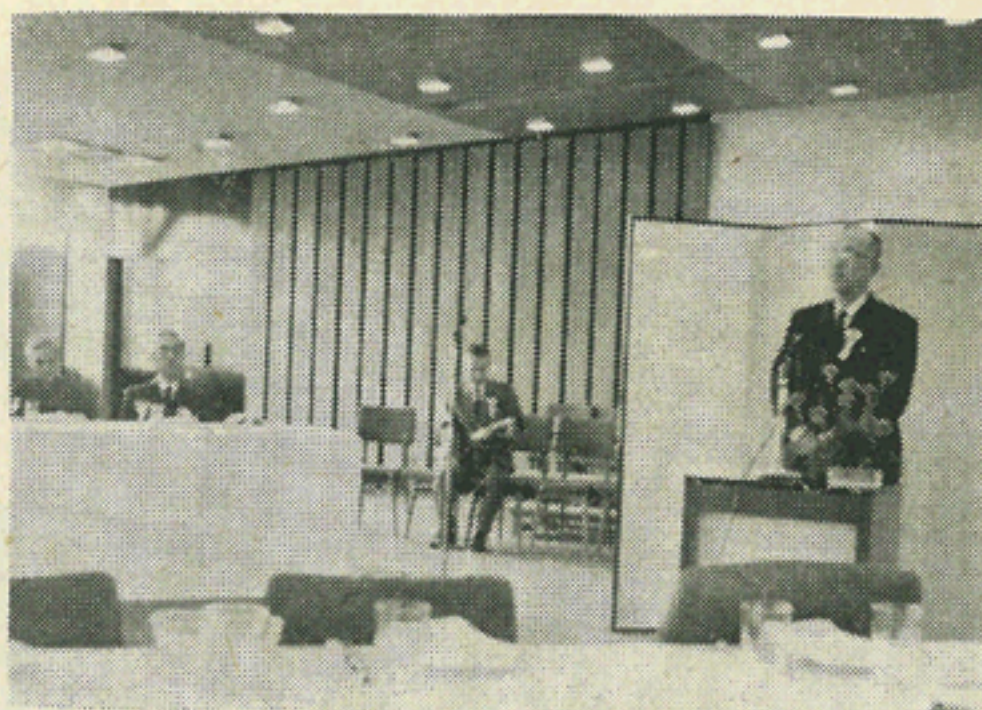
大野前学長夫妻入場、照り映える秋の光を浴びて来たせいか、頬はほんのり赤くそまり、続いて加茂学長夫妻も入場アメリカから帰朝した許りで、まだ母校へ帰って居られぬという。

主賓芭米地翁夫妻入場、なつかしく数名の同窓がかけ寄り、会話が続き、その後にまた数名御祝辞申上げ

ようと待機、御夫妻の前進をはばむ、誠に美しい風景である。 定刻も過ぎ三時、小貫委員の司会で祝賀会の幕があいた。上村(東京支部長)委員長の開会の辞が堅い空気をほぐしてくれる。 小樽高商時代の第二寮舎監であった先生のおもかげがしのばれて感無量である。とてもお若く七〇才位、人生百二十才説があるが、どうぞ益



受付風景



先生お芽出とろいぎいます
佐々木理事長祝辞



記念品を受ける先生夫妻

々お元気で先生のホープのみならず
長生のホープであっていただき度
と結ぶ。

次いで佐々木理事長の祝辞、五〇
年前、英語の講義の俊厳、全文を暗
記させて、その指名されるのが、こ
わかった事、柔道着をつけて道場に
現われ自ら進んで柔道をされたあの
厳格さの躰が今日の校風の基となっ
たものである。

かつて衆議院議員、参議院議員に
御当選になったが、全て国を憂いて
の念願に他ならない。今後共長寿を
重ねられて同窓会の相談相手となり
御指導、御鞭達を御願いしますと祝
辞を述べられ、上村委員長から苦米
地先生御夫妻に記念品金杯の授与が
あった。

これに答えて苦米地先生は静かな
口調で人生設計とは仲々自分の計画
通り行かぬものである。私もはや今
年八十才を迎え戦後の満才では十二
月一日を以て七十九才を迎えます。
本日このお芽出度い席に家内までお
招きいただき心からお礼申し上げま
す。それは小樽の学校だけではなく
この人、あの人に私はお礼を申し上げ
度いと前置きして人生設計通りに全
ては行かぬ事を小樽高商へ赴任前の
嘉納治五郎先生、初代渡辺龍聖先生
との交渉経過からはじまる。渡辺校
長から学校の絵ハガキが送られて来
て、次には手紙が届けられた。その
内容は丸善で好きな本を買って勉強
して居ってくれ、その代金は学校へ
振替えて来ていただき度という。こ
れには苦米地先生もコロリと舞入っ
て小樽への赴任を決めた(辞令と旅
費六十三円という大金が届けられた

エピソードを話される。

さて小樽へ赴任して着いたのが木
賃宿、渡辺先生の使が来て恐縮し乍
ら越中屋へ案内していただいた話、
渡辺先生から夕食にさそわれ商業英
語をやること、読めるか、書ける
か、話せるか、という事で兎に角商
業英語をやる事にさせられ、教務課
にあった東京高等商業学校の先生の
書いた本二冊を借りて勉強する事と
なった。これがそもものはじまり
で、ついに「トマサン」の頭をた、い
て見ればコレボンコレボンの音がす
る」という事になった。小樽をコレ
ボンの日本一にしようという決心して、
暗記、添削、清書に重点をそ、い
だ

さて次に校長室に入ると国松教授
が、この学校にあばれん坊が二人居
つて手におえぬ、苦米地さん、あな
たに委かすというのが渡辺先生。其
処で道場に出掛けて行き、羽鳥、栗
原、飯川の三人を相手に柔道で投げ
飛ばしたと武勇伝に及んだ。しかし
何れも下宿に呼んでビールですぎ焼
をやって心がとけ合い何れも皆よい
心の持主であった。と学校創立四、
五年の想い出をしんみり語る。なお
続いて軍教問題、カンニング問題等
辞表を出した話、糸魚川、大野両先
生に校長になるための教育をやって
来たが、文部省の要求で糸魚川先生
を手離したこと、一方文部省で大野
先生を校長にする事の交渉が成立し
た事。

のけた。今から振返って見てこん
な嬉しい事はなかったと、その頃相
互銀行を創立した事もまた想い出の
一つである。

「最後に皆さんには選挙のため度
々御迷惑をお掛けして申訳ありませ
ん。皆様の暖い御親切、御好意に甘
えていてはおられぬと思っております
した矢先またまた今回のお話で御
好意に甘えて、人生の最後を祝って
下さいます方々、御繰り合せ下さい
ました方々、御出席出来なかつた人
々にも、どうぞよろしく御伝え下さ
い。私共の子供等にもよくこの御好
情を云い伝えたいと存じます」と万
雷の拍手の中に御挨拶を終えた。

祝電披露、乾杯にはじまってパー
ティに入る。待期中の美麗どころが
ずらりと各テーブルに進む。頃合を
見て大野前校長が立ち苦米地先生か
ら校長のバトンを受け継ぎ、その時
「大野君必ず大学に昇格せよ」と激
励を受けた。全国の同窓会は勿論、
東京の同窓会の大きな力によって大
学昇格が出来た。苦米地先生業をの
みながら養生を続けて百二十才の祝
賀会には、これにも増した盛会を開
催されますよう御願いしますと結ぶ
続いて加茂学長は朝日ジャーナル
に掲載された同族意識について良い
意味の育てる同族意識であり度い。
苦米地先生には直接の教えを受けて
はおらぬが、この空気で二、三〇年
前に居ったような気持に落ち付かせ
ていただいた。名古屋も和歌山にも
ない唯小樽にだけある小樽の純粋さ
こそ同族意識の結晶である。
苦米地先生には益々御健在で何度
もお祝いされます事を祈ってやみま

せんとお祝のことはを贈られた。
会場にしつらえたニギリ寿し屋か
ら寿しが美人達に運ばれて各テー
ブルを賑かにする。すでに秋の日はと
つぶり暮れた。
用意された舞台から東京一流の芸
妓による三番叟、越後獅子が披露さ
れ、ますますこの祝賀会を賑かに会



①

員諸氏の談笑も声が高く、程良い
酔、途中でマイクに立った元教授大
谷先生の苦米地先生喜寿祝賀論文集
の出版紹介も会場の賑やかな歓談で、
前列だけに聞えただけである。
雑段の三学長御夫妻もにこやかに
芸事のあてやかさに見とれていた。
何時終るとも知れぬ楽しい夕。

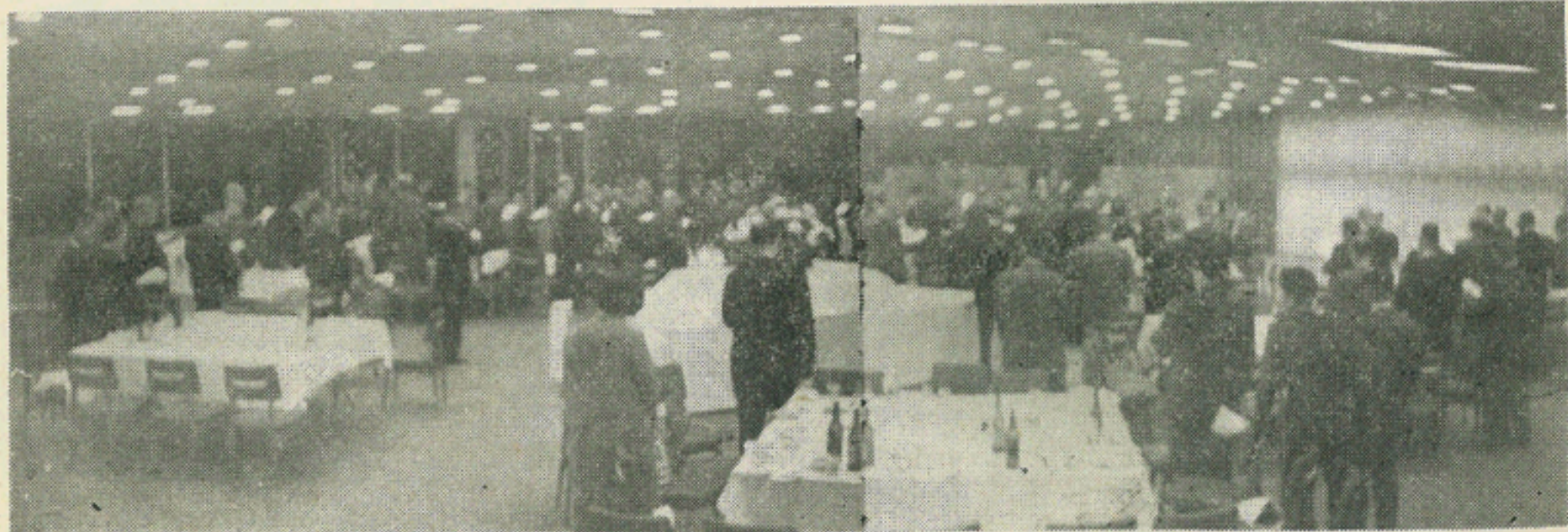


②

校歌合唱、万才三唱で、この記念
上から
①金杯を前に
②三学長夫妻ら
③声高らかに
④今宵歌え



③



④

すべき祝賀会の幕を閉じた。この蔭
の舞台裏の功労者野口正二郎氏に感
謝の意を表したい。(墓目英三記)

書評

人生の潤滑油

神沢重治氏の寒鮎に寄せて

冬、鮎

このたびは神沢重治さんの「寒鮎」の御寄贈をいただきました。これは以前の「残照」につづく同氏のほのぼのとしたお人柄のあらわれであり深くわれわれの心境を温めたるものと信じます。氏は現在、社長と同時に教育会長であられ、今回の著書も洵に時宜を得たものであり各篇とも直截簡明、しかも枯淡の味が豊かで同氏が古今の文学、漢詩、短歌、美術、史実、演劇など多方面に亘り、その考証に如何に造詣が深いかが察知出来ます。

随筆は短かい方が効果的である。とはかねがね小生が信じて居るところですが、氏の文章を一篇が二頁に限られ、読み易く、しかも各々が珠玉のような閃光を放っていることは仲々美事です。博覧強記の氏は氏とつながらりある人々の風格や談論の課題等を微に入り細を穿って記録して居られるのは驚嘆に値します。

Brevity is the soul of wit(Ham) 試みに本書「片影」十篇を一読すれば登場人物のヒューモアとペーソス

の面白さに、読者は思わず巻を捲くことが惜しい位になるでしょう。「随想」三十篇、それぞれに筆力鋭く市当局を動かした名篇多く、また「旅情」十二篇、こゝに漲る旅愁はそぞろ読者の琴線に触れ、筆者が心豊かな詩人であることを肯定させます。

この春、われわれが浜名湖を周遊した折、神沢氏は名刺の絵画、彫刻、関所趾の来歴と共に眉雪の老僧をうたい「落花深きところ南朝を説く」風情を物して居られる。

神沢氏の麗筆になれば、人生の周辺にあるあらゆる事物が生々躍動して来るから不思議です。この頃の刊行物の第一に随筆を載せる傾向があるのは、現代人が如何にかような読みものにあこがれているかの証左であると思えます。

本書によって学ぶこと極めて多くわれわれの記憶の底に薄れたものがはつきりと甦って来ることが深い喜びと言えましよう。ただいま、小生は克明な氏の一文一文を日課のように、毎日一篇づつ、ゆっくり味読して、おろかな著者の心境に共鳴し且つ浸りたいものと念願して居るところです。それは本書が真に人生の潤滑油に他ならないと信じて居るが故に。

(三八・一〇・二二 梶川亨司記)
なお、発行所は富山県礪波市本町二ノ一七、神沢重治方(非売品)

この現実を直視せよ

若山 永太郎

(昭一三、丸嘉機械(株)常務取締役)

井上紫電先生(現南山大学教授)の「産児制限亡国論」(「自由」十一月号所載)読後所感

養目英三兄より、「大変参考になると思うから読みなさい」といわれて「自由」十一月号を拝借して、井上先生の「産児制限亡国論」を一気に読ませて戴いた。

かねて、我国労働力の問題について、あと数年すると労働力不足が大変な状態になり、特に中小企業の求人難は極めて深刻な状況になると聞かされて居たが、井上先生の論文を引用すると、

別表の示すように「現在の中学二年生に対し、中学一年生は、三十五万人、小学生は一〇二万人も少い。昨年生れた子供総数は中学二年生の五九〇しか少ない。昨年の出生率一六・九は世界最底の部に属し、世界人類の平均出生率三六・〇(国連統計)であるとき、日本は遠からず大國の座から顛落する運命にある。」

と先生は先ず一大警告を発して居られる。先生の論文を拝見して、「これは大変だ」と冷水をぶっかけられたようなシヨックを覚え、思わず襟を正した次第である。労働力不足の問題はやはり需要供給関係によって、我国産業界の成長発展による需要の増大が労働力不足の有力な原

因であると、浅学非才の私は、私なりにそう考へても居るが、其の有力原因の一つが、人口問題にあることを知らされた。そして先生は特に中小企業に関して、出生率の低下と進学ブームにより、

「中学で卒業する若年労働者数は一層少減する。これではせつかく中小企業基本法ができて金融その他の面で面をみようとしても、遠からず労働者難から到壊する企業が続出することがおそれられる」と恐る可き予言をされて居る。

我々中小企業の経営者は、早速今から其の対策に腐心す可きである。予てセミナー等で昭和四三年頃は大変な求人難になると聞かされて居たが、出生率低下からくる、斯かる現実を、そして好むと好まざるに拘わらず、やがて当面するであろう難問題をあらためて直視せねばならぬ。

先生は続いて説く――
「少年数の減少が非行少年を激増させて居る」と、そして
「少く生んでよく育てる」といふ産制論者のキャッチフレーズに対して鋭いメスを加えて居られる。更らに――
「避妊技術は性行為を専ら享樂の具たらしめるものであり、(性の遊戯

わが国の出生数および出生率

年 度	出生数 (単位千)	出生率 (人 千につき)	昭和38年
昭和22年	2,679	34.3	中卒
23	3,682	33.5	中3
24	2,697	33.0	中2
25	2,338	28.1	中1
26	2,138	25.3	小6
27	2,005	23.4	小5
28	1,868	21.5	小4
29	1,770	20.0	小3
30	1,731	19.4	小2
31	1,665	18.4	小1
32	1,567	17.2	
33	1,653	18.0	
34	1,626	17.5	
35	1,606	17.2	
36	1,589	16.8	
37	1,616	16.9	

①昭和36年度の純増殖率、つまり子の世代の親の世代に対する割合は0.91である。
②厚生省人口問題研究所資料。右端の表は井上先生附加

化)――
「中絶の公認や、国による受胎調節の推奨が、未婚の男女をして気軽に最後の一线を踏み越えさせる結果をもたらす、それが醸し出す温泉マーカーの類廃ムードが、これに迎合するエロ雑誌類の氾濫と相まって、少年層の性的感性を歪めて居る」と性的道義退廃を慨嘆して居られる。なお先生はこの危機打開策として

「神は悔い改めた者を赦すことができる。人もまた人を赦すことができる。しかし自然は決して赦さない」一つの自然に反することをすると百の弊害が生ずる」との言葉を引用して、この論文をとして居られる。

二十五年前、小樽緑丘の合同教室で、井上先生の民法の講義を聞いた時、民法の講義の本論に入る前に、相当の時間をかけて、先生の哲学を承った。先生の真面目な立派な態度で、眼鏡越しにキラキラと眼を輝かせながら、我々ワシキ共から先生の御結婚をハヤサレた時など、顔を赤らめながら、熱心に講義された當時を思い浮べながら、貴重な先生の「産児制限亡国論」を読ませて戴いた、いや三べんも四へんも反覆読み返した。

一中小企業経営者として、そして日本国民として、乱打された警鐘を聞く思いがした。



ゆたかな香り
たのしさをのみましょう

ハチブドー酒

■丸びん・赤白各 220円

GS 合同酒精株式会社

広島支部誕生

S. 38. 10. 18

緑丘会広島県支部第1回総会 1963.10.18



昭和三十九年 岡山市で 西日本合同總會?

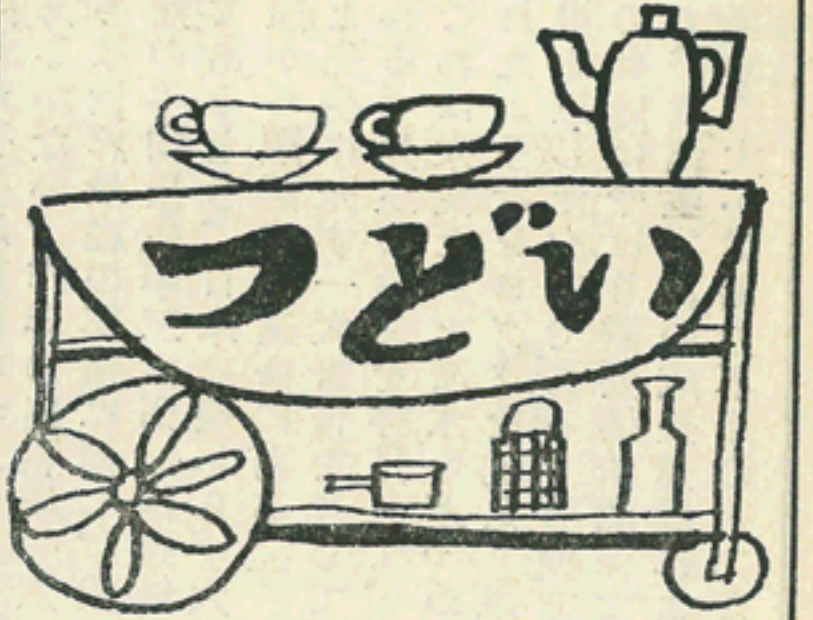
広島支部が結成された。緑丘人がよい意味での同族意識を発揮して私たちの心にあるものを大きく育て、行くために互に相寄る事は尊い事である。

中野清一氏(大一一) 紀野重仁氏(昭九) 鈴木恵三氏(昭九) 西原宏氏(昭三〇) など広島支部結成の準備打合会を再三持ち、日取りも、場所も決定した。

昭和三十八年十月十八日。場所は広銀鈴木氏の御世話で、宮島口広銀寮、早速雪印西原君がプリントを準備(名簿、案内状)し岡山支部、大阪支部代表、来広の交渉に当たった。一橋大学教授大平善梧氏(大一一)も国際法学会のため来広の情報も入り、支部結成大会の気運いよいよ高まった。遠く赤い鳥居を望む宮島の広島銀行寮は白砂青松、宏大な庭園を持ち、結成大会にふさわしい会場である。

十月十八日午後六時、岡山支部から村岡英一氏(昭八) 大阪支部から墓目英三氏(昭一一) 揃って到着、下関から田中実氏(大一一) が入場三十分にして二十名が集まる。発起人代表紀野氏の開会の辞に打合の経過を報告、中野清一氏から広島支部の発足について「かねてから林正己氏(大一一) 友沢和一郎氏(昭二〇) の二人が計画されて居り、その設立については少なからぬ御努力をされた。今日ここに結成総会を持つに至った事を喜ぶと共に二人の努力が今日実を結ぶに至ったものである」と挨拶された。祝電(東京支部、福山出張中の鈴木恵三氏)を披露。支部長、副支部長、幹事の選出に

入り、岸、杉本、藤野、小林、西原の五氏が紀野世話人からの指名で別室にて協議する。中野清一広島支部長に決定す。支部長の指名で副支部長に鈴木恵三(昭九) 紀野重仁(昭九) 幹事小林平治郎(昭一六) 西原宏(昭三〇) に決定。会費の件も討議されたが結論が出ぬまゝ、役員一任、墓目氏が大阪支部から携帯された母校五〇周年記念作品の「我母校」のカラー映画を上映した。なつかしき緑丘、我母校、在学当時の青春をよみがえらせるこの映画に、食い入るように見つめる会員、そして時折画面の教授の面影を熱くして。映画が終わって電気がついた時ハッと我に帰った。いよいよパーティーが開始され、岡山支部村岡氏から祝辞をいたたく大阪支部墓目氏は大阪支部の行事を披露、合せて「緑丘」編集の苦心談も語られた。大平教授到着、国際法学会のパーティーから抜け出してこの結成大会に御出席された事を中野新支部長から紹介あり、大平教授は声高らかに学園の年輪示す丘の上のボブラの大木仰ぎざらめやもと朗詠、五十余年の伝統ある母校をたゞえる。来年(昭和三十九年)の国際法学会が岡山で、十一月に開催される事を聞き、再び大平教授を迎えて中国、四国、合同大会の開催を決議し、岡山支部が中心となってお世話する事も村岡岡山支部代表が承認された。歓談尽きず、十時近くまで語り合い、緑丘歌、万才三唱を以て解散した。



大一一 東京在住者の集い

十月二十八日(月) 大正十四年卒同期生の集りが東京都世田ヶ谷の富士観二子園にて、進藤、菅沼両君の御世話で開催された。

参加するもの十六名、岡山県から三浦栄君を始め関西から畑君、森

下を含めて、殆どが東京在住者で占められたが、開会に先立って中滝製菓社長の小川君から同社新発売の、「間脳賦活剤」〇Zの学術映画上映があり、年輩柄熱心に觀賞した。小川君が業界界に入ってから後にはじめてである。大家向新薬の発売に際して、彼の示す熱情と積極性に一同感激した。今回の集りは比較的小地域、小人数であったが、北海道其の他からの参加者もなく、また、諸先生方の御来臨も得なかつたが、外吹く、二十メートルの強風も何のものかわ、会合の熱は時刻と共に盛り上り、恰も進藤君が船

- 椎野良之助君(三金建材工事社 長)
- 小柴 謙吉君(上半商事常務)
- 高橋 格君(岡田商船取締役)
- 小川 又治君(中滝製菓社長)
- 畑 信太郎君(朝日運送代表取締役)
- 三浦 栄君(三共製粉工業所)
- 原野 六郎君(岩谷産業 東京支社)
- 生方 一郎君(安田生命)
- 米津 正一君(日本製鋼所常務)
- 長谷川政夫君(トウシエ・ロス・ベイリアンドスマ 一ト事務所)
- 森下 弘 (日本新薬社長)
- 尚、広川博久君は資金的参加をせられた。(森下記)

東京クラス会に

馳せ参じて

畑 信太郎

内助、外助は別としていつものなをざりにし勝ちの女房を虫干してやろうと十月十八日の緑丘広島支部総会の出席を兼ね宮島、道後へ出かける事にして来た処、東京からクラス会を開くから出て来いと案内を受けたので虫干は箱根、日光に変更してクラス会に出席した。(四三頁へ)



下を含めて、殆どが東京在住者で占められたが、開会に先立って中滝製菓社長の小川君から同社新発売の、「間脳賦活剤」〇Zの学術映画上映があり、年輩柄熱心に觀賞した。小川君が業界界に入ってから後にはじめてである。大家向新薬の発売に際して、彼の示す熱情と積極性に一同感激した。今回の集りは比較的小地域、小人数であったが、北海道其の他からの参加者もなく、また、諸先生方の御来臨も得なかつたが、外吹く、二十メートルの強風も何のものかわ、会合の熱は時刻と共に盛り上り、恰も進藤君が船

今回の会合は三つならば次回の卒業四十周年の集いへのリハーサルとも云う可く、語り合い、飲み分つ乾盃の間に次回の計画も立案されて行った。即ち三十九年三月二十一日と二十二日の両日、伊豆船原ホテルに於いて可及的多数の出席者を得て盛大に開催、大いに卒業後四十周年の記念を祝し、張り切ろうとの計画である。大正十四年卒業生諸君の全員参加を念願とし、地域別招集、幹事の内部指名すら行なわれた。(計画は確定後発表)

- 進藤 孝二君(三井船舶社長)
- 菅沼 雄豪君(菅沼産業代表取締役)
- 鈴木 信君(日精興産社長)
- 加藤 鉉君(武蔵会社取締役)
- 中村 惣一君(日魯工業常務)

江上トミさんの舌が……舌をまいた。

広い世界の料理をまな板の上ののせてみたいと常日頃思っている私の前に「世界の味」とマークした缶詰が現われました。何も予備知識がなかったので、またか、と思ったのですが、一つ一つ味わっている内に、この缶詰を作った人は……と疑問が湧き上がりました。かつて私が世界の旅で食べたその名物料理の味を上手にとらえて正直にこの小さい缶の中に納めてあるからです。後で聞けばこの缶詰を作るためには各国に長期滞在して研究をされた結晶のたまものだとわかって、「全くそうだ」となづきました。

江上料理学院長 江上トミ

本格的な世界料理の缶詰

世界の味

- ロシア風 ポルシチ
- イタリア風 ミートソース
- ハンガリー風 ビーフシチュー
- 印度風 ビーフカレー
- 英国風 トマトスープ
- アメリカ風 コーンスープ
- オランダ風 いちごジャム
- ポルトガル風 ママレード

¥ 700 (5カン入)
 ¥ 1000 (8カン入)
 ¥ 1500 (12カン入) があり
 ます。デパート有名食料品
 店でお買求めの上一度味を
 おためし下さい。



エム・シー・シー食品株式会社

神戸市長田区荻藻通5丁目15 TEL代(67)1245

取締役社長 水垣敏正(昭5)

広島支部結成 大会に出席して

村岡英一 (昭八)



広島支部結成大会の会場 大平善梧氏挨拶

遠く満州の曠野に在っては大陸風に浮かれて緑丘を顧みず戦破れ故国に引揚げて悪戦苦闘の生活の裡にまた緑丘を思う心の暇も持たず緑丘から三十年間行方不明であった小生、最近岡山支部の一員に加えて貰いどうして罪滅しすべきか、など柄にもない大それた考へをもって見た。

さて、先般広島支部が発足された機会に隣接支部代表としてお祝いに馳せ参じた。その頃の私の心境の一端を二、三綴って見た。

一、私自身のこと。私のような不心得者は私が最後の一人であることを見かねた。

一、岡山支部のこと。歴史の古い事の中に満足すべきでないこと、そして為すべき多くの事が残されている事を広島から学ぶことが出来た。

一、広島支部のこと。流石に中国地

方政治、経済文化の中心に相応しい多くの先輩同志が集結している総会の段取りも堂に入ったもの、今後中国、四国各支部の中心的地点であることに間違いのないこと。

一、隣接支部間のこと。交流交歓と相互刺戟により各個の支部が活発となろう。尤もそれ以前の問題として個々の支部固めが先決ではあるが、個々の支部固めには支部会員が物心両面に負担を感じず気軽に顔を合わす機会を多く持つことが大切。

一、飛比な思いつき。今秋国際法学会が、岡山に開催され一橋大の先輩大平教授が来岡される由、こんな機会に隣接支部交歓の一環として中国、四国、瀬戸内海大会を持ってみては如何？シヤレにしては大きすぎるというものか!!

札幌合同緑土会

昨年は台風9号のため実現しなかったこの会合を今年早くから小樽側相沢、札幌側木村の間で話し合い去る十一月二十七日公園通りの豊楽荘(元の渡辺兵四郎邸跡)で開催した。札幌側では手島君が出張中、井上君は前日から工合悪くなり欠席、結局今野、木村、鎌島の三人となり小樽側も讃岐君がこの所一寸健康を損じており欠席。富田、今井、越崎、相沢の四名とゲストにお招きした大野先生を加えて総数八名いささか淋しい気もしたが、久しぶりの顔合せして、それからそれへと話は尽きず、欲談相次ぎ、札幌側が十時六分の列車で帰るまで極めて和やかな

編集後記

会合を持つ事ができた。明春は札幌側にホストになつてもらう事を約して別れた。お互いに年をとるにつれ旧友に会うのが何よりの楽しみ、職業も地位も一切忘れての歓談は友なればこそとつくづく感じた。因に当市は、その日から連続

して降雪に見舞われ約三〇センチ以上もあり早くもスキーヤーは活躍しています。なお讃岐君の健康は間もなく快復され例の元気な姿に接する日の近からん事を一同で祈っています。(相沢)

皆様おめでとうございます。☆浜林先生追悼特集号をお届けします。先生がお亡くなりになりました。昨年十一月十九日丁度十七回忌を迎えました。この企画は大正十五年卒の西川正巳氏のアイデアによるもので、編集部が原稿依頼を開始したのははからずも十一月でありました。浜林正夫氏から原稿執筆、写真貸与の快諾を得ました時から編集部が企画も具体化して参りました。家が狭いので方々の押入に分散してある千数百冊の本の中から「英語の背景」と「英国文学巡礼」を探し出すのに十二月も二十日過ぎ、猫の手も借り度い忙しい日曜日に女房と二人で全部ひっくり返して見ました。「私の事よりも君の家を掃除でもし給え」という先生の声が聞えて来ます。この調子では到程見込のない事と思い、小樽の鈴木三七さん(昭八)と西川正巳さん(大一一)に電報を打って二冊の本の写真を撮影し、すぐ現像の上送って貰う事にしました。離れの書架を探している女房が一

冊だけありましたと飛んで来る。何処にあったかと聞くと一番下に横になつておったとの事。何んと皮肉な先生であらう。結局全部本の掃除を終えて出て来た最後の一冊が「英国文学巡礼」であった。

一方鈴木さんは浜林さん宅を訪宅問、東京へ貸出との事で木曾さん宅へ走り、望みの本を撮影したからすぐ送るとの事、西川さんは撮影した坊やが失敗、再度撮影して至急送るとの返事。原稿は続々入って来る。一時は何頁の本が出来るのかと嬉しいやら、悲しいやら(広告少く赤字が心配)でした。

今こうして出来上つて見ますと昨年の暮のあわただしい気持が笑い草になって来ます。

年末御多忙中に古関周蔵さん(大一一)から浜林先生の立派に表装された遺墨を貸与下さいまして、この特集号に精彩を放つて下さいました。厚く御礼申し上げます。

☆苫米地先生長寿祝賀会の模様を御贈り出来ず事を心からお慶び申し上げます。

☆毎号の二冊分に相当する大冊の校正に協力下さいました梅野卓男君(昭三五)に感謝いたします。